

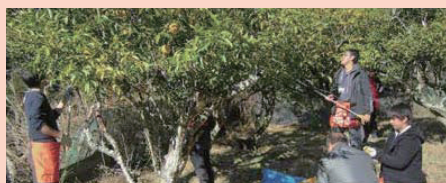
地（知）の拠点大学による地方創生事業
とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム
平成 29 年度事業報告書



次世代技術



地域医療・福祉



6 次産業化



地域づくり・観光・ICT

－ 目 次 －

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2. 事業概要
「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の
概要について・・・・・・・・
3. 事業協働機関について・・・・・・・・・・・・・・・・
4. 平成 29 年度実施会議一覧・・・・・・・・・・・・・・・・
5. COC+大学及び COC+参加校実施事業
徳島大学の取り組みについて・・・・・・・・
とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について・・・
実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの実施について・・・・・・・・
四国大学・四国大学短期大学部の取り組みについて・・・・・・・・
徳島文理大学の取り組みについて・・・・・・・・
阿南工業高等専門学校取り組みについて・・・・・・・・
徳島工業短期大学の取り組みについて・・・・・・・・
6. 協働事業
参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施報告・・・
徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～の実施報告
FD 地域人材育成フェスタの実施報告・・・・・・・・
7. 参考資料・・・・・・・・・・・・・・・・

は じ め に

「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」は、文部科学省の平成27年度「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択され、本年度で3年目を迎えました。今、徳島をはじめ我が国の「地方」は、少子高齢化と東京一極集中等により人口が急激に減少し、地域のコミュニティの中には、近い将来その存続すら危惧される状況となっており、特に深刻なのは、大学等の高等教育機関への進学時や就職時における「若者の流出」です。本プログラムでは、県内の高等教育機関、徳島県、経済団体、企業及びNPO法人等の皆様にご参画をいただき、徳島の産業振興と課題解決に積極的に参画する人材の育成と、成長力のある産業の育成による雇用創出に取り組み、学生の県内就職率を、平成27年度から平成31年度までの5年間で10%アップさせることを目標としています。

この目標を達成するために、事業協働体「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織し、徳島県において雇用創出と学生の就職率向上が期待できる4つの分野（①「次世代技術関連分野」、②「地域医療・福祉関連分野」、③「6次産業化関連分野」、④「地域づくり・観光・ICT関連分野」）を設定して、その4分野に合わせた（1）「寺子屋式インターンシップを柱とした産官学連携による教育カリキュラム改革」、（2）「地域就職率の向上に向けた協働事業の実施」、（3）「徳島県の『vs東京』とくしま回帰』総合戦略」による雇用創出」の3つの事業を推進しています。

平成27年度は事業実施体制の整備を行い、平成28年度からは、教育プログラムの開発・改善、新たなインターンシップ教育の開発、学生の創業支援事業などの具体的な取組をスタートさせ、さらに本年度は、各種取組の充実・改善に取り組みました。また、昨年10月には、独立行政法人日本学術振興会に設置されている「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業委員会」による事業の中間評価が実施され、最上位の「S評価」をいただきました（選定された42件の事業のうち5件が「S評価」）。中間評価では、①地域の産業特性を踏まえた4分野等の教育カリキュラムの教育内容が充実していること、②チュートリアル方式を取り入れたインターンシップにより学生がインターンシップ先の事業を理解しやすいように進めていること、③それぞれの事業科目に対して学生・保護者の満足度も高く当初目標に向け事業が着実に進捗していることについて、優れた点としてコメントを頂きました。これも皆様のご協力の賜物です。この場をお借りして、感謝申し上げます。

この度、平成29年度の取組の詳細を成果報告書として取りまとめましたので、ご一読頂ければ幸いです。今後も、本事業の目標達成に向けて、事業協働機関一体となって地方創生に取り組んで参りますので、更なるご支援、ご協力をお願い申し上げます。



とくしま元気印イノベーション人材育成協議会会長
徳島大学長

野 地 澄 晴

「とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム」の概要について

本事業の目的は、地元の高等教育機関並びに自治体・企業・NPO 等との間で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会（以下「協議会」という。）を組織してインターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通して、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門知識等を持って主体的に参画する「元気印」のイノベーション人材を育成することで、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指すことである。

そのために本事業では、地域イノベーションを通じて徳島県で新たな雇用創出と学生の就職率向上が期待される 4 分野（①次世代技術関連分野、②地域医療・福祉関連分野、③6 次産業化関連分野、④地域づくり・観光・ICT 関連分野）を選定して、この 4 分野に対応した教育プログラムを学内に設けるとともに、事業協働機関に設置する「教育プログラム開発委員会」にも 4 つの分科会を置いて、地域のニーズを分野ごとに把握する。さらに、産官学協働の取り組みによりインターンシップ受入企業の増加と受入れノウハウの共有を進め、申請大学の教育プログラムや参加校の教育にその内容を反映させる。また、これにより、大学以外の事業協働機関による事業への満足度 100%達成に向けて努力する。その際、インターンシップを受入機関任せにせず、事前学習からインターンシップ、そして事後の振り返りを徹底するため、課題とレポート、ディスカッションを繰り返す「寺子屋式指導法」（チュートリアル方式）を開発して導入する。この教育法の開発と普及のため、「COC プラス FD 委員会」を組織し、教育プログラム担当教員の FD 活動に組織的に取り組む。

また、既存のキャリア教育の中に地元で活躍する各分野のリーダーや OB・OG を講師とした、地域の将来のビジョンや地域で働くメリットを学生に伝える講座を取り入れるとともに、参加する高等教育機関との間で「とくしま高等教育コンソーシアム」を組織して、同様の講座や高校生向けの講座、地元企業の合同説明会を共同開催して、地域全体で学生の地域に対する関心を高め、地域に対する誇りや将来ビジョンへの認識を豊かにして、事業協働地域全体の県内就職率向上を目指すことが本事業の目的である。

平成27年度 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 ～地(知)の拠点COCプラス～

とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

徳島の課題

……●人口減少・超高齢社会●若年層人口の流出●厳しい財政状況

徳島の可能性

徳島県で雇用創出と
就職率向上が
期待される4分野

- ① 次世代技術関連分野(LED・自動車・ロボット等)
- ② 地域医療・福祉関連分野
- ③ 6次産業化関連分野
- ④ 地域づくり・観光・ICT関連分野

徳島大学

徳島大学 教育カリキュラム改革

- 全学生が地域志向科目を受講
地域の文化や地域への理解・愛着
- ボランティアパスポートの普及
課題に挑戦する元気・覇気

4つの分野に対応した教育プログラムの開発

- 専門分野に必要な能力(知識・技術の向上)
- キャリア教育科目の充実
「徳島の将来ビジョン」「徳島で暮らすメリット」2つの確信
- 寺子屋式インターンシップの導入
職業人意識とコミュニケーション力の育成

「COC + FD委員会」教育法の開発と普及

参加校

とくしま高等教育コンソーシアム

- e-learningによるweb配信授業の実施
- 地元で活躍するOB・OGによる合同授業
- 教育カリキュラム開発プログラムの導入

PDCAサイクルの構築 外部評価委員会

協働事業 地域に対する誇りや将来ビジョンの認識

- 駅前協働キャンパス授業の開講
- 学生・父兄向け「合同就職説明会」
- 「創業支援事業」
ビジネスコンテストなどの起業支援
- 「FD地域人材育成フェスタ」
- 県内インターンシップの拡充(30%増)と
企業メンターの導入
- 教育プログラム開発委員会
(全機関参画)

教育プログラム
開発担当
コーディネーター

協働事業
担当
コーディネーター

とくしま元気印 イノベーション人材育成協議会

徳島県内の39機関で事業協働体を組織

- 高等教育機関「徳島大学・四国大学・短期大学部・徳島文理大学・徳島工業短期大学・阿南工業高等専門学校」
- 徳島県 ● 12の地元企業
- 3つのNPO法人 ● 17の関連団体

事業運営
担当
コーディネーター

雇用創出に向けた事業

プログラムの政策的な支援と施策への反映

- 産学官金連携による4分野の雇用創出
 - 「LEDバレイ構想」の推進
 - 「とくしま『健康』イノベーション構想」の推進
 - 「アグリサイエンスゾーン」の構築
 - 「とくしまサテライトオフィスプロジェクト」の推進
- 若者定着促進に向けた取組
 - 地元就職促進・奨学金返還支援制度
 - トビタテJAPAN! 地域人材コース
- 地域と連携した
教育・研究活動の実施
 - 「地域連携フィールドワーク講座」
の開講

雇用創出

VS東京
『とくしま回帰』
総合戦略
(平成27年7月策定)

とくしま元気印
イノベーション人材

4つの
能力

- 地域文化や地域への理解・愛着
- 専門分野の知識・理解
- 明確な職業人意識とコミュニケーション力
- 課題に挑戦する元気・覇気

2つの
確信

- 地域の将来に対するビジョン
- 地域で暮らすことのメリット

雇
創
出

- 先端技術開発による新領域への展開
- 多職種協働による医療・介護分野の新規雇用
- 6次産業化キャリアアップシステム構築による
イノベーション展開
- ICTを活用した地域づくり、観光等の新規雇用

数値目標 県内就職率を10%増

事業協働機関について

地元の高等教育機関並びに自治体・企業・NPO 法人等で「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を組織して、インターンシップをはじめとする教育プログラム開発に協働して取り組むことを通じて、地域の未来にビジョンを持ち、地域イノベーションに意欲と専門的知識を持って取り組む「元気印」のイノベーション人材を育成し、新たな就労先の開拓を含めた卒業生の県内就職率の向上を目指す。

なお、平成 30 年度は、新たに 11 団体が加入予定であり、協議会は計 50 団体となる予定である。

機 関 名	備 考
徳島大学	会長（徳島大学）
四国大学	
四国大学短期大学部	
徳島文理大学	
徳島工業短期大学	
阿南工業高等専門学校	
徳島県	副会長（徳島県知事）
一般社団法人 徳島経済同友会	
徳島県経営者協会	
徳島県商工会議所連合会	
徳島県商工会連合会	
徳島県中小企業団体中央会	副会長（徳島県中小企業団体中央会会長）
一般財団法人 徳島県観光協会	
全国農業協同組合連合会徳島県本部	
徳島県農業協同組合中央会	
徳島県木材協同組合連合会	
公益社団法人 徳島森林づくり推進機構	
徳島県漁業協同組合連合会	
公益社団法人 徳島県畜産協会	
一般社団法人 徳島県医師会	
一般社団法人 徳島県歯科医師会	
社会福祉法人 徳島県社会福祉協議会	
一般社団法人 徳島県自動車整備振興会	
日本自動車販売協会連合会徳島県支部	
大塚テクノ 株式会社	
株式会社 丸本	
日本フネン 株式会社	
株式会社 テレコメディア	
社会福祉法人 健祥会	

機 関 名	備 考
社会医療法人 川島会	
有限会社 竹内園芸	
特定非営利活動法人 郷の元気	
特定非営利活動法人 マチトソラ	
特定非営利活動法人 グリーンバレー	
港産業 株式会社	
一般社団法人 徳島新聞社	
藤崎電機 株式会社	
四国化工機 株式会社	
有限会社 檜山農園	

平成 29 年度実施会議一覧

とくしま元気印イノベーション人材育成協議会…1 回実施

平成 29 年 5 月 9 日 (火) 10:00～11:20
報告事項 1 平成 29 年度の事業協働機関について 2 COC+事業の概要とこれまでの進捗状況について 3 協働事業の報告と展望について ① 参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」 ② 企業ガイダンス ③ FD 地域人材育成フェスタ ④ 創業支援事業 4 徳島大学の実践力養成型インターンシップ（寺子屋式インターンシップ）の報告と展望について

徳島大学 COC プラス推進本部執行会議…1 回実施

平成 29 年 6 月 8 日(木)10:00～12:00
協議事項 1 第 1 回 COC+推進機構会議の開催について 2 プログラム教員会議の今後の運用について 3 COC+推進コーディネーターについて 報告事項 1 平成 29 年度事業実施スケジュールについて 2 平成 29 年度、実践力養成型インターンシップの進捗及び実施計画について 3 COC+事業ニュースレターvol.2 の発行について 4 中間評価の実施について

徳島大学 COC プラス推進機構会議…1 回実施

平成 29 年 6 月 12 日(月)13:00～14:00
協議事項 1 プログラム教員会議の持ち方について 2 プログラム開発委員会の開催について 報告事項 1 前年度の事業報告と今年度の事業計画 2 イノベーター人材育成教育プログラム編成完了の報告 3 寺子屋式インターンシップの報告 4 参加校共同授業の実施について

教育プログラム開発委員会…1 回実施

平成 29 年 6 月 22 日(木)15:00～17:00
協議事項 1 平成 29 年度の事業計画について 2 参加校共同授業の実施について 3 学生+保護者向け企業ガイダンスの準備について 4 トビタテ COC+インターンシップ事業について 5 教育プログラム開発委員会 分科会の開催について 報告事項 1 平成 28 年度の事業報告

教育プログラム開発委員会分野別分科会 兼 プログラム教員会議分科会…1 回実施

平成 29 年 11 月 10 日（金） 15:30-17:30
話題提供 1 次世代技術分野での“人材不足”の現状 2 6 次産業化分野での“人材不足”の現状 3 地域づくり／I C T／観光分野での“人材不足”の現状 協議事項 “人材不足”の現状と高等教育に求められる課題について

教育プログラム開発委員会 兼 参加校協働事業実施委員会…1 回実施

平成 30 年 3 月 14 日（水） 10:45-12:00
報告事項 1 中間評価の結果について 2 創業支援事業の取り組み 3 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み 4 共同授業の取り組み 5 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～の取り組み 6 FD 地域人材育成フェスタの取り組み 協議事項 1 来年度の実施計画について 2 地域創生産官学コンソーシアムとくしま（仮称）構想について

協働事業に関する参加校協働事業実施委員会 兼 ワーキンググループ…9 回実施

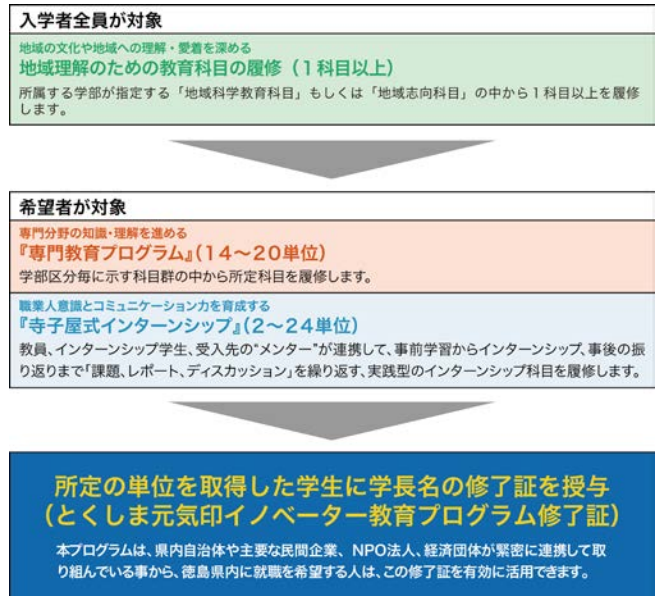
平成 29 年 4 月 26 日(水)10:45～12:00
1 今年度の事業計画 2 人材育成協議会の実施について 3 参加校協働事業「徳島の魅力、徳島で働く」について 4 保護者+学生向け企業ガイダンスの実施について（実施体制） 5 今後の実施委員会、ワーキンググループの実施日程について
平成 29 年 5 月 24 日（水） 10:45～12:00
協議事項 1 参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 2 教育プログラム開発委員会の実施について 3 外部評価委員会の実施について 報告事項 1 人材育成協議会の実施報告 2 〔徳島大学〕平成 29 年度実践力養成型インターンシップの実施について 3 〔四国大学・四国大学短期大学部〕平成 29 年度創業支援事業の実施について
平成 29 年 7 月 26 日(水)10:45～12:00
協議事項 1 参加校協働授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について 2 開発委員会分科会の実施について 3 学生+保護者向け企業ガイダンスについて 4 F D地域人材育成フェスタの実施について 報告事項 1 中間評価の実施について
平成 29 年 9 月 27 日(水)10:45～12:00
協議事項 1 参加校協働授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について 2 中間評価の実施について 報告事項 1 教育プログラム開発委員会分科会の実施について 2 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～（仮）の実施について 3 F D地域人材育成フェスタの実施について

平成 29 年 10 月 25 日 (水) 10:45～12:00
報告事項 1 中間評価について 2 教育プログラム開発委員会分野別分科会 兼 プログラム教員会議分科会の開催について 3 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～について 4 創業支援事業の現状について ① とくしまサイコー塾・学生ビジネスプラン道場・社長のかばんもちについて ② 学生×食品開発プロジェクトについて 協議事項（プロジェクトチーム会議） 1 FD 地域人材育成フェスタについて 2 共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について
平成 29 年 11 月 29 日 (水) 10:45～12:00
協議事項 1 教育プログラム開発委員会分野別分科会 兼 プログラム教員会議分科会の開催について 2 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～について 報告事項 1 FD 地域人材育成フェスタについて 2 共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 3 創業支援事業について
平成 29 年 12 月 20 日 (水) 10:45～12:00
協議事項 1 徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～について 2 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会の開催について 報告事項 1 共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 2 FD 地域人材育成フェスタについて 3 ニュースレターvol.3 の発行について
平成 30 年 1 月 31 日 (水) 10:45～12:00
協議事項 1 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会の実施について 2 とくしま学生ビジネスプラン道場最終審査会の実施について 3 「地方大学の振興及び若者雇用等に関する有識者会議」（最終報告）について 4 徳島県地域グローバル人材育成事業「企業活動連携コース(COC+連携コース)プロジェクト説明会の実施について 報告事項 1 FD 地域人材育成フェスタについて 2 共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 3 第 2 回教育プログラム開発委員会の開催について 4 「とくしま高等教育コンソーシアム」構想について 5 平成 30 年度における創業支援事業について 創業支援事業における 6 大学連携の新規事業（案）について 6 平成 29 年度事業報告書の作成について
平成 30 年 2 月 21 日 (水) 10:45～12:00
報告事項 1 徳島県地域グローバル人材育成事業「企業活動連携コース(COC+連携コース)プロジェクト説明会の実施について 協議事項 1 FD 地域人材育成フェスタについて 2 共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」について 3 第 2 回教育プログラム開発委員会の開催について 4 平成 30 年度創業支援事業における 6 大学連携の新規事業（案）について 5 平成 29 年度事業報告書の作成について

とくしま元気印イノベーター教育プログラムの編成状況について

徳島大学では、徳島県内に就職して地域の産業振興と地域課題の解決に積極的に参画する「元気印イノベーション人材」を育成するために必要となる「4つの能力」と「2つの確信」を付与するための教育カリキュラムと指導方法の開発を進めている。

そのためのプログラムとして、①入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」、②徳島県の未来を想像する4分野で活躍するための「専門プログラム」、③「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」の3段階のカリキュラムを編成し、所定の単位を取得した学生に学長名の修了証を授与する「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を開発（右図参照）し、平成28年度以降の入学生が履修できる体制を整備している。



① 入学者全員が履修する「地域理解のための教育科目」

平成28年度から「地域の文化や地域への理解・愛着を深める」のための地域志向科目を入学者全員に履修させる体制として、教養教育に「地域科学教育科目群」を編成した他、一般教養科目群及び専門科目の中に「地域志向科目」を設定した。このうち「地域科学教育科目群」については、本年度から新田に10科目を追加し、さらに平成30年度には新たに4科目を加え、計26科目の開講を予定している。さらに、地域科学教育科目群の1つである「ボランティア・パスポート入門」については103名が受講し、98名がボランティア活動を実践して単位を取得した。

② 徳島県の未来を想像する4分野で活躍するための「専門プログラム」

各学部のカリキュラムの中から4分野の「当該業種に必要な専門分野の知識・理解」に関わる科目の編成を行い、その中から所定単位数を学生に選択履修させる体制を整備した。

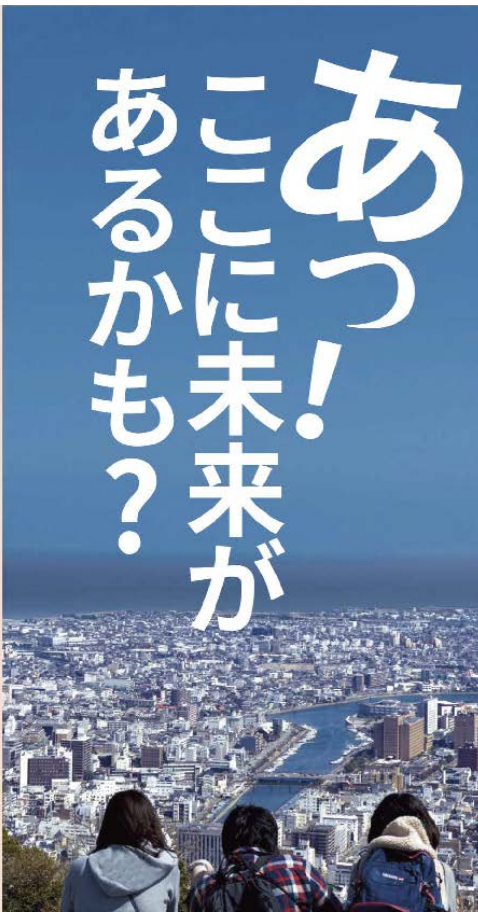
③ 「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式インターンシップ」

平成28年度に7つの企業・団体にて「寺子屋式インターンシップ」の試行となる「実践力養成型インターンシップ」が実施され、35名の学生が参加したことに引き続き、本年度には、新規科目「実践力養成型インターンシップⅠ」「実践力養成型インターンシップⅡ」を開講し、54名の学生が15の企業・団体にて課題解決型のインターンシップに取り組んだ。これにより正課科目として受講できる体制が整った。

なお、医学部、歯学部、薬学部については、本年度から実習科目の位置付けを明確にしたことにより「寺子屋式インターンシップ」として履修可能な体制が整った。

以上のプログラムについて、履修の要項を冊子形式に編集し、本年度当初に新入生をはじめ、専門科目が始まる学部2年生にも配付した。平成30年度版についても同様に編集が終了しており、同様に配

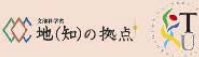
付する予定である。次項より来年度の冊子内容を掲載する。



あつこ

あるかも？

ここに未来が



**2018年度
とくしま元気印
イノベーター
教育プログラム
履修案内
パンフレット**



●プログラムに関するお問い合わせ

徳島大学COCプラス推進本部

徳島市吉原三島町1丁目1番地(地域創生・国際交流会館3階)

TEL:087-656-9888 FAX:087-656-9889

mail:coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp

発行：平成30年3月

INDEX はじめに1 徳島の未来を創造する4つの分野2 プログラムの構成と修了要件3 育成する能力・態度・志向性4 教育プログラム履修マップ ■ 総合科学部5 ■ 医学部7 ■ 歯学部9 ■ 薬学部10 ■ 理工学部11 ■ 生物資源産業学部13 地域科学教育科目の紹介 ■ 食の地域経済学／日本農業を考える15 ■ ボランティア・バスポート入門16 ■ ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会／ボランティアリーダーと語る地域社会17 ■ 徳島を考える18 ■ 地域の自然と食材19 ■ 埋もれた文化遺産Ⅰ／埋もれた文化遺産Ⅱ20 ■ ボランティア実践21 ■ 徳島の魅力・徳島で働く(集中講義)22 ■ まちづくり入門23 ■ 地球環境と持続可能な社会24 ■ 統計データからみる徳島県25	はじめに 人口減少社会に入った日本。大阪府ですら人口が減少する中で、首都圏だけに人口が流入する東京一極集中が生じています。しかし、これでは日本に未来はありません。それぞれの地方、徳島であれば徳島で生じている「人口減少・超高齢化社会」、「若年層人口の流出」、「厳しい財政状況」などの課題と向き合って、徳島の未来を創造する分野に取り組み、専門性に応じた地方創生の担い手となる人材を育成することが、徳島の大学に求められています。 地方は若者の力を求めています。若者のアイデア、行動力が活かせる場です。若者の力で地域が変えられる。やりがいや達成感がある。だからおもしろい。是非、みなさんに、徳島県を変えてほしい。徳島大学は、そのために必要となる能力と資質を育成する「とくしま元気印イノベーター教育プログラム」を準備しました。 本プログラムでは、徳島県の産業の特質と将来性を鑑み、徳島の未来を創造する4つの分野を設定しました。皆さんが所属する学部ごとに所定の科目履修を行うことで、それぞれの学部が対応する分野において、課題解決に積極的に参加していくための能力を身につけてもらいます。 さらに、教員が「ドン」となって少人数の学生を担当し、受け入れ先の「メンター」と連携して、事前学習から振り返りまで、「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す、チュートリアル方式の「寺子屋式インターンシップ」を通じて、地域社会で求められる実践的な能力を身につけてもらいます。 また、プログラムを修了した学生には学長からの修了証が授与され、地域への就職に役立てることが出来ます。 本プログラムの履修を通じて、一人でも多くの徳島大学生が、徳島の将来に対するビジョンや、徳島で働き暮らすことのメリットに確信を持ち、将来にわたって徳島県の課題に挑み続ける「元気印イノベーター人材」として成長することを期待しています。  	徳島の未来を創造する4つの分野 分野① 次世代技術関連分野 【関連学部】 理工学部  青色LEDの発明者の中村修二さんは徳大工学部の卒業生です。徳島県はLEDの出荷額で全国1位、集積した世界有数のLED研究基盤があります。また、自動車関連産業やロボットテクノロジーは、徳島県のものづくり企業が有するLED、リチウムイオン電池、CFRP(炭素繊維強化プラスチック)等、多くの次世代技術の応用が期待される分野です。 分野② 地域医療・福祉関連分野 【関連学部】 医学部、歯学部、薬学部  糖尿病患者は世界的に増加傾向にあり、徳島県は糖尿病死亡率が非常に高い地域です。このことから、徳島大学、徳島文理大学、大塚製薬、そして徳島県が連携・協力して糖尿病の世界レベルの研究拠点を育成する「健康イノベーション構想」を推進しています。また、徳島県は高齢化率が高く、介護・福祉分野の人的・物的な投資拡大が不可欠です。 分野③ 6次産業化関連分野 【関連学部】 生物資源産業学部  徳島県は、生産額が全国1位のすだちをはじめとして、阿波尾鶏、カリフラワー、洋ラン、生しいたけなど、全国シェアで上位を占めるブランド農林水産物を数多く有しています。このような背景を受けて、新たな農林水産技術の開発と6次産業化を進める拠点づくりが進められており、食料・バイオ分野で次世代を担う人材に対するニーズが高まっています。 分野④ 地域づくり・観光・ICT関連分野 【関連学部】 総合科学部  業ばビジネスの上勝町、サテライトオフィスが集まる神山町、世界から観光客が訪れる祖谷渓、全国から若者が集まるマチアソビなど、徳島県は全国から注目される地域づくりの事例や観光コンテツツを有しています。このような取り組みを継承・発展させて、徳島に新しい人の流れを作り出すことが徳島の未来を創造する鍵となります。
---	--	---

プログラムの構成と修了要件

本プログラムは、地域の文化や地域への理解・愛着を深める「地域理解のための教育科目」、地域の産業の課題解決に挑むにあたって必要となる専門分野の知識・理解を深める「専門教育プログラム科目」、職業人意識とコミュニケーション力を育成する「寺子屋式インターンシップ科目」の3つの部分で構成されます。

「地域理解のための教育科目」は入学全員を対象とします。教養教育もしくは、所属する学部が指定する「地域科学教育科目」、もしくは「地域志向科目」の中から1科目以上を履修します。

「専門教育プログラム科目」、「寺子屋式インターンシップ科目」については、希望者が対象となります。「専門教育プログラム科目」については、それぞれの学部で対応する分野に応じた教育目標を設定し、これに沿って編成された科目群の中から所定の単位を履修します。「寺子屋式インターンシップ」については、学部の専門の学びを活用し、徳島県内の企業の課題解決プロジェクトに参画する、実践的なインターンシップ科目を履修します。

これらの教育プログラムを全て履修し、所定の単位を取得した学生には「学長名の修了証」が授与されます。修了証は地域への就職に役立てることができます。

入学全員が対象

地域の文化や地域への理解・愛着を深める

地域理解のための教育科目の履修（1科目以上）

所属する学部が指定する「地域科学教育科目」もしくは「地域志向科目」の中から1科目以上を履修します。

希望者が対象

専門分野の知識・理解を深める

『専門教育プログラム』（14～20単位）

学部区分毎に示す科目群の中から所定科目を履修します。

職業人意識とコミュニケーション力を育成する

『寺子屋式インターンシップ』（2～24単位）

教員、インターンシップ学生、受入先の「メンター」が連携して、事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題・レポート、ディスカッション」を繰り返す、実践型のインターンシップ科目を履修します。

所定の単位を取得した学生に学長名の修了証を授与 (とくしま元気印インベーター教育プログラム修了証)

本プログラムは、県内自治体や主要な民間企業、NPO法人、経済団体が緊密に連携して取り組んでいることから、徳島県内に就職を希望する人は、この修了証を有効に活用できます。

育成する能力・態度・志向性

本プログラムを受講することで、徳島の課題を解決するために必要な4つの能力と2つの確信を身につけ、徳島の各地で地域イノベーションに意欲を持って参加し、活躍していく人材として育つことが期待されます。

4つの能力

1. 地域文化や地域への理解・愛着

徳島の過去から現在に至る歴史・文化や県民の営みに対する正しい知識を身につけた上で、徳島を愛し、徳島の地でその将来の発展に貢献しようとする強い意欲を持つこと

2. 専門分野の知識・理解

徳島の発展のために、自らが貢献しようとする各分野において、高度な専門知識や技術を修得した上で、職業人として活用し、改善さらにはイノベーションできる能力を持つこと

3. 職業人意識とコミュニケーション力

プロフェッショナルとして、自らの職業やその専門分野に自覚と誇りを持ち、職場はもとより異業種の人々や他者との間で、十分なコミュニケーションができること

4. 課題に挑戦する元気・覇気

困難な課題や大きな壁に直面しても、それを乗り越え、克服しようとするチャレンジ精神と粘り強さを身につけること

2つの確信

1. 地域の将来に対するビジョン

将来にわたる地域の潜在的可能性・将来像への確信を抱けるようになること

2. 地域で暮らすことのメリット

ライフワークバランスを踏まえた人生設計への確信を抱けるようになること



3

4

教育プログラム履修マップ

総合科学部

【教育上の目標】

人口減少や高齢化が進み、グローバル競争で経済格差が拡大するなか、活力ある地域づくりに求められるのが、ソーシャル・イノベーションです。イノベーションは発明や技術開発に限ったものではありません。ソーシャル・イノベーションは私たちの社会の仕組みを見直し、柔軟な発想で新たな価値を生み出そうとする変革です。徳島県には、「葉っぱビジネス」で高齢者が生き生きと働く上勝町や、IT系ベンチャー企業のサテライトオフィスが次々と進出する神山町、「秘境」と呼ばれた山間地で外国人ツーリストが増加している三好市など、地域活性化の成功例として全国から注目される取組がいくつも存在します。

経済・社会・政治などあらゆる面で、私たちのくらしの基盤はつねに地域にあることを考えてみて下さい。仕事を見つけて働くことももちろん、日々の買い物をするにせよ、教育や医療のサービスを受けるにせよ、さまざまなコミュニティ活動に参加するにせよ、生活の場としての地域がしっかりと持続可能でなければ、私たちは充実した人生を送ることができません。同時に、私たち一人一人がその地域を支えるメンバーでもあるのです。世の中の変化が激しい今日、かつて信じられた「安定した就職先」を探すだけでは不十分です。自ら努力して新しい価値を発見し、みんなで協力して課題に挑戦する態度が求められます。

地域の課題解決にはどのようなアプローチが有効でしょうか。優れたアイデアやプランは、単に白紙からの思いつきで生まれるものではありません。病気の診断と同様に、まず、問題の背景にある諸要因をきちんと把握し、その関連や構造を理解することが必要です。次に、市民や企業や行政などが連携して目指すべきビジョンについて検討することが大切です。その上で、新しいビジネスモデルや政策を提案し実行していくことが重要になります。そうしたプロセスにおいてリーダーとして活躍できる人材が「インベーター」です。

総合科学部の専門教育プログラムでは、地域に根ざしたソーシャル・イノベーションを構想できる見識と、それを実現するスキルを持ったジェネラリストを育てます。国際教養コースの科目からは地域の文化や国際比較の視点を、心身健康コースの科目からは健康な地域づくりに向けた手法を、公共政策コースの科目からは地域の経済や行政の仕組みを、地域創生コースの科目からは地域の実態を分析する調査法を学びます。さらに、インターンシップを通じて地域社会で求められる実践的な能力を身につけることができます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれから2単位以上を取得してください。

①地域科学教育科目

②下記地域志向科目に指定されている授業科目

★地域科学教育科目（→14ページを参照）

★地域志向科目

- 【前期】
 - 防災災害を防ぐ [2単位／一般教養教育科目（自然と技術）]
 - 国際協力入門入門 [2単位／グローバル化教育科目]
 - グローバル社会に必要な地域英検とは [2単位／グローバル化教育科目]

- 【後期】
 - 伊勢と歩く一歩先導の歴史 [2単位／一般教養教育科目（歴史と文化）]
 - 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目） [1単位／一般教養教育科目（生活と社会）]
 - 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目） [1単位／一般教養教育科目（生活と社会）]
 - 地震・火山災害を防ぐ [2単位／一般教養教育科目（自然と技術）]
 - グローバル化時代の地域医療を考える [2単位／グローバル化教育科目]
 - Global Communication-Peer learning on culture of Tokushima [2単位／グローバル化教育科目]
 - 「モリスの徳島」ーグローバルイズムと異文化ー（eラーニング科目） [2単位／グローバル化教育科目]

専門教育プログラム（専門科目／16単位以上を取得）

※所属コースの科目と他コースの科目を合わせて16単位以上を取得してください。

国際教養コース	
【2年次前期】	● 日本史研究Ⅰ [2単位]
【2年次後期】	● キャリアプラン [2単位] ● 応用日本語概論 [2単位] ● 地理学の基礎Ⅰ [2単位]
● 現代アジア社会Ⅰ [2単位] ● 方言と社会 [2単位] ● 比較文化研究 [2単位]	
心身健康コース	
【2年次前期】	● 臨床心理学Ⅰ [2単位]
【2年次後期】	● キャリアプラン [2単位]
● スポーツ経営学 [2単位]（集中講義）	
● スポーツ社会学 [2単位]	
【3年次前期】	● 福祉心理学Ⅱ [2単位] ● 健康心理学Ⅱ [2単位] ● スポーツマーケティング論Ⅱ [2単位]（集中講義）
● 地域スポーツ文化論 [2単位] ● コミュニティ心理学Ⅱ [2単位]（集中講義）	
【3年次後期】	● ウェルネス・プロジェクト実習Ⅱ [2単位]（集中講義） ※（武蔵実習を含む）及び（健康増進施設実習）のどちらの科目も含みます。
公共政策コース	
【2年次前期】	● 経営学Ⅰ [2単位]
【2年次後期】	● キャリアプラン [2単位] ● 地理学の基礎Ⅱ [2単位] ● 公共政策学Ⅱ [2単位]
● 財政学Ⅰ [2単位]（集中講義）	
● 地域政策論Ⅰ [2単位] ● 地域経済論Ⅱ [2単位]	
地域創生コース	
【2年次前期】	● 日本史研究Ⅰ [2単位] ● 地域創生Ⅰ [2単位] ● 考古学調査法Ⅱ [2単位] ● 環境アートⅡ [2単位]
● 空間情報論Ⅰ [2単位] ● 地域調査法Ⅰ [2単位] ● 地域調査実習A [2単位] ● 地域政策論Ⅱ [2単位]（集中講義）	
【2年次後期】	● キャリアプラン [2単位] ● 地理学の基礎Ⅲ [2単位] ● 方言と社会 [2単位] ● 考古学調査実習Ⅱ [2単位]（集中講義）
● 地域政策論Ⅲ [2単位] ● 地域文化論Ⅱ [2単位] ● 地域調査実習B [2単位]	

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目	
【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ [1単位]
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ [1単位]
★専門科目	
【3年次後期】	● 短期インターンシップ [2単位]

※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、講義の中で実施されるガイダンスに沿って必要な事前学習を行ってください。事前に所属する単位を履修するだけでは、寺子屋式インターンシップとは見なされません。

5

6

教育プログラム履修マップ

理工学部

【教育上の目標】

教養教育において地域の自然や文化、歴史の理解に関する科目を履修した上で、各専門分野から徳島県内の地域に根ざした理工学系課題への応用に役立つ科目を履修します。たとえば、都市交通や建築計画、メカトロニクスや自動制御、材料科学や工業化学、光デバイスや電子回路設計、情報計測や情報機器、熱統計力学や最適化論など、県内企業が得意とする技術の発展に貢献できる人材に求められる能力を身につけます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業科目
※夜間主コースの学生については、グローバル化教育科目、イノベーション教育科目は卒業要件単位ではありませんのでご注意ください。

★地域科学教育科目（→14ページを参照）※夜間主コースの学生は受講できる科目が限られますのでご注意ください。	
★地域志向科目	
【前期】	● 気象災害を防ぐ ● 国際協力入門・入門 ● グローバル社会に必要な地域認識とは
【後期】	● 空海と歩く〜歩き道徳の世界〜 ● 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目） ● 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目） ● 地震・火山災害を防ぐ ● グローバル化時代の地域産業を考える ● Global Communication・Peer learning on culture of Tokushima ● 「モリス」の伝説〜グローバル化と異文化〜（eラーニング科目）
【前期】	● 2単位／一般教養教育科目《自然と技術》 ● 2単位／グローバル化教育科目
【後期】	● 2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》 ● 1単位／一般教養教育科目《生活と社会》 ● 1単位／一般教養教育科目《生活と社会》 ● 2単位／一般教養教育科目《自然と技術》 ● 2単位／グローバル化教育科目 ● 2単位／グローバル化教育科目

専門教育プログラム（専門科目／16単位以上を取得）



次世代技術分野

コース別専門科目

社会基盤デザインコース	
【1年次前期】	● 社会基盤デザイン概論 [2単位]
【3年次前期】	● 都市・交通計画 [2単位]
【3年次後期】	● 合意形成技法 [2単位] ● 建築構造計画 [2単位]
機械科学コース	
【1年次後期】	● 材料力学1 [2単位]
【2年次前期】	● メカトロニクス工学 [2単位]
【2年次後期】	● 自動制御1 [2単位]
【3年次前期】	● 自動制御2 [2単位]
【3年次後期】	● デジタルエンジニアリング [2単位]
応用化学システムコース	
【1年次前期】	● 基礎分析化学 [2単位]
【2年次後期】	● 材料科学 [2単位]
【3年次後期】	● 材料物性 [2単位] ● 電気化学 [2単位] ● 工業化学 [2単位]
電気電子システムコース	
【1年次前期】	● 電気エンジニアリング入門 [2単位]
【3年次後期】	● 制御電機工学 [2単位] ● 電子回路設計 [1単位] ● マイコンシステム設計 [1単位]
【4年次前期】	● 光デバイス [2単位]
情報科学システムコース	
【1年次前期】	● コンピュータリテラシー [2単位]
【1年次後期】	● プログラミング入門及び演習 [2単位]
【2年次後期】	● 情報セキュリティ [2単位]
【3年次後期】	● 光デバイス [2単位] ● 情報機器 [2単位]
応用数学コース数理科学系	
【1年次前期】	● 計算機概論 [2単位]
【3年次前期】	● 数値解析 [2単位]
応用数学コース自然科学系	
【1年次前期】	● 計算機概論 [2単位]
【3年次前期】	● 量子力学1 [2単位] ● 物性科学1 [2単位] ● 熱統計力学2 [2単位]
【3年次後期】	● 物性科学2 [2単位]

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目	
【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ [1単位]
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ [1単位]
★専門科目	
【3年次後期】	● 短期インターンシップ [2単位]

※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、履修の中で実施されるガイダンスに沿って必要な履修単位をしっかりと履修し、単位取得の単位を履修するだけで、寺子屋式インターンシップとは見なされません。

教育プログラム履修マップ

生物資源産業学部

【教育上の目標】

教養教育において地域の自然や文化、歴史の理解を修得した上で、地域の生物資源の製品化、産業化にかかわる専門科目を履修することで、県内の農林水産業のイノベーションへの関心を高め、そのための知識とスキルが習得できます。さらに、実践的なインターンシップを通じて地域の企業等が直面している課題を身をもって体験することで、県内に就職してから問題解決に積極的に参画できる人材に成長してもらいます。

地域理解のための教育科目（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

以下の①、②のいずれから2単位以上を取得してください。
①地域科学教育科目
②下記地域志向科目に指定されている授業科目
※夜間主コースの学生については、グローバル化教育科目、イノベーション教育科目は卒業要件単位ではありませんのでご注意ください。

★地域科学教育科目（→14ページを参照）	
★地域志向科目	
【前期】	● 気象災害を防ぐ ● 国際協力入門・入門 ● グローバル社会に必要な地域認識とは
【後期】	● 空海と歩く〜歩き道徳の世界〜 ● 地域コンテンツと知財管理その1（eラーニング科目） ● 地域コンテンツと知財管理その2（eラーニング科目） ● 地震・火山災害を防ぐ ● グローバル化時代の地域産業を考える ● Global Communication・Peer learning on culture of Tokushima ● 「モリス」の伝説〜グローバル化と異文化〜（eラーニング科目）
【前期】	● 2単位／一般教養教育科目《自然と技術》 ● 2単位／グローバル化教育科目
【後期】	● 2単位／一般教養教育科目《歴史と文化》 ● 1単位／一般教養教育科目《生活と社会》 ● 1単位／一般教養教育科目《生活と社会》 ● 2単位／一般教養教育科目《自然と技術》 ● 2単位／グローバル化教育科目

専門教育プログラム（専門科目／下記必修科目の単位を取得（10科目17単位））

【1年次前期】	● 経済学基礎 [2単位]	● 生物生産フィールド実習 [1単位]
【1年次後期】	● 経営学入門 [2単位]	● 起業体験実習 [1単位]
【2年次前期】	● 生物資源産業学実習 [2単位]	
【2年次後期】	● フードシステム論 [2単位]	● 地域資源経済学 [2単位]
【3年次後期】	● アグリビジネス総論 [2単位]	● 商品開発プロジェクト演習 [1単位]
	● 食品マーケティング論 [2単位]	

寺子屋式インターンシップ（教養教育科目・専門科目／2単位以上を取得）

★地域科学教育科目	
【前期】	● 実践力養成型インターンシップⅠ [1単位]
【後期】	● 実践力養成型インターンシップⅡ [1単位]
★専門科目	
【3年次後期】	● インターンシップ [2単位]

※寺子屋式インターンシップとして「短期インターンシップ」の履修を希望する学生は、履修の中で実施されるガイダンスに沿って必要な履修単位をしっかりと履修し、単位取得の単位を履修するだけで、寺子屋式インターンシップとは見なされません。



6次産業化関連分野

地域科学教育科目の紹介

地域科学教育科目は、徳島県の地域問題を自らの課題として受け止められる公共の精神と、地域における組織人として必要な資質を得ることを目指して、地域創生、地域貢献の意義などの体験的学習も含めて学ぶ科目です。平成28年度から編成された本教育科目は平成30年度現在、26授業科目が開設されています。

次のページから、一部の授業科目について詳しく紹介していきます。「とくしまのどのような課題が学べるの?」「学びのためにどのような工夫がされているの?」という二つの観点から、担当する先生にインタビューを行いました。

地域科学教育科目を受講することで、徳島県の様々な課題と、課題解決に向けたアプローチを学ぶことができます。これからの学生生活で地域の課題に取り組む入り口となる科目です。紹介記事を参考に、自分の関心とつながる学びを探してみてください。

15P	●【前期】食の地域経済学 [2単位] ●【後期】日本農業を考える [2単位]
16P	●【前期】ボランティア・パスポート入門 [2単位]
17P	●【前期】ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会 [2単位] ●【後期】ボランティアリーダーと語る地域社会 [2単位]
18P	●【前期】徳島を考える [2単位]
19P	●【前期】地域の自然と食料 [2単位]
20P	●【前期】埋もれた文化遺産Ⅰ [2単位] ●【後期】埋もれた文化遺産Ⅱ [2単位]
21P	●【前期】ボランティア実践 [2単位]
22P	●【前期】徳島の魅力・徳島で働く [2単位] (集中講義)
23P	●【後期】まちづくり入門 [2単位]
24P	●【後期】地域環境と持続可能な社会 [2単位]
25P	●【後期】統計データから見る徳島県 [2単位]
26P	●【前期】とくしまの環境を学ぶ [2単位] ●【前期】歴史から学ぶ地域～宗教・社会～ [2単位] ●【後期】実践まなぼう [2単位] ●【前期】実践・地域創生学 [2単位] ●【前期】実践力養成型インターンシップⅠ [1単位] ●【後期】実践力養成型インターンシップⅡ [1単位] ●【前期】徳島で暮らす・徳島で働くを考える [1単位] (eラーニング科目) ●【後期】外国人と四国道路の歴史 [1単位] (eラーニング科目) ●【前期】瀬戸内海論 その1 [1単位] (eラーニング科目) ●【前期】瀬戸内海論 その2 [1単位] (eラーニング科目) ●【後期】瀬戸内地域活性化政策 その1 [1単位] (eラーニング科目) ●【後期】瀬戸内地域活性化政策 その2 [1単位] (eラーニング科目)



地域科学教育科目の紹介

【前期】食の地域経済学 【後期】日本農業を考える

担当:玉 真之介

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

急傾斜地の面積が広いのが徳島県。地形的な特徴で、特に三好市を含む徳島剣山系、西阿波地域は、傾度の高い傾斜地を広く有する国内有数の中山間地域です。また平坦な耕地が少なく、高齢化が進み、後継者不足や耕作放棄地の問題が生じており、農業の持続が大きな課題になっています。

講義の前半では、食や農業に関する社会問題を学びます。講義で食の課題と農業の課題の関係を理解した後、後半は実際の農業の課題解決に取り組む地域でフィールドワークを行い、課題解決に向けた実際の取り組みの様子を学びます。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

前期科目「食の地域経済学」では、三好市の活性化に取り組むNPO主催のワークショップに参加し、かつては耕作放棄地だった梅畑で梅の収穫とシロップ作りを体験します。後期科目の「日本農業を考える」では世界農業遺産の候補地となっている美馬市六吹の傾斜地農業の取材を行います。大学に帰った後は、それぞれの地域のアピール方法をグループで検討し、ポスターを作成して発表会を行います。生産、加工、販売まで、食の6次産業化の工程を機能的に体験しながら、日本の食の現状の中での徳島の農業のあり方を考えてもらいます。

ポスターを作るプロセスは、自分たちで地域の課題を調査して解決まで考えるきっかけとなります。教養教育ですべてで参加する学生の学部学科の幅が広く、知り合ったばかりの学生と協力してグループワークを行います。学部を超えた交流・協働ですが、時には上手にいかないことも含めて、社会の疑似体験となります。

担当教員からの
メッセージ

徳島の農業の課題を考えることで、中山間地域の高齢化問題など、日本全国で起こっている課題に触れることになります。また、自然に囲まれた農業生産の現場に触れることはほとんどの学生にとって初めての体験になるでしょう。生産の現場にはその場で暮らす人々の文化や歴史があり、そこに触れることでこれまで知らなかった地域の魅力の発見や、新しい世界に触れる感動が得られます。(現地でいただく地元農家のおばちゃんの手作りご飯は美味しいですよ！)

徳島には、このような教養教育が目指す人間性の育成につながる経験が得られるフィールドがたくさんありますので、積極的に学びに参加してください。



梅の収穫体験の様子



ワークショップの様子



玉 真之介教授

【前期】ボランティア・パスポート入門

担当:玉 真之介、橋本 直史

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

履修生は、徳島県全域で募集があるボランティア活動に参加することになります。社会奉仕活動を体験することは、社会に役立つ活動に主体的に取り組む人間に成長する機会になります。

徳島県では、青少年が自主的に様々なボランティア活動を行う授業・講座の取り組みを、大学と連携して促進する方針が示されており、県民活動プラザでは県内のボランティア情報を紹介する「NPO・ボランティアお試し体験」の仕組みが取り入れられています。この授業では、この仕組みを活用して皆さんに様々なボランティアを経験してもらいます。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

ボランティア・パスポートは、県が用意したボランティア一覧から選んで参加することで、パスポート型の冊子にスタンプが押されていく仕組みです。スタンプは1時間の活動で1つ押されます。合計40個のスタンプを集めることが、単位取得の条件となります。講義では、まずボランティアについて教室で学ぶことから始めて、その後は一覧から自らで取り組みたいボランティアを選んで、スタンプを取得していきます。

講義終了後もボランティア参加の意欲が維持されるように、パスポートの昇格と評価の仕組みを取り入れています。緑色(初級)のパスポートのスタンプを全部集めると、単位取得に加えて、赤色(中級)→青色(上級)と昇格したパスポートが手に入ります。上級パスポートの修了まで至った学生は徳島県知事からの表彰が受けられるなど、段階に応じた達成感が得られる工夫を行っています。

担当教員からの
メッセージ

ボランティア・パスポートの仕組みは私が東北の大学に勤務していた時、東日本大震災の被災地にボランティアとして学生を送り出し、「地域活動への参加で学生自身が成長すると実感した経験」を踏まえ、アイデアを県に持ち込みました。徳島大学ならではの特色ある取り組みであり、社会の実活動に自然に入っている貴重な機会です。

時が経つにつれて東日本大震災の記憶は失われてきていますが、徳島県でも南海トラフ巨大地震や活断層地震などの大災害が想定されています。ボランティアへの参加から、助け合うことの大切さを実感し、これからの生き方を考えるきっかけにしてください。



スタンプを集めると段階的にパスポートの級が昇格

大学のHPにボランティア情報を掲載

15

16

地域科学教育科目の紹介

【前期】ボランティア活動から学ぶグローバル社会と地域社会 【後期】ボランティアリーダーと語る地域社会

担当:大橋 眞

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

講義ではボランティアの理念を講義で教えると同時に、徳島県を始めた様々なボランティアを紹介します。徳島のNPO法人など社会貢献活動に取り組む団体は、若手活動の裾野が広がらないなど、活動の継承の課題を抱える団体が多くありません。授業では、実際にボランティアに取り組む活動者をお招きして、具体的な徳島のボランティア団体の活動の様子や課題を学びながら、若者が活動に参加する意義を考えます。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

ボランティア活動の意義が身につくためには、いろいろな人に触れることが重要です。前期の授業では、河川の自然環境をいかして地域再生に取り組む「吉野川に生きる会」、自然をいかした農業や竹林の再生に取り組む「竹林再生会」、上勝町で高齢者の集まりとビジネスを実践する「いどり」など、様々な活動者をお招きします。ボランティア活動に参加されている方の話を伺った後、5-6人のグループに分かれ、ゲストを交えてディスカッションを行ってもらいます。

後期の授業では地域の伝統的な農業や、これに基づく生活文化に焦点を当てています。ボランティアの定義は無償奉仕ではなく自発的な活動です。農業を使わない自然栽培、祖谷の傾斜地農業など、地域における新しいことへの自発的な取り組みを紹介します。

また、留学生とのコラボレーションを重視していることも、本授業の特徴です。日本の習慣や伝統について留学生とディスカッションすることで、自分たちの守るべき地域社会のあり方を見つめ直すきっかけとなります。

担当教員からの
メッセージ

私は元々疫学の専門家でしたが、ソロモン群島でマラリア対策を行った経験から、私たちが本当にするべきことは何かを考えるようになりました。マラリアの根絶はできないというのが世界的な見解になっています。そこで、外国から派遣された専門家ではなく、現地の人が対策できるように様々な取り組みを行いました。学校教育の中でマラリア対策の教育環境づくりを行う中で、日本で開発する予定の観音橋を運んで改造し、電気も無くても使えるようLEDを取り付けました。電気だけでなく道路や公共交通のインフラなど、日本で当たり前のものはソロモンにはありません。そのような地域で課題解決に取り組むことで、何もない場所での暮らしや工夫が学べました。



勝浦町の自然栽培農園体験



美馬市の古民家での異文化体験



大橋 眞教授

【前期】徳島を考える

担当:豊田 哲也、平井 松牛、高橋 晋一、田口 太郎

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

5人の教員が交代で登壇するオムニバス形式の講義であることがこの授業の大きな特徴です。それぞれの教員の専門である、考古学、歴史学、地理学、民俗学、地域計画学、等を様々な視点から、徳島のそれぞれの地域の、地理的・歴史的・文化的な背景の違いが反映された特性を明らかにし、地域的課題について考察します。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

本授業は、地域の文化や歴史を学ぶ科目の中では、最も古くある老舗の科目です。一人の教員による授業では経験できないような広い視点から多角的に地域を学び、徳島のことをより深く知って欲しいという趣旨の元で、総合科学部の複数人の教員が担当します。ベテランの先生が、各回それぞれの授業において、独立したテーマで90分の構成を考えます。各回、他分野の教員が聞いても興味深い話題に触れることができます。

担当教員からの
メッセージ

地域の特性や本当の課題を分析して、客観的な根拠に基づいた解決方法を考える力を身につけてください。地域を良くしたいという強い思いだけで、思い付きだけのアイデアでは地域をよくすることはできません。本当に地域の課題を解決したいのであれば、地域に飛び込んでいく実践も大切ですが、同時に地域を客観的に理解する能力を身につけることが不可欠です。徳島大学では、地域を客観的に理解するための様々なアプローチとしての学習を学ぶことができます。色々な授業に出て、関心を広げてみてください。(豊田)

「徳島」と聞かれて、皆さんは何を連想しますか？徳島大学に入学された皆さんは、県外の人に徳島のことをどう紹介しますか？阿波踊り、鳴門の渦潮、祖谷のかずら橋、剣山、吉野川、山が多い、人口が少なく、過疎地、鳴門金時、徳島ラーメン、阿波藍……。この授業では、こうしたキーワードを切り口に、徳島の成り立ちや課題について考えます。(平井)

阿波踊り、阿波人形浄瑠璃、四国道徳、狸文化、吹筒花火……。徳島は実は個性的な文化の宝庫です。授業では、徳島の地域文化の歴史的变化や現代社会における意味を、豊富な映像資料をもとに紹介していきます。目の前の文化を「フィールドワーク」することのおもしろさ。また、時代を超えて受け継がれる徳島文化の「パワー」を少しでも伝えたいことができればと思います。(高橋)



130万人以上が訪れる阿波踊り



祖谷のかずら橋



豊田 哲也教授

17

18

地域科学教育科目の紹介

【前期】地域の自然と食材

担当: 浜野 龍夫

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

徳島には海山川の多様な自然があります。海だけでも瀬戸内海、紀伊水道、太平洋と三つの海に面した地域があり、それぞれに自然の特徴と特産物があります。例えば、徳島を代表するブランド産品の鳴門金時、温暖で降雨量が少なく、通気性が良く、水はけが良い砂地の多い、瀬戸内海に面した地域で生産されています。

このように、徳島は豊かな自然とそこで生産される食材に恵まれています。この恵みを活かして、農業を成長産業にすることが大きな課題となっており、県でも2004年から農産物のブランド化の方針（「とくしまブランド戦略」）が進められています。

授業では、鳴門金時、レンコン、ニンジン、わかめなど、徳島県の特産物や、阿波尾鶏、阿波とん豚など、新たに開発されたブランド食材を紹介しながら、これらの食材を育んだ徳島の自然の特徴や、ブランド化の取り組みを理解してもらいます。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

この講義は、徳島に初めて住む学生も多い1年生が受講する科目ということもあり、まずは徳島の自然と食の魅力を紹介し、課題を通じて体験してもらいます。さらに、体験した食材の魅力を他人に語るコミュニケーションに取り組み課題によって、徳島の特産品を知る・伝えるための工夫を考えしてもらいます。また、食材に加えて、海山川の面白さ、遊び方なども紹介します。地域の環境を自分で体験することで、自然と暮らしと産業のつながりが意識できるようになります。

担当教員からの
メッセージ

私も徳島出身です。県立山口県の下関市で働いていましたが、家族が徳島、徳島での暮らしへの思いが強く、機会にも恵まれて徳島に戻ってきました。娘は下関で育ちましたが、夏休みに徳島の田舎で生活していた川瀬村が大好きな子供になり、現在は海部川の流れる海陽町の農場でブランド食材に関わる仕事をしています。自然の産物を活用した仕事を考えることは、自然を楽しむことにもなります。仕事のあり方と共に、暮らし方、遊び方も含めて徳島のこれからの農林水産業を考えましょう。まずは徳島の美味いものを食べて、海山川でたのび楽しんでください。



徳島の特産品「鳴門金時」



新開発のブランド豚「阿波とん豚」



浜野 龍夫 教授

【前期】埋もれた文化遺産Ⅰ 【後期】埋もれた文化遺産Ⅱ

担当: 中村 豊、端野 晋平

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

講義では遺跡や考古資料に触れることから、その地域における現代とは異なる人々の生活や実生活を体験してもらいます。そこからは地域の環境を活用してモノを自分で作るという、現在の市場経済の中にある私たちが見えなくなっている地域の姿への気づきが得られます。歴史的な生活や暮らしと現代社会を相対化して見つめ、地域の特性を見つめ直すヒントになります。

現在、地方自治体には地域特性に応じた文化の振興が求められています。徳島市においても、本講義でフィールドワークしてもらった徳島県立歴史民俗資料館や徳島城をはじめとした様々な文化遺産を保全するだけでなく、まちづくりや地域文化の創造に向けて活用していくことが課題になっています。古代人の生活を通して、これからの地域社会を考えるためのきっかけを掴んでください。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

講義の前半において徳島県内の遺跡を紹介しながら、文献やフィールドワークをもとに遺跡を調査する方法を知ってもらいます。また、石室や土器などの古代人の遺物に触れることから、当時の暮らしを推測し、理解してもらいます。講義の後半では前半で学んだ手法をもとに、自分たちで徳島の文化財に関するテーマを決め、グループで調査して成果を発表してもらいます。

授業は学びが受け身にならないよう、実習を中心とした構成です。遺跡の紹介では元城下町であった三島キャンパスの遺跡や徳島城、徳島県立歴史民俗資料館を訪れます。遺物づくりの実習では、蔵本キャンパスにある埋蔵文化財調査室の教員と共同で、実際に徳島で出土した土器にも触れてもらいます（蔵本キャンパスの周辺には古代からの集落遺跡があります）。後期の科目では、フィールドワークに加えて出土文化財に触れる体験学習機会を設け、文化財を記録する拓本採取など様々な経験をしてもらいます。

担当教員からの
メッセージ

情報が氾濫している時代ですが、まず自分の目で現地に行き、自分の目で現場を見て、手を動かして作業するなど、五感を使った実体験を通して徳島を学んでください。学部生の早い段階で様々な実習を経験することは、今後の能動的な学習のきっかけになります。このようにして得られた学習のイメージは、今後の専門の学びでも必ず活用できます。



フィールドワークの様子①



フィールドワークの様子②



中村 豊 教授

地域科学教育科目の紹介

【前期】ボランティア実践

担当: 矢部 拓也、樋口 直人、土屋 敦

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

ボランティアを理論としてではなく、実践的な活動として理解してもらいます。社会を持続させていくためには、自発的に社会問題に関わる市民セクターの活動が不可欠です。

例えば、徳島市中心部を流れる新町川をフィールドに活動しているNPO法人「新町川を守る会」は、ひょうたん島遊覧船運航などの新町川の賑わい作りや活動で知られていますが、その基礎となる活動は河川の清掃です。1990年代から地道な清掃活動を続けてきたことで、賑わいづくりのプログラムが可能になった背景があります。このように、すごい仕組みを考えるのではなく、日々の当たり前の活動が社会の土壌となります。

授業では、在学ではなく実際にNPO等の活動に参加し、ボランティアを実践してもらうことで、このような社会の現状を肌で学んでもらいます。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

授業の具体的なプログラムはその年度の担当教員によって異なりますが、いずれもボランティア活動を実践してもらった後、振り返りや報告書の作成、過去の活動として、小児科で入院している子どもたちにクリスマスを楽しんでもらうための、バレーアートイベントに参加した事例があります。透析を行っている方が、自分の闘病体験から課題意識を持って始めたプログラムです。1日目の参加はただひたすらバレーをするだけの作業でしたが、そのような地味な参加を通して信頼関係が生まれます。病院などの公共的な場所に受け入れてもらうためには、参加者の心構えや信頼関係が不可欠です。

このような感覚を掴み取って自発的に動く学生もいれば、残念ながら授業でやらされている感覚が抜けにくい学生もいます。本授業は自発性を持ってもらうことを目的としていますので、ハードルの高い活動の提案は行いませんが、多くの気づきにつながるきっかけを提供します。

担当教員からの
メッセージ

単位のために活動するのでは本意の意味でのボランティアとは言えません。授業の中では、気軽にできるボランティアから、しっかりとNPOで本気で取り組むボランティアまで、多様なボランティア活動を紹介しています。しっかりとボランティアに参加した学生は、しっかりと発表を作るようになっています。学びを得ようと思ったら、素直にどうという理由で自分の活動を選択するのではなく、本当の意味でのボランティア（＝自発的に参加する）意識を持って、積極的な学生生活を過ごしてください。



病院でのバレー体験



授業での報告プレゼンの様子



矢部 拓也 教授

【前期】徳島の魅力・徳島で働く(集中講義)

担当: 川崎 克寛

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

徳島県の産業面から見た将来ビジョンと、地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の職者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深めることができる授業です。

本授業は、徳島という地域に限定していますが、広く、地域というものの見方、捉え方はもとより、今「地域」で何が起きているのか、「地域で働く」とはどういうことなのか、若い世代がどのような働き方、暮らし方をしているのかを知ることができます。特に、将来「地域」で働くことを選択肢として考えている方、将来、地元での活躍を考えていらっしゃる方にオススメです。なお、当授業は、夏休みの期間中に行う集中講義（2018年8月20日～23日）に限定しております。

徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等期間のOB・OGを講師に迎えて、県内シンクタンクによる、データベースで地域を俯瞰する方法や、経験の中から生まれた価値や考え方を語っていただきます。昨年度は徳島県知事をはじめ、徳島の各産業界のリーダーに出演いただきました。今年度は、講師の方々にはサテライト会場より講義を行っていただく予定ですので、現地の臨場感や生の雰囲気を感じることが出来ます。

講演の後には、徳島県の大学のOB・OGによるパネルディスカッションを行います。登壇するのは皆さんと年の近い、若い世代の方々です。

そして、この授業では他大学の学生も一同に同じ教室で集まります。講師からのお話を元に、他大生との交流を回りながらのディスカッションやワークショップを行い、最終日には見解と提案を行っていただきます。

【昨年度ご協力いただいた企業及び団体一覧（50音順）】

(株) あえわ	徳次整形外科	In Between Blues
海陽町夜場 産業観光課	(有) 松山農園	上原町地域こし協力隊
Kamiyama Makerspace	北島町夜場 地域生活支援センター	NPO 法人 グリーンバレー
ケーブルテレビあなん	三協商事 (株)	(有) サンコファーマシー
独立行政法人 自動車総合機構	ジャパンコミュニケーションズ徳島	(株) 高井建設 酒販事業部
(株) ダンクソフト	徳島経済研究所	徳島県
とくしま産業振興機構	徳島トヨボット (株)	(株) ハレとデザイン会
(株) フードハブ・プロジェクト	藤崎電機 (株)	美波町 産業振興課
三好市 地域おこし協力隊	レーザシステム (株)	



授業の風景



パネルディスカッションの様子



徳島経済研究所 田村耕一氏の講演

地域科学教育科目の紹介

【後期】まちづくり入門

担当：田口 太郎

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

授業の前半はまちづくりの考え方を、後半はまちづくりの実践を取り上げます。教員自身が様々な地域のまちづくりに関わってきたので、実体験をもとに教科書には載っていない現場の生の事例を紹介します。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

まちづくりの一つのアプローチとして、地域に住む方々の人生をひたすら聞いていくオール・ヒストリー調査というものがあります。聞き出した声をすべてつむぎあがけながら、地域の人が実際に感じている歴史が浮かび上がります。本城集落ではこのような歴史を地域の資源と捉え、小中学校の学習プログラムや、多世代間の交流プログラムに活用してきました。一方で、学校という組織の中に新しいプログラムを導入する難しさや、持続させる難しさがありました。

担当教員からの
メッセージ

地域の現場を何度も訪ねてください。頭で理解するのと、現場の体験は別のもので、現場の持つ感覚をつかんでください。
大学のプログラムに乗って活動している間は、地域にとってはお客様です。様々なプログラムをきっかけに、個として地域の現場と関わりを持てるようになることが大事です。大学生の間に広げたい人間関係が、人生を左右することになります。
アルバイトや部活動など、大学生活は色々忙しいという声を聞きますが、やりたいこと、やるべきことをやらざるを得ないように退路を絶つことも必要です。自分で自分の背中を押すことで、自分の未来を切り開いてください。



オール・ヒストリー調査



地域づくりワークショップ



田口 太郎准教授

23

【後期】地球環境と持続可能な社会

担当：齊藤 隆仁

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

地球環境問題に関する世界の状況を紹介し、世界の中での先進的な課題解決の取組事例に触れた上で、地球レベルの大きな問題が諸島の地域の取組とどのようにつながっているかを解説します。諸島においても、地球環境レベルの課題意識を持った様々な取組が行われています。上勝町のゴミの排出をなくすことを目標に掲げたゼロ・ウェイスト運動や、佐那河内村の太陽光・風力発電など、徳島県内における再生可能エネルギーの取組は、化石燃料や原発の問題、最終的には地球レベルの気候変動への課題意識につながっています。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

徳島県内の事例を世界や日本の事例と比較するために、教室では動画やゲストスピーチを取り入れます。ゲストスピーチでは、徳島で環境問題に取り組んでいる社会人の方をお招きして、授業と関連のあるテーマを語ってもらいます。技術者として働き退職された方などに、社会人の現場で得た技術や知識を地域の環境問題にどのように活用しているかといった話は、学生にとっては非常に刺激になるでしょう。
さらに、課外活動として森づくりやゼロウェイストなど、現地でやっている地球環境と関連する取組を見学する機会を提供します。例えば、神山町にはかつての水力発電所の跡地が博物館として残っています。この発電所は、昭和30年代まで使われていたが、国の拡大造林政策で杉林を作り出してから水量が減っていき、発電がペイしなくなった背景があります。発電所の廃跡を水源と合わせて見ると、地域資源としての水の価値と共に、サステナブルな地域の可能性に気づくことができます。

担当教員からの
メッセージ

大学時代に、課題発見・課題解決の基礎を体験を通して学んでください。徳島には、観光地になっていないものの、魅力溢れる場所がたくさんあります。授業の中でも紹介していきますが、積極的に自分の足で訪れ、お気に入りの場所を発見してください。大学の中で大きな課題意識を持って学ぶと同時に、自分の課題となる地域を見つけ、学んだことを地域とつなげて考えられるようになってください。



佐那河内村風力発電見学会



上勝町森林資源活用見学会



齊藤 隆仁教授

24

地域科学教育科目の紹介

【後期】統計データからみる徳島県

担当：徳島県政策創造部統計データ課職員

とくしまの
どのような課題が
学べるの？

人口、結婚と出産、商業、工業、経済動向、消費動向、就業状況など、授業の各回のテーマに合わせて担当職員が、データの分析から徳島県の特徴などの解説を行います。統計を上手に扱うことによって、多様な見方を見出すことができます。
例えば、皆さんは徳島県は大都市と比較して少子高齢化が進んでおり、経済が衰退しているというイメージを持っているかもしれませんが、人口増減と、地域の産業動向やGDPを組み合わせてみると、電気機械や化学の増産効果が牽引して、徳島県の近年の一人当たりのGDPは大都市圏に負けない成長をしていることがわかります。このように、複数のデータを組み合わせることで、人口減少のイメージとは異なる、地域の別の側面が見えてくることがあります。

学びのために
どのような工夫が
されているの？

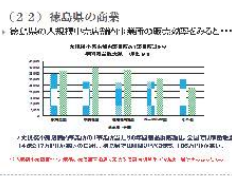
授業の中では、徳島県を題材に統計の種類や意義を理解してもらいます。具体的な統計データを紹介しながら、他都道府県との比較など全国の中での徳島県の位置づけを交え、統計を理解すると同時に徳島県の特徴がわかるような工夫をしています。
また、徳島県が独自に作っている経済指標を解説したり、オープンデータの活用する方法を解説します。統計を理解するだけではなく、自分たちで統計を利用し、徳島県や日本全体の経済・社会分野の現状や特色、課題を把握できるようになってもらいます。

担当教員からの
メッセージ

統計を学ぶことで、客観的かつ多面的に世の中の動向を分析する視点を身に付けることができます。みなさんの日常生活には、新聞やテレビの報道など、データが溢れています。日々報道されている統計データに目を留め、データをもとに社会の動向を考察するよう意識してみましょう。
自分でデータを集めて、課題を考えることができるようになってもらうことが、授業の最終目標です。物事の一面だけにとらわれるのではなく、様々な側面から客観的に見ることができるよう学生になってください。



授業では、統計データから見てくる地域社会の動向や、その捉え方について紹介します。



25

【前期】とくしまの環境を学ぼう

地球温暖化や廃棄物、水質汚濁・大気汚染等の環境問題と実践的な環境活動、国・県の施策などを学びます。また、現地視察研修に参加することで、地域の諸課題を知り、環境問題に取り組む意義を学びます。

【前期】歴史から学ぶ地域～宗教・社会～

徳島という地域について、主として歴史的な観点から考察し、その地域的な特色について学びます。その際には、読むこと、書くこと・調べること・考えること・意見を述べること・意見を聞くこと・批判することなど、様々な大学での学びと向き合い、自分で必要だと自覚した上で身に付けることを目指します。

【後期】実践なほうさい

主として、「防災・減災基礎」を受講して、徳島大学防災リーダー（防災士）と認定された学生を対象にして開講しています。防災活動を行うためには知識だけでなく、リーダーとして活動できる能力が必要です。この講義ではグループワークの方法、防災教育の指導法、災害ボランティアとして活動するための心得などを学習するとともに、被災者の心理や避難時に配慮の必要な人に対する支援方法などについて実践的に学習します。

【後期】実践・地域創生学

徳島大学地域創生センターが実施している「まちごとファクトリー」及び、那賀町、上勝町、美波町、神山町、にしあわのサテライトオフィスで開催する授業に参加して、地域課題・地域創生の取り組み・新しい試みを知り、自分の役目やできることをワークショップやグループワークで実践する授業を実施します。

【前期】実践力養成型インターンシップⅠ

【後期】実践力養成型インターンシップⅡ

徳島県内の企業・団体が抱える課題に対して、受入先と学生が中・長期にわたり共同してミッションの達成を目指す、実践型のインターンシップです。インターンシップ先ごとに参加学生でチームを組み、インターンシップ先での活動と大学内での活動（グループワークなど）を繰り返しながら進めます。

【前期】徳島で暮らす・徳島で働くを考える（eラーニング科目）

徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のOB・OGを講師に迎え、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、ディスカッションを行う主体的に考える授業です。徳島県の見え方から見た未来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の職者から学び、話し合うことで、将来の就職先として徳島の魅力について理解を深めることができます。

【後期】外国人と四国遍路の歴史（eラーニング科目）

四国遍路の1200年の歴史における外国人の歴史を細かく取り上げ、彼らが持っている四国遍路についての感想や思いを考察して、世界への四国遍路PR活動や、これからの課題（例えば世界遺産活動）を紹介する授業です。

【前期】瀬戸内海論 その1（eラーニング科目）

【前期】瀬戸内海論 その2（eラーニング科目）

物理学、化学、生物学、地学などの自然科学的観点から瀬戸内海の環境問題、資源問題に接近すると同時に、法学、経済学などの社会科学の観点からも対象に接近します。eラーニングによる映像配信型授業であり、瀬戸内海の環境問題、資源問題を対象に調査研究している研究者によるオンライン形式の授業となります。

【後期】瀬戸内地域活性化政策 その1（eラーニング科目）

【後期】瀬戸内地域活性化政策 その2（eラーニング科目）

瀬戸内地域の活性化に関わる具体的なプロジェクトについて、そのプロジェクトを行う意義を考え、プロジェクトの具体策に係る検討を進めていくことで、地域活性化を進めるための考え方を身につけます。また、地域活性化政策の推進に関する行政制度などの基本的な仕組みや、県内外の地域活性化に関する事例について学びます。

26

平成 29 年度 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの実施について

1. 申請書上の計画と実施について

(1) 実践力養成型インターンシップの趣旨・目的

実践力養成型（寺子屋式）インターンシップとは、徳島の企業・団体の抱える経営課題から抽出したミッションに対して、企業・団体と学生が協働して取り組む、プロジェクト型のインターンシップである。特に徳島県にて雇用の創出が見込まれる、次世代技術関連分野、地域医療・福祉関連分野、6次産業化関連分野、地域づくり・観光・ICT 関連分野の 4 つの分野の企業・団体を中心にインターンシップ実施のための関係構築を行っている。

関係構築後は、受入先の経営者および受入担当者と COC プラス推進コーディネーターが連携してプロジェクトを組み立て、参加希望学生と企業のマッチングを経て、学生がインターンシップに参加するとともに、プロジェクトに取り組む中でのアドバイスやメンタリングなど、インターンシップ開始後もコーディネーターおよびドン（学内メンター）がプロジェクト達成の為に支援を行う。（図 1）

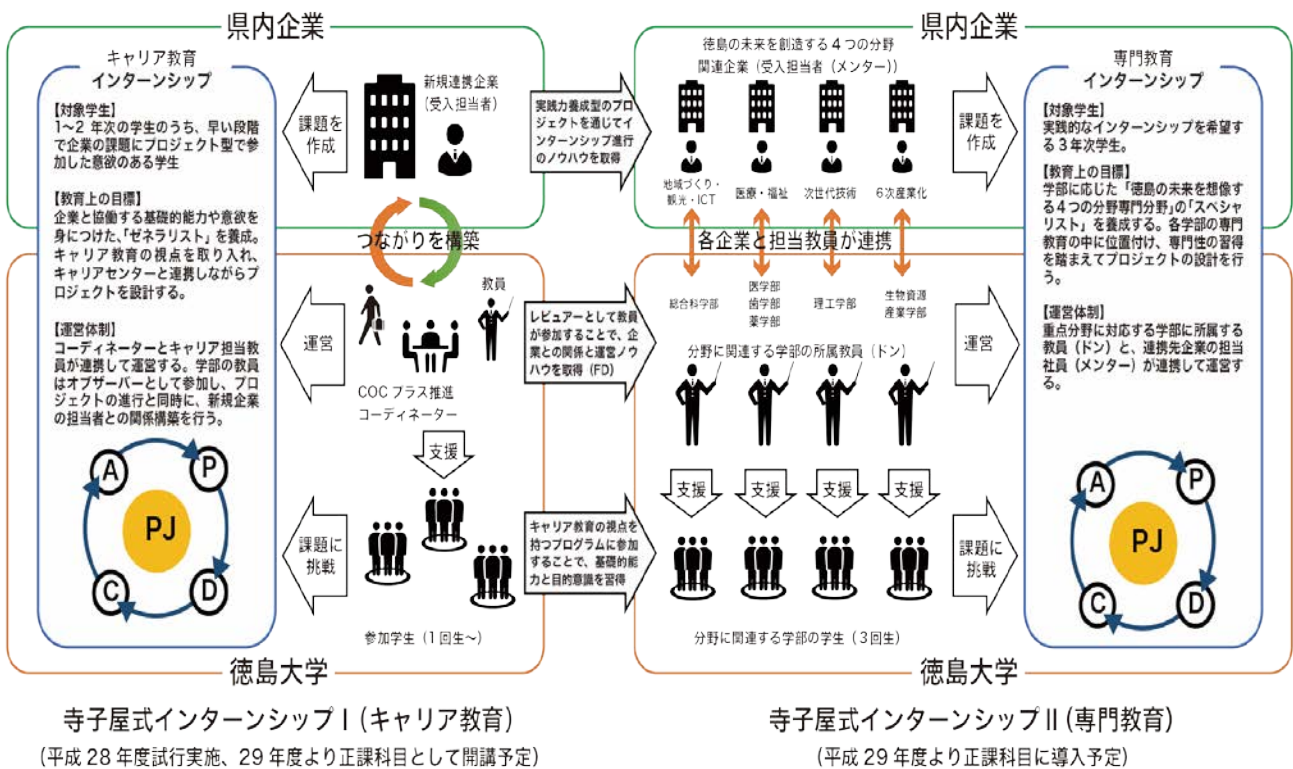


図 1 実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ事業スキーム図

(2) 計画と実績

(1) 受入団体数と参加学生数

		計画	実績	達成率
28 年度	受入団体数	7 社	7 社	1 0 0 %
	参加学生数	3 5 名	3 5 名	1 0 0 %
29 年度	受入団体数	1 5 社	1 5 社	1 0 0 %
	参加学生数	5 0 名	5 4 名	1 0 0 %

(2) 受入企業・団体

	平成 28 年度	平成 29 年度
COC+ 参画企業	大塚テクノ株式会社 特定非営利活動法人マチトソラ 徳島大学上勝学舎	有限会社檜山農園（2 年目） 一般社団法人徳島新聞社（2 年目） 大塚テクノ株式会社（2 年目） 株式会社テレコメディア
その他 企業	有限会社檜山農園 一般社団法人徳島新聞社 株式会社あわわ 株式会社 QLiP	株式会社 QLiP（2 年目） 株式会社あわわ（2 年目） 日本赤十字血液センター 港産業株式会社 徳島トヨタ自動車株式会社 徳島大学院社会産業理工学研究部 アール・エスホーム株式会社 株式会社松本コンサルタント 一般社団法人 Disport 廣間組有限会社 株式会社ネオビエント

2. 平成 28 年度実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ導入にあたっての主要改善点と効果

	28 年度	29 年度	効果
体制の変更	COC プラス推進コーディネーターが県内企業とともにミッションを作成し、関心のある課題に挑戦する学生を支援する形でプログラムを進めた。また、ドン（学内メンター）を COC プラス推進本部のコーディネーターが務めた	本インターンシップを教養教育の正課科目に位置づけ、前期開講「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップⅠ」および、後期開講「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップⅡ」を実施した。各プロジェクトを 1～2 名の大学教職員が担当した。	1～2 年生参加者数 28 年度 9 名/全 35 名中 (25.7%) 29 年度 22 名/全 54 名中 (40.7%)
外部評価委員指摘要綱	・特に研究部門を有する企業においては、秘匿情報も多く、長期になると、お互いにリスクが発生する可能性がある。このため、企業との間で、具体的な約束事（契約、或いは要項）を取り決め、インターンシップの円滑な推進を図って頂きたい。 ・施行準備としては十分な実績である。今後、大学生としての学びの設計や評価の仕組みが構築され、それを高精度で実現できるようなプログラム及びプロジェクトが構築されていくことを期待する。 ・今の学生は、情報量が多いが、コミュニケーション力・プレゼン力は少ないのではないかと。また、いろいろな五感で感じる経験も乏しいと思われるので、インターンシップの内容に期待している。また、徳島のいろいろな現地（海、中山間地も含めて）に接する機会もあれば良いのではないかと。	・とくしま元気印イノベーター人材育成プログラムの一部なのか別なものなのかが分かりにくい。 ・実践力養成型インターンシップについては、寺子屋式インターンシップの試行として実施され、参加学生、企業の意見を収集した上で 29 年度の正規科目としての開講に結びつけている、内容が充実しており、学生、企業の満足度も高く、進捗は順調、内容は計画以上である。 ・成果目標を設定しにくい、学生の意欲、能力を評価する手法や視点が必要ではないか。 ・各企業のプロジェクトが丁寧に設計されており高い学習効果につながることを期待される。ただし、評価指標としては思考行動特性を評価できるものが望ましいと考える。 ・「寺子屋式インターンシップ」については従来のインターンシップの分類とは別次元で、様々なインターンシッププログラムにおいて高い教育効果をもたらす仕組みとして機能することが期待される。そのためにコーディネーターと教員、受入企業のメンターの役割を明確にすることが望まれる。	実践力養成型（寺子屋式）インターンシップが「職業人意識とコミュニケーション力」を育成するプログラムとして機能しているかを測定する 1 つの指標として、社会人基礎力や学士力といったジェネリックスキルをリテラシーとコンピテンシーの 2 側面から測定する分析テスト「PROG」を導入した。 結果、リテラシー、コンピテンシーともにインターン参加後での伸長が見られた。 特に対人基礎力、対自己基礎力での伸長が著しい。これは、異なる世代、異なる価値観を持つ人とチームを組み、成果を出すことにこだわりプロジェクトの完遂を目指すという本インターンシップの特性のため、この力が伸びたものと考えられる。また、自分の力量以上を求められる場面、壁に直面しながらもそれ乗り越えやり遂げる経験を経て、対自己基礎力が伸びた。

3. 実施概要とスケジュール

平成 28 年度から導入、試行準備を進めていた「寺子屋式インターンシップ」を正課科目として開講した。15 受入団体において 54 名が受講、各プロジェクトを 1～2 名のドン（学内メンター；大学教職員）が担当した。

参加学生や受入団体、大学関係者に対するアンケート調査を実施した結果、プロジェクト組成、インターンシップフェア、事前研修・事前講習、インターンシップ実施中、中間報告会、最終報告会及び学生・企業の振り返り会において 257 件の意見が寄せられ、ほぼ 100%（99%以上）が「満足」と回答、同インターンシップの有効性が認められた。また PROG(別添資料①)によるインターン前後の進捗率を計測したところ、リテラシー・コンピテンシー共に大きな伸長が見られたことにより、同インターンシップの学習効果が確認できた。（参考資料①～③参照）

(1)平成 29 年度のドン（学内メンター）のプロジェクト担当状況は以下の通りである。

分野	NO	受入団体名	ドン（学内メンター）
次世代技術 関連分野	1	大塚テクノ株式会社	川崎 克寛 (COC プラス推進コーディネーター)
	2	株式会社松本コンサルタント	森本 恵美(特任助教)
	3	港産業株式会社	矢部 拓也（准教授）
	4	徳島大学大学院社会産業理工学研究部	花房 世規（技術補佐員） (サポーター)
地域医療・福祉関連分野	5	株式会社テレコメディア	川崎 克寛 (COC プラス推進コーディネーター)
6 次産業化関連分野	6	有限会社樫山農園	橋本 直史（講師）
地域づくり・観光・ICT 関連分野	7	徳島県赤十字血液センター	後藤 優樹（助教）
	8	株式会社 QLiP	浮田 浩行（講師）
	9	一般社団法人徳島新聞社	日下 一也（講師）
	10	株式会社ネオビエント	大淵 朗（教授） 宮川 純子（学生支援課副課長）
	11	廣間組有限会社	尾野 薫（助教）
	12	一般社団法人 Disport	畠 一樹(特任講師)
	13	徳島トヨタ自動車株式会社	松嶋 一成（准教授）
	14	アール・エスホーム株式会社	金井 純子（助教）
	15	株式会社あわわ	北岡 和義（講師）

(2)参加学生数内訳

15 の受入団体で、1 年生 5 名、2 年生 17 名、3 年生 27 名、4 年生 5 名の計 54 名の学生が参加した。受入団体別参加者数の内訳は以下に記す。

分野	受入団体名	参加学生数 (1 年生)			参加学生数 (2 年生)			参加学生数 (3 年生)			参加学生数 (4 年生)			合計
		総合科学部	工学部／理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部／理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部／理工学部	生物資源産業学部	総合科学部	工学部／理工学部	生物資源産業学部	
次世代術 関連分野	大塚テクノ株式会社	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	2
	株式会社 松本コンサルタント	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	3
	港産業株式会社	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	3
	徳島大学大学院社会産 業理工学研究部	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	3
地域医療 福祉関連分 野	株式会社 テレコメディア	-	-	-	1	1	-	4	-	-	-	-	-	6
6 次産業化 関連分野	有限会社榎山農園	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	3
地域づくり 観光・ICT 関連分野	徳島県 赤十字血液センター	-	-	1	4	-	-	1	-	-	-	-	-	6
	株式会社 QLIP	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	2
	一般社団法人 徳島新聞社	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	2
	株式会社ネオビエント	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2	2	-	5
	廣間組有限会社	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	5
	一般社団法人 Disport	1	-	-	1	-	-	-	2	-	-	-	-	4
	徳島トヨタ自動車 株式会社	-	1	-	-	2	-	-	1	-	-	-	-	4
	アール・エスホーム 株式会社	-	-	-	3	-	-	1	-	-	-	-	-	4
	株式会社あわわ	-	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	2
合計		1	2	2	12	4	1	13	14	0	3	2	0	54

(3)実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ 年間プログラム実施スケジュール

時期	項 目
4 月	企業訪問・プロジェクト組み立て コーディネーターが受入団体を訪問し、プロジェクトの組み立てを行う。 ① (46 社訪問)
5 月	インターンシップフェア開催 (5 月 11 日) 受入団体が学生にプロジェクトの紹介を行うインターンシップフェアを開催。 ② (プレゼン企業 15 社 / 来場者数 221 名)
6 月	マッチング 受入団体とエントリー学生が面談を行い、マッチングを行う。 ③ 効果測定の実施 (1 回目：インターン参加前) 社会人基礎力を測る自己分析テストを受験。 ④
7 月	事前研修 参加学生に対し、コーディネーターが事前研修を実施。(最低 180 分×3 回) ⑥
8 月	事前講習 受入団体担当者に対し事前講習を実施。 ⑦
8 月	インターンシップ開始 プロジェクト毎に随時インターンシップ開始。 受入団体数 15 社 / 参加学生数 54 名
9 月	企業訪問 インターンシップスタートアップの企業訪問。 ⑧
9 月	第 2 回ドンミーティング 各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターが中間報告会の方針について協議。 ⑤
10 月	企業訪問 中間報告会前の受入団体訪問。 ・プロジェクトの進捗確認 ・学生の取り組み姿勢 等 ⑧
10 月	ポスターセッション講習を実施 中間報告会に向けての振り返りとポスターセッションについての講習を実施。 中間報告会開催 (10 月 20 日) プロジェクトの進捗報告、気づきの共有のため、中間報告会を開催。 ①各プロジェクトチームのポスターセッション ②他プロジェクトの参加学生・受入団体との情報交換 ⑨
11 月	
12 月	最終報告会に向けたフォローアップ 最終報告会に向けての資料作成アドバイス、プレゼン練習などを実施。
12 月	第 3 回ドンミーティング 各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターが最終報告会の方針について協議。 ⑤
1 月	企業訪問 最終報告会前の受入団体訪問。 ・最終報告会についての説明 ・プロジェクトの進捗確認 等 ⑧
1 月	最終報告会 (1 月 20 日) プロジェクトの成果報告を行う最終報告会を実施。(来場者数 166 名) ①学生+企業報告（全体向けショートプレゼンテーション） ②学生報告（分科会形式のプレゼンテーション） ③企業報告（分科会形式のパネルディスカッション） ⑩ 効果測定の実施 (2 回目：インターン参加後) 社会人基礎力を測る自己分析テストを受験。 ④
2 月	第 4 回ドンミーティング 各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターが次年度の方針について協議。 ⑤
2 月	修了生振り返り会兼 PROG 解説会 (2 月 18 日) インターンシップに参加しての学びを深めるための振り返り会を実施。 ⑪
3 月	受入団体振り返り会 (2 月 26 日～3 月 2 日の間に実施) 今回のインターンシップの知見の共有と来年度のインターンシップの課題について協議。 ⑫

実践力養成型(寺子屋式)インターンシップ 年間プログラム実施スケジュール

※項目番号は前ページ「年間実施スケジュール」の表と対応

①プロジェクト組成（企業訪問）（2月～4月）

インターンシップ受入先の開拓、及びプロジェクトの組み立てを行うため、県内企業及び団体への訪問を実施した。（42 団体を訪問）

経営者ならびに受入担当者とコーディネーターが協議を行い、①経営と直結した課題であること、②課題解決が受入団体の益になること、③学生にとって十分な学習効果が見込まれること、という3つの条件のもとにインターンシップで取り組むべき課題を整理し、プロジェクトを組み立てた。

受入団体とコーディネーターが共同でプロジェクトを組み立てることで、インターンシップの事前準備段階での受入団体の負担を軽減した。また、課題解決型のインターンシップとすることで受入団体にとってのメリットを明確にする効果を図った。

②インターンシップフェア（5月11日）

組み立てたプロジェクトの内容を学生に伝え、インターンシップへの参加を募るため、受入先担当者から学生に向けてプロジェクトを紹介するプログラムを実施した。（15 団体がそれぞれのプロジェクトを紹介）

第1部は、各受入団体が参加学生全体に向けて3分でプロジェクトを紹介するプレゼンテーションを実施した。第2部は、各プロジェクトのブースを設け、興味を持った学生がプロジェクトの詳細な説明を受ける個別説明会を実施した。

③エントリー受付およびマッチング（5月～6月）

インターンシップ開始後のミスマッチを防ぐため、インターンシップへのエントリー学生と受入先担当者が面談する場を設けた。受入団体からは、学生の参加動機や志望理由、その他の活動（アルバイト、部活、授業等）の状況等を、学生からはプロジェクトの内容や実施日程等についての確認を行い、プロジェクトへの参加に関しての諸条件や最終意思を相互に確認した。

④効果測定の実施（6月）

インターンシップ参加前と参加後での学生の社会人基礎力（ジェネリックスキル）をはかるため、効果測定を実施した。なお、短期インターンシップ参加者、インターンシップ未経験者とも比較するため、本インターンシップ参加者以外の学生約50名にも受験を実施した。

⑤ドンミーティング（6月、9月、12月、2月）

各プロジェクトを担当するドン（学内メンター）とコーディネーターで各プロジェクトの進め方や進捗状況等の情報共有を行うと共に、本事業の効果や課題等について協議した。

⑥学生向け事前研修（7月）

インターンシップ開始後の活動を円滑に進めるため、社会人基本動作などのマナー講習や、プロジェクトの推進に必要な基礎知識等を学ぶ研修を実施した。

⑦受入団体向け事前講習（7月）

受入団体担当者を対象に、学生受入にあたっての留意点（学生への対処法、法令等）について、事前講習会を実施した。

⑧受入団体訪問（8月、10月、12月）

インターンシップの開始時、中間報告会前、最終報告会前の計3回、コーディネーターとドン（学内メンター）が受入団体を訪問し、学生の取り組み姿勢や進捗状況について情報共有を行った。インターンシップを進める中で発生した問題点と、その対応について、受入担当者と大学側が共有することで、プロジェクトの円滑な推進に繋がった。また、上記タイミング以外にも適宜必要に応じて受入団体を訪問し、プロジェクトの円滑化をはかった。

⑨中間報告会（10月）

プロジェクトの進捗の中間段階において、これまでの取り組み状況の振り返りを行い自己評価すると共に、各プロジェクトに取り組む受入団体、学生間での情報交換を行い、目標達成に向けた課題

の整理や今後必要となる取り組みの確認、意識の共有を図ることを目的として中間報告会を開催した。

⑩最終報告会（1月）

受入団体担当者、事業協働機関担当者、徳島大学学生及び教職員等を招き、インターンシップへの取り組み内容、成果、得られた学びを報告する最終報告会を実施した。

⑪修了生振り返り会（2月）

修了生が、インターンシップを通して得られた学びや気づき、参加前後での職業観などの変化について振り返り、これをもとに今後の学生生活の課題を展望するための振り返り会を実施した。

⑫受入団体振り返り会（3月）

受入団体が、インターンシップの振り返りをもとに知見を共有し、次年度のインターンシップ事業の課題について協議するための振り返り会を開催した。今年度の受入団体と次年度の受入を検討するCOC+事業関連団体、およびドンが参加し、インターンシップ実施の効果を共有すると共に、負担となった点・問題点の整理と対応策を協議した。

4. 徳島県連携事業

(1)徳島県地域グローバル人材育成事業トビタテ！留学 JAPAN 地域人材コース（COC+連携コース）

徳島県地域グローバル人材育成事業トビタテ！留学 JAPAN 地域人材コースと連携し、COC+連携コースを設置。県内企業のうち海外での事業展開の強化推進を図る企業3社を対象に、参加校から参加者を募り、東南アジア周辺国への留学体験も含めた課題解決型インターンシップを実施した。

COC+連携コース概要

受入団体名	期間(予定)	プロジェクトテーマ	留学先	参加学生
市岡製菓株式会社	H.29年9月 ～同10月	ベトナムの市場を調査し、日本の製菓のPR手法を(現地スタッフへ)提案する	ベトナム	四国大学文学部 国際文化学科4年 楠 郁弥
藤崎電機株式会社	H.29年8月 ～H.30年4月	自然エネルギー事業の海外展開実現に向けた課題をリサーチする	インドネシア	徳島大学工学部 化学応用工学科3年 藤井優輝
株式会社基(Motoi)	H.29年8月 ～同9月	台湾で「徳島の地産品」と「世界」をつなぐ仕組みをつくる	台湾	徳島文理大学総合政策学部 総合政策学科2年 森山慶子

(2)徳島県南部総合県民局

さらには徳島県との協働事業として南部総合県民局が行っている「四国の右下ふるさと回帰促進事業」との連携において他県学生と本学の学生との協働インターンシップを実施した。

協働インターンシップ概要

受入団体名	期間	プロジェクトテーマ	参加学生
一般社団法人 Disport	H.29年8月	地方の子供達へのアクティブラーニングプログラムを企画する	鈴木 誠史 (立教大学経営学部経営学科1年) 佐伯 歩美 (徳島大学工学部知能情報工学科3年) 櫻井 聖人 (徳島大学工学部建設工学科3年) 山川 真生子 (徳島大学総合科学部社会総合学科2年) 壺田 一平 (徳島大学総合科学部社会総合科学科1年)

5.プロジェクトの内容と成果について

1. 徳島県赤十字血液センター

【ミッション】 若者の献血意識の高揚に有効な広報物の提案

(1) プロジェクト背景・目的

近年、若い世代の献血者数が激減している。少子高齢社会の現在、輸血用血液の需要は高まることが予想されるが、数年後には必要数の確保が困難になることが推定されている。助かるはずの命が助からない、そんな事態に陥ることのないよう、必要な量の血液を確保すること、つまりは献血者数を維持していくことが血液センターの最大のミッションである。これまでの献血キャンペーンにはなかった視点から広報媒体を作成し、若者（徳島大学生）の献血意識向上を図ることを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8 月	・ 入社式、献血に関する勉強会 ・ 献血の呼び込みを体験
9 月	・ 広報物作成の材料となるアンケートの作成・実施
10 月	・ アンケートの集計／分析 ・ アンケート結果を元にした広報物の作成／学内設置 ・ 広報物設置の効果を計るアンケートの作成／実施
11 月	・ アンケートの集計／分析
12 月	・ 座談会の企画／実施／まとめ
1 月	・ 社内最終報告会の実施

(3) 実績・成果

学生アンケートを元にした広報ポスターの作成（間接的アプローチの効果検証）、および座談会の実施（直接的アプローチの効果検証）を行い、大学生に対しては間接的な広報手法よりも座談会等の直接的なアプローチ方法が効果的であることを見出した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 （ 所 属 ）
受入団体担当者	藤倉 温（献血推進課主事）
受入団体メンター	加藤 圭一郎（献血推進課係長）
学生	杉本 沙耶（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生） 大西 翔馬（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生） 桑野 里帆（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生） 清水 俊輔（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生） 前川 ゆい（徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生） 室谷 香苗（徳島大学生物資源産業学部生物資源学科 1 年生）
ドン(学内メンター)	後藤 優樹（徳島大学大学院社会産業理工学研究部生物資源産業学域 助教）

(5) ドン（学内メンター）コメント

課題に対し試行錯誤を繰り返し、献血意識喚起は一方的な広報物や講演会よりも座談会で効果的に起こることを見出した。課題解決能力及び人を動かすことの難しさを修練できた事から、意義深いインターンシップであったと考えている。



活動の様子

2. 株式会社 QLiP

【ミッション】効果的かつ効率的なプログラミング教育の開発

(1) プロジェクト背景・目的

2020 年から小学校でのプログラミング教育が必修化される。プログラミング学習に伴う「論理的な思考力と問題解決能力の育成」という側面が、プログラミング教育が注目されている理由でもある。しかし、同時に、小学校教育の現場で運用可能かつ効果的なプログラミング教育の在り方については、多くの 学校関係者、プログラミング教育関係者が頭を悩ませているのが現状である。そこで、小学校教育の現場で運用可能なプログラミングの授業プログラムを開発することを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7 月～	・徳島大学で実施されているロボットプログラミングクラブに参加し、大学で行われているプログラミング教育の実態を把握／課題の洗い出し。
8 月	・(株)QLiP 実施の授業に参加し、民間企業で行われているプログラミング教育の実態を把握／課題の洗い出し
10 月	・小学校の先生に対するアンケートの実施 ・小学校の先生に対するヒアリングの実施
11 月	・プログラミング公開授業の内容を検討 ・公開授業の広報（石井小学校より別途模擬授業実施の依頼）
12 月	・プログラミング公開授業／参加者との意見交換を行い授業内容を改善
1 月	・石井小学校での模擬授業準備
2 月	・石井小学校での模擬授業の実施 ・報告書作成／まとめ

(3) 実績・成果

公開授業を元に小学校教育の現場で運用可能な授業プログラム（学習指導案）を作成した。さらに、作成した学習指導案をもとにしたプログラミング授業の実施依頼を石井小学校から受け、石井町内の小学校（5 校）の教員を対象とした研究授業の実施につながった。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 （ 所 属 ）
受入団体担当者	江本 大輔（情報責任者）
受入団体メンター	田中 宏典（代表取締役）
学生	森 美咲（徳島大学工学部知能情報工学科 3 年生） 菊池 優大（徳島大学工学部電気電子工学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	浮田 浩行（徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 講師）

(5) ドン（学内メンター）コメント

このインターンシップは教育を行うことをテーマにしたものであるので、参加した学生は人に教えるという立場から小学生への学習内容(ここではプログラミング)についてより深く考えることができたのではないかと思います。また、教えるということはコミュニケーション能力が必要であり、この点についても学生には良い学びの場であったと思います。



活動の様子

3. 一般社団法人徳島新聞社

【ミッション】ママさん世代の新聞購読者数を増やすためのツール作成

(1) プロジェクト背景・目的

近年、若年世帯における新聞離れが進んでいる。一方で、義務教育に新聞が取り入れられたり、家庭教育の中での新聞の重要性が注目されたりと、新聞の価値が見直されてきているのも事実である。家庭に新聞がある環境をつくるには、まずは保護者に対し、新聞が子供の教育に役立つことはもちろん、保護者の日常生活においても役立つことを知ってもらうことが重要だと考えている。そこで、本プロジェクトでは 20～30 代の未就学児童をもつ保護者をターゲットに、新聞購読者数を増やすためのリーフレットを作成することを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8 月	・育児、教育雑誌、女性誌から対象世代のママさんのニーズを把握
9 月	・把握したニーズに関わるキーワードを選択、抽出
10 月	・対象世代ママさんの情報ニーズに関するアンケートの作成
11 月	・対象世代のママさんにアンケートを依頼（幼稚園経由）／配布
12 月	・アンケートの回収
1 月	・アンケート結果の集計
2 月	・対象世代のママさん向けリーフレットを作成
3 月（予定）	・対象世代のママさんにリーフレットを配布（予定）

(3) 実績・成果

徳島県内の各幼稚園を通じて対象年代のママさん約 1000 名にアンケートを実施。既存の「新聞＝事件・事故・政治・経済」といったイメージを払拭し、「新聞＝生活の中で役立つ情報が掲載されている」ことを PR するリーフレットを作成した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名（所 属）
受入団体担当者	木村 直哉（販売部）
受入団体メンター	手束 泰二（販売部部長）
学生	土居 篤史（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生） 井戸垣 信吾（徳島大学理工学部理工学科（機械）2 年生）
ドン(学内メンター)	日下 一也（徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 講師）

(5) ドン（学内メンター）コメント

今回のプロジェクト活動は、インターン生にとって貴重な経験だったと思う。彼らが一番に学んだことは期限を守ることの大切さと難しさであった。社会では信頼関係を構築していくことが重要であり、そのためには約束と期限を守ることが必要となる。学生という立場の甘えに伴うその認識の欠如や経験不足による見通しの悪さなどから軌道に乗るまでに時間をかなり要した。その結果、彼らがもっと挑戦したかったであろうことができなくなったのではないかと想定される。これらの経験はきちんと記録し、未来におけるプロジェクトの糧として役立てて欲しい。



活動の様子

4. 港産業株式会社

【ミッション】徳島県内でのロボットの認知度向上と拡販施策の提案

(1) プロジェクト背景・目的

少子高齢化による労働人口の減少、医療・介護分野での重労働、高齢者への生活支援等、今後ますます加速する社会課題に対し、「次世代ロボット」の普及促進が大きく期待されている。これまでは製造業のお客様を中心に産業用ロボットを販売してきたが、今後は上記のような課題解決のため、これまで当社が参入していない業界に対してもロボットを拡販させていきたいと考えている。そこで本プロジェクトでは、「徳島ビジネスチャレンジメッセ AI ロボット展」への集客活動を通して今後ロボットの普及が期待される分野の企業に対し PR を行うと共に、拡販のための施策を提案する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7 月	・企業レクチャーを受け、ロボットに関する基礎知識を習得
8 月	・徳島ビジネスチャレンジメッセへの集客方法検討 ・集客ターゲットの選定
9 月	・ターゲット別のアプローチ方法検討 ・ターゲット別の電話マニュアル作成／チラシ・案内状作成等 ・集客活動の実施
10 月	・徳島ビジネスチャレンジメッセ本番
11 月	・報告書作成／まとめ

(3) 実績・成果

介護・福祉・農業等をはじめとする新規顧客層へアプローチを行い、その中から 40 人を集客した。来場者に対してはフォローアップという形で営業を行うことができ、港産業の新規顧客層の開拓につながった。また、来場者の声から、ロボット普及・拡販のための施策を提案した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	金田 雅哉 (ロボット課課長代理)、野口 栄美 (執行役員)
受入団体メンター	林 正 (取締役)
学生	合田 剛史 (徳島大学工学部化学応用工学科 3 年生) 角倉 優花 (徳島大学工学部電気電子工学科 3 年生) 新免 歩 (徳島大学理工学部理工学科 (電気) 1 年生)
ドン(学内メンター)	矢部 拓也 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域 准教授)

(5) ドン (学内メンター) コメント

徳島大学 OB の林さんは先輩として「学生の学ぶ心、経験してゆくことが大事！」という大きな心で接してくれ、現場を受け持つ野口さんはビジネスの厳しさを示し、金田さんは学生に近い目線でフォローをしてくれており、多角的な視点と重層的なビジネスの構造が学べる機会になっていると思います。自分たちの仮説通りであった所はどこであり、自分たちの予想を上回った (下回った) ところはどこであったのか？と、自分たちの活動をきちんと検証することで、今後の可能性が見えると思います。



活動の様子

5. 株式会社テレコメディア

【ミッション】 コールセンターアルバイトのブランディング

(1) プロジェクト背景・目的

現在、社会貢献の一環として若者のキャリアサポート（人材育成）を検討している。コールセンターの仕事は顔の見えない電話でのコミュニケーションであり、仕事を通じて社会人として働く上での基礎力やマナーが身につく、コミュニケーション能力が向上する。就職活動や社会にでた際に役立つ能力がアルバイトを通して自然と身につく為、多くの学生にコールセンターでのアルバイトを選択してもらい、キャリアアップの機会を提供したいと考えているが、コールセンターの認知度が低い事が課題である。そこで本プロジェクトでは、コールセンター業務で身につく力を整理しアピールするとともに、キャリアアップを目指す若者が継続的に入ってくる仕組みを策定する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7 月	・テレコメディアで基礎研修
8 月	・学生のキャリア意識とアルバイトやコールセンターに関する実態調査を実施
9 月	・調査を元に広報ツールの決定
10 月	・広報ツール完成 ・徳島大学、四国大学、文理大学にて広報／営業活動を行う
11 月	・広報の継続 ・テレコメディア見学会の実施
12 月	・徳島大学キャリア支援室との連携講座の実施 ・徳島大学サポート系サークルとの連携講座の実施

(3) 実績・成果

インターンシップ期間中に 16 名のアルバイト生を獲得し、学生のニーズに対応した雇用形態のプロトタイプ（キャリアバイト）を確立した。キャリアアップを目指すアルバイト生（キャリアバイト生）の育成を社員が行うことで社員自体の人材育成にもつながる。また、大学のキャリア支援室やサポート系サークルとのつながりを構築することで学生に対する継続的なアプローチを可能にした。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 （ 所 属 ）
受入団体担当者	平島 夏美（コーポレートデザイン部）
受入団体メンター	葛籠 枝美（コーポレートデザイン部マネジャー）
学生	大西 厚徳（徳島大学理工学部理工学科（機械）2 年生） 中谷 優花（徳島大学総合科学部人間文化学科 3 年生） 近久 葵（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生） 福良 奈美（徳島大学総合科学部人間文化学科 3 年生） 廣田 まい（徳島大学総合科学部社会総合学科 3 年生） 藤田 千裕（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	川崎 克寛（COC プラス推進コーディネーター）

(5) ドン（学内メンター）コメント

このプロジェクトの性質は、広い意味でこれからの「働き方」を示唆する、ユニークな取組であったように思います。プロジェクトに取り組んだ 6 名の学生たちにとって、全てが新しく、また緊張感の伴う経験でした。プロジェクトの裏側では学生たちは学業、アルバイト、部活動などの両立に苦闘し、時には何の為に自分がこの場所にいるのかさえ、見失いかけることもありましたが、やり遂げるという経験を経て、つづける力、つながる力、もちこたえる力を大きく伸ばしたように思います。



活動の様子

6. 徳島トヨタ自動車株式会社

【ミッション】若者の購買意欲を刺激するイベントの企画運営

(1) プロジェクト背景・目的

若年層の車離れが進んでいる昨今、若年層の自社客を離さないこと、若年層の新規客を獲得することが重要課題となっている。徳島には「オートモール徳島」という全国でも有数のモールがあるにも関わらず、若者への認知が進んでいない状態である。車の購入に向けた第一歩として、まずはオートモールの認知拡大を図りたい。そこで本プロジェクトでは、オートモールの認知度向上を図るため、若者（大学 生）向けのイベントを企画、運営する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8月	・ イベントの企画
9月	・ チラシの作成
10月	・ 広報活動 ・ ハロウィン×車のイベントの実施
11月～	・ 若者の車に対するニーズを調査するためのアンケートを実施
1月	・ アンケートの分析
2月	・ 提案書の作成

(3) 実績・成果

イベント当日に台風が重なったこともあり、当日の大学生の参加者はいなかった。イベント後に若者の車に対するニーズ調査を実施し、結果を元に若者向けイベントの企画提案書をまとめた。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 （ 所 属 ）
受入団体担当者	安田 壮（管理部）
受入団体メンター	有持 勝也（業務課係長）
学生	田中 智子（徳島大学理工学部理工学科（電気）1年生） 山崎 和志（徳島大学理工学部理工学科（機械）2年生） 石本 滉大（徳島大学理工学部理工学科（機械）2年生） 三好 聖一（徳島大学工学部機械工学科3年生）
ドン(学内メンター)	松嶋 一成（徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域 准教授）

(5) ドン（学内メンター）コメント

自分の仕事が組織の中での他 仕事とどう関係していて、どう価値を生んでいるのか、組織の中で広い視野をもって仕事に取り組む重要性を理解できたのではないかと思います。



7. 徳島大学大学院社会産業理工学研究部

活動の様子

【ミッション】 常三島地区 研究機器の広報活動

(1) プロジェクト背景・目的

徳島大学では、計測・分析等の研究機器を多く有している。現在、これらの機器を教育・研究・地域貢献に効果的に活用するためのセンターを発足させる準備を進めている。しかし、どのような機器がどこにあり、何ができる機器なのか、利用するための窓口や管理者は誰なのかといった情報が煩雑化している。この問題解決のために、まずはその情報の整理が必須であり、その上で、企業はどのような機器を求めているのか、どのような仕組みにすれば企業の方が利用しやすいか、といった顧客のニーズを知ることが必要となっている。そこで本プロジェクトでは、センターの在り方をより顧客のニーズに即したものにするため、地域の企業における研究機器の利用ニーズを調査し、機器紹介パンフレットを作成する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8月	・ 学内の研究機器について知るため管理者の先生らに対するヒアリングを実施 ・ 企業のニーズを調査するためのヒアリング先の選定
9月	・ 企業へのヒアリングを実施
10月	・ 企業へのヒアリングを実施 ・ 企業のニーズに基づいた研究機器紹介パンフレットの試作を作成
11月～12月	・ パンフレットの試作に対して学内関係者らからレビューをもらい改善
1月	・ 企業ヒアリングを元に、大学 web サイトの改善に関する提案書を作成
3月	・ 徳島大学研究担当理事に対し成果報告

(3) 実績・成果

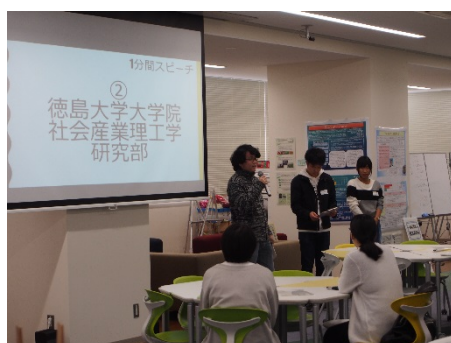
企業ニーズを反映したパンフレットの草案が完成した。センター発足時には今回の草案をブラッシュアップしたものを作成・活用する。学内、学外に対するヒアリングを通して徳島大学で発足予定のセンターに対する認知度向上と新たな課題発見につながった。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	原口 雅宣 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授)
受入団体サポーター	花房 世規 (徳島大学研究支援・産官学連携センター 技術補佐員)
学生	杉本 典優 (徳島大学工学部電気電子工学科3年生) 渡邊 謙造 (徳島大学工学部電気電子工学科3年生) 山本 菜々美 (徳島大学生物資源産業学部2年生)
ドン(学内メンター)	原口 雅宣 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部 教授)

(5) ドン (学内メンター) コメント

学外の方々や、学内の様々な先生方との関わりを通して、大学や大学で学ぶことに対して、より広い見方を得ることができたと同時に、“問題解決へ向けたアプローチ法”を実感できたと思います。今後の大学生活に是非これらを生かしていただきたいと思います。



活動の様子

8. 大塚テクノ株式会社

【ミッション】社員が生き生きと健康的に働ける職場の環境整備を検討する

(1) プロジェクト背景・目的

高齢化が進む昨今、労働生産性を向上させ、お客様によりよい製品・サービスを提供し続けるためには、社員の健康を「経営の資源」ととらえ、健康増進への取り組みを積極的に行う「健康経営」の導入が不可欠であると考えます。現在、食堂改善やスポーツ大会の開催等の健康増進の取り組みを行っている。加えて、グループ企業でも導入できるような健康増進の取り組みを検討したい。そこで本プロジェクトでは、社員の健康増進を図るため、各人が意欲的に取り組める効果的な仕組みを提案する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8月	・学内の研究機器について知るため管理者の先生らに対するヒアリングを実施 ・企業のニーズを調査するためのヒアリング先の選定
9月	・企業へのヒアリングを実施
10月	・企業へのヒアリングを実施 ・企業のニーズに基づいた研究機器紹介パンフレットの試作を作成
11月～12月	・パンフレットの試作に対して学内関係者らからレビューをもらい改善
1月	・企業ヒアリングを元に、大学 web サイトの改善に関する提案書を作成
3月	・徳島大学研究担当理事に対し成果報告

(3) 実績・成果

健康経営のスタートとして「健康宣言」を考案しホームページ上で公開した。また肉体的健康、精神的健康、社会的健康の3つを満たす仕組みとして、大塚テクノで実装可能な健康マイレージの仕組みを提案した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	長谷川 恵理 (人事総務部)
受入団体メンター	千葉 雄介 (人事総務部次長)
学生	森下 陽裕 (徳島大学工学部機械工学科 3 年生) 齋藤 瑞希 (徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生)
ドン(学内メンター)	川崎 克寛 (徳島大学 COC プラス推進本部 特別准教授)

(5) ドン (学内メンター) コメント

大きなテーマから始まった今回のプロジェクトですが、自分たちが関わっている事業が企業にとってどのような意義を持ち、その成果をどのように活用して行こうとしているのかを学生自身が理解できたときから、インターン生の取組姿勢が大きく変化し、このプロジェクトの推進が加速した。理想論やあるべき論ではなく、会社の実情や用途に即した“実装可能な仕組み”を考える過程で多くの学び、気づきを得られたと思います。



活動の様子

9. アール・エスホーム株式会社

【ミッション】お客様の声から見える、豊かさのミライ

(1) プロジェクト背景・目的

家は人生で最も大きな買い物であり、何十年と暮らし続ける場所になる。だからこそ、家を建てる時だけではなく、建てた後のアフターサービスも含め、お客様に寄り添った住宅提案を行うことが重要と考える。これまでの OB 客フォローに加え、今後は家族構成や年齢の変化によって家に求めるものがどう変わったか等、お客様の「本音」を引き出しそれに沿った住宅提案が必要となる。

そこで本プロジェクトでは、OB 客の本音を集め、住宅提案に反映させることで顧客 満足度の向上を図ることを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8 月	・ OB 客へのヒアリング項目を作成 ・ 社員の方へプレインタビュー ・ OB 客に送る事前アンケートを作成
9 月	・ OB 客にインタビュー日時にアポ取り ・ 社員へのインタビュー練習 ・ OB 客宅へ訪問してインタビュー実施
10 月	・ OB 客への事前アンケートやインタビューデータまとめ ・ インタビュー結果から OB 客の本音や暮らしに対するニーズを検証 ・ デザイン会社との打合せ ・ 冊子のラフ案を社内会議で発表、フィードバックを受けて修正 ・ 受入担当者が産休によりチームを離れる
12 月	・ 作成する冊子の方向性について社長と再検討
1 月	・ 冊子の印刷

(3) 実績・成果

お客様にとっての「豊かさとは何か」を探るための 1 つのアプローチとして、OB 客インタビューを行った。「今の家の満足な点・不満足な点」をまとめた冊子が完成し、1 つのアプローチ方法が検証された。聞き出した不満足な点については、リフォームの提案営業につなげることができると共に、「収納アドバイザー」となる人材を養成し派遣する等の新サービスの開発に繋がるものとなった。満足な点に関しては今後の営業活動の中の事例として活用される。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	福永 真理 (総務課長)、畠山 千佳
受入団体メンター	多田 譲治 (代表取締役)
学生	田中 美紀 (徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生) 仲野 翠 (徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生) 原田 有理 (徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生) 北原 健人 (徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生)
ドン(学内メンター)	金井 純子 (徳島大学創新教育センター 助教)

(5) ドン (学内メンター) コメント

今回のインターンシップを通してたくさん得たものがあると思います。そのなかでも「やり抜く力」の強さに感心しました。やり抜く力=グリットとは、一つの物事に継続して向き合い完遂する能力のことです。歯を食いしばるという意味もあります。お客様へのインタビューと冊子作りをやり抜いたからこそ、経営者が目指している本当のゴールに気づいたのではないのでしょうか。この経験は、社会人になった時に必ず役に立つと思います。



活動の様子

10. 有限会社榎山農園

【ミッション】経営戦略にちなんだ事業戦略を可視化する

(1) プロジェクト背景・目的

榎山農園では「榎山農業で世界を幸せにする」という経営理念のもと事業を展開している。近年、6次産業への業態転換を図り、“家業”ではなく“事業”としての農業経営のスタイルを確立することを目指している。それに向け、昨年度は“経営理念”の共有をテーマにインターンを実施した為、今年度は次のステップとして、経営理念を核とした“事業計画”を社員と共有することを狙いとしている。経営陣が思い描く、「経営理念を核とした今後の事業計画」を整理し、可視化する事で社員との意志共有を図ることを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
9月	・ ミッション、成果物に対するイメージをチームで統一するためのミーティングを重ねる
10月	・ 成果物のコンテンツの検討 ・ 「7S」のフレームワークを活用したパンフレットを作成することに決定
11月	・ 榎山農園社員、経営陣に対しヒアリングを行う
12月	・ パンフレットが完成
1月	・ 社内報告会を実施し、パンフレットの内容について共有

(3) 実績・成果

経営陣の思い描く今後3年間の榎山農園の中期事業計画を「7S」のフレームワークを活用して整理し、まとめたパンフレットを作成した。新入社員向けの教育ツールとして活用すると共に、既存社員との理念共有、事業計画の共有に用いることができた。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	堀江 祐輔 (フィールド課係長)
受入団体メンター	榎山 直樹 (専務取締役)
学生	河野 俊哉 (徳島大学工学部機械工学科3年生) 館脇 誠吾 (徳島大学生物資源産業学部1年生) 萩原 裕基 (徳島大学理工学部理工学科(化学)2年生)
ドン(学内メンター)	橋本 直史 (徳島大学生物資源産業学部 博士)

(5) ドン (学内メンター) コメント

長期のインターンシップを経て学生が変わった最大のポイントは、自主性と責任に対する自覚が芽生えた点だと感じます。具体的には、与えられたミッションに対する取り組み姿勢とチームワークが初期とは比べ物にならないほど伸びました。もちろん、受け入れ先である榎山農園様の受け入れ姿勢・体制に成功の要因があったことは外せません。



活動の様子

11. 株式会社松本コンサルタント

【ミッション】企業が求める人財を確保するためのツール作成

(1) プロジェクト背景・目的

公共事業に携わる企業として社会や地域に貢献できるよう、新技術の導入（ハード面）はもちろん、人間力と技術力を兼ね備えた人財の育成（ソフト面）にも力を入れている。しかし、売り手市場といわれる現在、地方の中小企業においては人財の確保が大きな問題となっている。当社でもより多くの学生に興味を持ってもらう為、現行の採用広報ツールの見直しが必要だと考えている。企業が求める人財採用のため、学生のニーズを盛り込んだ“学生目線”の採用広報ツール（会社パンフレット）を作成することを目的とする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7月	・企業研究を実施 ・他社のパンフレットとの比較研究
8月	・学生が企業パンフレットを見る際、何に注目するのかを探るため、学生向けアンケートを実施 ・社員が自社の何に魅力を感じているのかを探るため、社内アンケートを実施 ・パンフレット掲載コンテンツの決定
9月	・掲載コンテンツの素材収集 （社員インタビュー、現場同行しての写真撮影等）
10月	・パンフレットの試作を作成
11月	・パンフレットの試作を作成
12月	・社長および常務に対し、作成パンフレットのプレゼンテーションを実施 ・フィードバックをもとにパンフレットを改善 ・パンフレット構成案の完成

(3) 実績・成果

リクルート用のパンフレット構成案を作成した。学生が何に注目し、どこに興味を持っているのか、それがどのような表現をすると学生に魅力的に映るのか、という視点を企業に提供した。また、今回受入担当となったのは入社数年の若手社員であり、初めて業務の主担当というポジションで携わる中で、プロジェクトマネジメント等の学びを得ることができ、社員の育成に繋がった。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名（所 属）
受入団体担当者	森口 浩史（総務部）、武知 奈津実（総務部）
受入団体サポーター	小林 行夫（常務）
学生	中島 大樹（徳島大学工学部建設工学科 3 年生） 林 友海（徳島大学工学部建設工学科 3 年生） 竹内 幸熙（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	森本 恵美（徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 特任助教）

(5) ドン（学内メンター）コメント

受入担当者は、自社の社会的存在価値を言葉にして表現し、学生はその言葉を学生というフィルターを通して形にしていきます。良い成果物を完成させることは「プロジェクトの目的」です。しかし、「プロジェクトの意義」を問うということは、大学と企業が「何を彼らに期待しているのか」その真意を知ることです。若い受入担当者と学生は、その期待に気づいて以降、時には深夜に及ぶまで意見をぶつけ合いました。それぞれの役割や責任そして周りの期待。大きなプレッシャーのなかで、協力すること、言葉にすること、行動することでプロジェクトを達成していききました。そのプロセスは評価に値するものです。



活動の様子

12. 一般社団法人 Disport

【ミッション】未来を生き抜く子供を育てる教育法の開発

(1) プロジェクト背景・目的

日本の話込型教育では養えない、自ら考え自分の答え・表現を生み出す力を養うことは、地方で育つ子供たちには特に重要だと考える。「この環境ではできない。」「自分にはできない。」と諦めてしまう思考から、「どうすればできるのか?」を考える【可能思考性】を伸ばすためのアクティブ・ラーニングの開発をしていく必要がある。

当初の目的は、「地域を巻き込みながらアクティブラーニングのプログラムを開発し、子供たちの可能思考性を育成する。」というものであったが、プロジェクトを進める中で仮説と検証を繰り返す中で、最終目的を「Disport と教育委員会、学校関係者のパートナーシップをつくる機会の創出」に定め直した。

(2) スケジュール

時期	実施内容
8 月	・プロジェクトのゴールを共有 ・アクティブラーニングなどの抽象的な言葉の指すものをチームで共有するため、自分たちで定義づけを行う ・地域の活性化に必要な要素の洗い出しを行う
9 月	・アクティブラーニングには環境設定であるという仮説を立て、検証のためのアンケートを作成 ・海陽町の中高校生、保護者、教員を対象にアンケートを実施
10 月	・仮説が検証されアクティブラーニングには環境設定が必要との結果に至る
11 月	・環境設定を行いアクティブラーニングに至るためのサポートシステムを提案
12 月	・報告書を作成し海陽町教育委員会や各校にフィードバックを実施
1 月	・プロジェクト関係者でインターンシップのフィードバック会を実施

(3) 実績・成果

「アクティブラーニングはある定まったカリキュラムではなく、一つのスタイルである」というアクティブラーニングの仕組みを企業に提案した。この成果を基に企業は地域のハブ機能を担うことのできる可能性を得た。企業、教育委員会、学校関係者、地域の協働による人材育成の機会を創出した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	高畑拓弥(共同代表/人材育成事業部長)
受入団体サポーター	早川尚吾(共同代表/コンサルティング事業部長)
学生	佐伯 歩美 (徳島大学工学部知能情報工学科 3 年生) 櫻井 聖人 (徳島大学工学部建設工学科 3 年生) 山川 真生子 (徳島大学総合科学部社会総合学科 2 年生) 壺田 一平 (徳島大学総合科学部社会総合科学科 1 年生)
ドン(学内メンター)	畠 一樹 (徳島大学総合教育センター 特任講師)

(5) ドン (学内メンター) コメント

期間限定の社員として臨めたことで社会活動を行う意義や自己効力感を体感してもらえたと思う。また、社会活動が少ない学生にとって社会(企業、地域)と接点を持ったことで社会常識が備わり、今後のキャリア形成に効果的な影響が出ると期待できる。



活動の様子

13. 廣間組有限会社

【ミッション】日本三大ブランド杉「木頭杉」を使ったツアーの企画

(1) プロジェクト背景・目的

木頭には杉山が多く、土砂災害等の防止の為に間伐が重要である。かつて日本の三大ブランド杉と呼ばれた木頭杉も、現在は吉野や秋田に圧倒され、間伐材にいたっては殆どが放置されているのが現状である。そこで、この木頭杉の間伐材を用いて地域振興につなげられないか検討しており、その一手として、木頭杉の間伐材を用いたお箸の製造・販売を試作しているところである。

本プロジェクトでは、木頭杉の再ブランディング、地域振興のため、木頭杉やお箸を盛り込んだ木頭ならではのツアープランを策定する。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7月～8月	・ツアーのコンテンツになる地域資源発掘のため現地を視察 ・地元住民や役場関係者等へヒアリング調査を実施
9月	・メンバー各自でツアープランを起案 ・起案したツアープランを基に受入先と意見交換 ・ツアーコンセプトやテーマをメンバーで共有し、プランの再考と意見交換を繰り返す
10月	・ツアープランの中で現時点で検証可能なものを現地で検証
11月	・木頭だからできる、木頭でしかできないツアーにすべくブラッシュアップを重ねる。
12月	・ツアーのためのガイドマップを作成
1月	・ガイドマップとリンクしたRPG（リアル・プレイング・ゲーム）型ツアーの構想を提案

(3) 実績・成果

多層的で更新制のあるガイドマップの仕組みを考案し、マップとリンクしたRPG型ツアー（クエストの一部として木頭杉でのお箸づくり体験や伝統技能一本乗り体験などを盛り込んだ）の構想を策定した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 （ 所 属 ）
受入団体担当者	松本 恭典（技士）
受入団体サポーター	西田 靖人（専務取締役）
学生	森岡 壱誠（徳島大学工学部機械工学科 3 年生） 数藤 美奈（徳島大学総合科学部人間文化学科 3 年生） 來間 恵（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生） 米田 一貴（徳島大学総合科学部社会創生学科 3 年生） 土井 綾子（徳島大学総合科学部人間文化学科 3 年生）
ドン(学内メンター)	尾野 薫（徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 助教）



活動の様子

14. 株式会社ネオビエント

【ミッション】「働くとは」を考える

(1) プロジェクト背景・目的

本プロジェクトは、昨年度の実践力養成型インターンシップ参加学生が立ち上げ、企業に持ち込みしたプロジェクトである。厚生労働省の発表によれば、入社後3年以内に新入社員の約3割が会社を辞めるという。入社後のミスマッチを減らすためには、学生が「働くとは」を真剣に考える機会が必要だと考えた。また、受入先社長から、社員の帰属意識や中間管理職のモチベーション向上をはかりたいとの要望を受けた。そこで、本プロジェクトでは、実際に働いている社会人にヒアリングを行うことで、働くとは何かや自分の将来について真剣に考え、就職活動への臨み方を考える機会とする。また、企業にとっては、ヒアリングを受けることで仕事に対するやりがいや働く姿勢を再確認し、モチベーションの向上に繋げることを狙いとする。

(2) スケジュール

時期	実施内容
7月	・立ち上げたプロジェクトへの参加者を募るためチラシを作成・広報 ・応募学生に対するプロジェクト説明会を実施
8月	・プロジェクトメンバーの確定 ・インターンシップ開始前の事前研修のプログラムを考え実施
9月	・学生と社会人の差を知るため、社員と学生に対してアンケートを実施 ・アンケート結果の分析 ・社員に対するヒアリング項目の策定、ヒアリングの実施
10月	・社員向け報告会の実施
11月	・徳島大学キャリア支援室主催のセミナーにて学生向けに自分たちの活動と学びの共有を行うための報告会を実施
12月	・社員向け報告書、社長向け報告書の作成／提出

(3) 実績・成果

学生、社員双方に対し、「働くとは何か」を考え見つめ直す機会を創出した。また、社員ヒアリング等を通して見えてきた企業の課題とそれらを包括的に解決するための方策として「ネオビエントのブランディング」と、そこに至るための各観光施設等での具体的なツアー案や企画案を提案した。

(4) プロジェクトメンバー

	氏 名 (所 属)
受入団体担当者	藍原 理津子 (株式会社ネオビエント)
学生	篠原 諒子 (徳島大学総合科学部社会創生学科4年生) 高畑 優希 (徳島大学総合科学部人間文化学科4年生) 向井 麻美 (徳島大学工学部知能情報工学科4年生) 久保 文乃 (徳島大学工学部建設工学科4年生) 野義 友里 (徳島大学総合科学部人間文化学科3年生)
ドン(学内メンター)	大淵 朗 (徳島大学大学院社会産業理工学研究部理工学域 教授) 宮川 純子 (徳島大学学生支援課副課長)

(5) ドン (学内メンター) コメント

様々な方にお話を聴けたこと、自分達なりの成果をお伝えできたことは大変有り難い経験になったと思います。また、チーム(組織)について意識できたことは、プロジェクトメンバーにとって、一つの成果だと思います。



活動の様子

15. 株式会社あわわ →プロジェクト中止
【ミッション】あわわに WEB のウェーブを起こそう

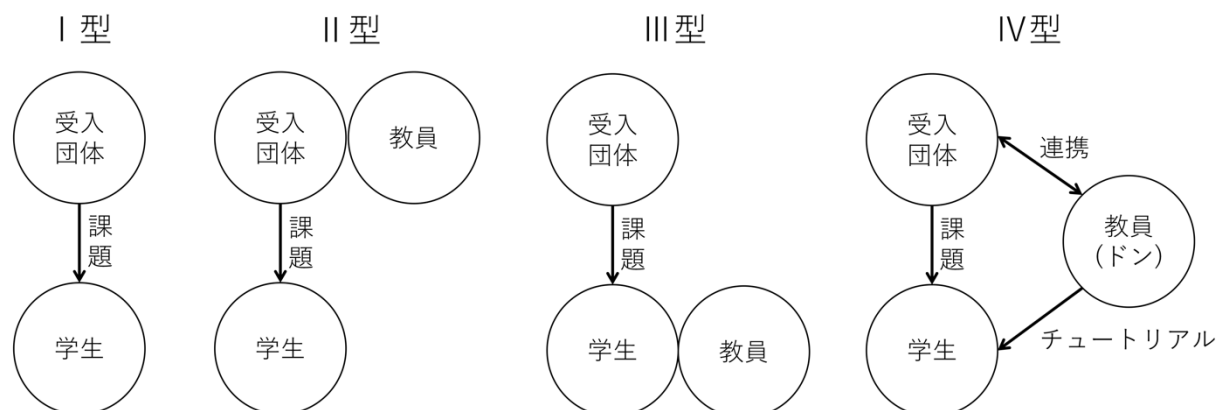
(参考資料①) 寺子屋式インターンシップの考え方について

1) 寺子屋式インターンシップの位置付け

寺子屋式インターンシップとは、本学がCOCプラス事業の一環として導入を進める新しいインターンシップの形式である。受入団体から提示されたプロジェクト型の課題に学生が取り組むに際し、チュートリアル方式を取り入れ、教員が「ドン」となって少人数の学生を担当し、受入団体のメンターとも連携して事前学習からインターンシップ、事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を行うことが大きな特徴である。プログラムやその進め方が受入団体に一任されている従来型のインターンシップと異なり、専門性やプロジェクトマネジメントに知見のある教員が介在することで、より高い教育効果が得られることが期待できる。

インターンシップに参加して社会を擬似的に体験することは、大学の中では得られない学びの機会である。ある種理想的な状況に教育が設計される大学でのプログラムと異なり、実社会では答えの出ない課題、意見や立場の異なる複数の依頼人、実現不可能な要求など、不条理な壁が立ちふさがることも多い。時には壁を乗り越えるだけではなく迂回路を探すようなやり方も模索しつつ、課題解決への道を探らねばならない。効果的に社会の疑似体験を得るためには、このような社会の生の課題に取り組むことが必要であるが、同時に体験が挫折で終わらぬような補助線が得られることも教育上重要である。

企業や団体と関わりながら学生が学ぶにあたり、教員が関わる形式はいくつか考えられる。教員が介在しない従来型のインターンシップ（Ⅰ型）に対して、教員と受入団体が協働で課題を考え、学びのプログラムを開発する形式（Ⅱ型）や、受入団体が課題を提示し教員と学生がチームで課題に取り組む形式（Ⅲ型）が考えられる。



Ⅱ型については、本学理工学部が専門科目として実践している「プロジェクトマネジメント基礎」の教育などが該当するであろう。「プロジェクトマネジメント基礎」では、食品加工を行う企業の食品廃棄物のリユースの手法を学生が考え、企業の担当者からレビューを受けるなど、実社会の課題を扱うPBLとしての学習が提供されている。Ⅲ型については、大学院で行われている企業との共同研究や、ゼミ形式で実際の社会課題を学ぶような教育が該当するであろう。

Ⅱ型、Ⅲ型の特徴として、教員が課題設定や課題解決のプロセスの指導にあたることで、限られた時間内で効果的な教育を行うことが可能となるが、Ⅰ型の持つ社会の疑似体験的な側面は弱まる。受入団体（クライアント）と学生の独立した関係を維持しつつ、教員（ドン）が学生に対して補助線を示す役割を担う（Ⅳ型）ことが、寺子屋式指導法の狙いである。

2) 寺子屋式指導法の特徴

1) で示したように、寺子屋式指導法においては受入団体（クライアント）と学生の独立した関係を維持することが重要となる。教員は、学生がプロジェクトで取り組む作業を直接指導することは避けなくてはならない。こうした条件下で成功裏にプロジェクトを進めるためには、教員が次の点に留意しながら、受入団体・学生の双方と情報共有をしていく必要がある。

①プロジェクトの最終的な到達目標は、受入団体の経営上の課題とつながるように設定する

プロジェクトで意義のある成果を出すためには、受入団体が学生とともに課題に真剣に取り組む必要がある。インターンシップのためだけに設定した課題では、受入団体側のモチベーションは高まら

ず、各段階の学生の取り組みに対する評価も甘いものとなる。プロジェクトの立ち上げ段階で教員と受入団体がしっかりと協議し、企業側が望む到達目標を設定することが重要である。

②事前にプロジェクトの進め方をプロセス化し、各段階で求められる成果物を設定する

目標到達に向けてプロジェクトを進める中で陥りがちな状況として、受入団体、学生共に次にやるべきことを見失い、徒に議論や会議を重ねるだけで日数が過ぎるケースがある。この状況は、到達目標が抽象的で、受入団体と学生の間で求められる具体的な成果物が共有されていないことに起因する。このような状況を避けるため、プロジェクトの立ち上げ段階でプロセスをいくつかの段階に分け、各段階で求められる成果物を明確にする手法が有効である。

③学生の作成した成果物を定期的に確認し、つまずきに対して適切な助言を行う

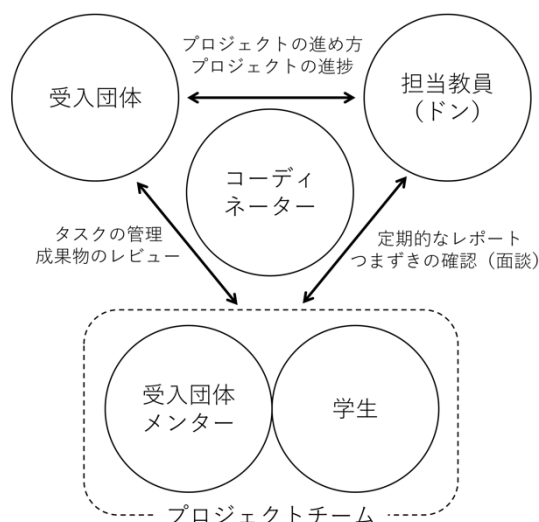
目標到達に向けた歩みを停滞させず、つまずきに早期に気がつくためには、頭で考えたり机上で議論するだけではなく、何かしらの具体的な成果物を作成し、適切なレビューを受けることが必要である。担当教員は、取り組みについての報告、受入団体に提出する資料の叩き台、今後の作業計画など、学生に定期的なレポート作成を求め、レポートを作成した意図やプロセスを聞き、必要に応じて助言を行う役割を担う。

以上、3つの留意点をもとに、受入団体、担当教員、プロジェクトチームで行うべき情報共有を示したものが右図である。受入団体のメンターは、プロジェクトの完遂を使命として学生と共有し、両者合わせて一つのチームの意識を持ってプロジェクトに取り組むことが望ましい。

受入団体はチームのタスクを管理し、成果物のレビューを行う。担当教員は受入団体とプロジェクトの進め方、大まかな進捗状況を共有する。そして、プロジェクトチームが作成するレポートと定期的な面談を手掛かりにつまずきを確認し、適宜学生にアドバイスを行う。

3) コーディネーターの役割

コーディネーターは、受入団体と担当教員、担当教員とプロジェクトチーム、プロジェクトチームと受入団体が情報共有を行う場にオブザーバーとして参加し、全体的な流れを把握して三者の情報共有が円滑に行われるように調整する。最終的にはコーディネーターが介在せずとも寺子屋式指導法が成立するようにノウハウを蓄積し、担当教員に対して情報提供(FD)を行う。



平成29年度 実践力養成型インターナティブ

社会 労働 文化 経済
 環境 健康 流通 情報
 国際 福祉 芸術 運動

【記入例参照】
 担当 係
 【ドキュメント】
 後援 委担 助成

若者の献血意識の高揚に有効な広報物の提案

日本赤十字社 徳島県赤十字血液センター

企業概要

血液事業は、全国180の血液センターと129の献血ルーム、292台の献血バスを擁せ、献血収入から供給を行っている。

血液センターの業務は献血者を募るところから始まり、献血者から予約がいた血液を原料として輸血用血液製剤を製造している。

病院等からの依頼に応じ、治療を必要とする患者さんに届けるため、昼夜を問わず送達している。

プロジェクト背景

近年、若い世代の献血者数が減速している。少子高齢化社会の進行、輸血用血液の需要は高まることが予想されるが、数十年前には必要数の確保が困難になることが想定されている。

助かるはずの命が助からない。そんな事態に陥ることのないよう、必要量の血液を確保すること、つまりは献血者数を維持していくことが血液センターの最大のミッションである。

プロジェクトの目的・概要

これまでの献血キャンペーンにはなかった視点から広報媒体を作成し、若者（徳島大学生）の献血意識向上を図ることを目的とする。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】

- ・卓上ポスター（6種類）
 広報物作成のためアンケートを基に、6種類の卓上ポスターや壁貼りポスターを作成し、学生が空き時間過ごす場所に掲示した。ポスターを作成した際、重点を置いたのは、献血について理解を深めてもらい、献血活動に参加してもらうこと。後日、学生の意識変化を調査するためにアンケートを行った結果、匿名作成したポスターは、効果があったとアンケートで、デメリットを認識するよりも、正しい事実、数字を伝えて欲しいという意見が多く得られた。
- ・ヒアリング（12/22実施）
 広報物の効果の分からない内容を直し、学生の生の声を聞くためヒアリングを行った。献血活動の有無にかかわらず参加者全員が、「献血を考えた良し悪しを会になった」と回答したことから、直接的なアプローチが有効だったとわかった。

【ドキュビュー】

課題に対して試行錯誤を繰り返し、献血意識向上は一方通行な広報物や講演会よりも、参加者全てが効果的に動くことを見出した。課題解決策及び人々を動かすことの難しさを経験できたことから、意義深いインターナティブであったと考えられている。

【副次的効果】

・今回インターナティブ生が短期間で約700人からアンケートを回収した方法を、広報手段として今後も活かしたい。

平成29年度 実践力養成型インターンシップ プロジェクト教育の授業考察	【インターン先】 株式会社 QUP 橋本 優大 【侵入担当】 江口 大樹 【ド/学内メンバー】 坪田 達行 講師
株式会社QUP 企業概要 株式会社QUPは四国初の本拠地施設である。子どもから大人まで、幅広い世代に対してプログラミング教育を推進している。特に子ども生向けの「クラブプログラミングスクール」では、プログラミングの学習を通じて様々な気づきを得ることで、プログラミング技術の習得は勿論、グループワークを通じての協調性や公平かたいことをチャレンジするも、論理的な思考力や問題解決能力を養い未来人材の育成力を入れている。	プロジェクト育英 2020年から小学校でのプログラミング教育が必修化される。プログラミング学習に伴う「論理的な思考力と問題解決能力の育成」という側面が、プログラミング教育が注目を集めている理由でもある。 同時に、現場で活用可能な「運用可能かつ効果的なプログラミング教育のあり方」については、多くの学校現場で、プログラミング教育の普及を望まれているのが現状である。 プロジェクトの目的・概要 小学校の教育現場で運用可能なプログラミングの授業プログラムを開発する。
成果物 (Seeds : シーズ・種) 最終的な成果物は、12/2におこなった公開授業をもとに作成した学習指導案。 - 公開授業及び学習指導案作成に当たっては、下記の内容に依り組んだ。 ① 厚田先生主催の、小・中学生向けの徳島ロボットプログラミングクラブに加入 ② 受入れ企業先株式会社QUPのプログラミング授業に参加 ③ 小学校の先生に実際にプログラミング授業をおこなう際の課題・課題などヒアリング ・また12/2の公開授業の際には、実施後に参加者の小学校教諭と交換した座談会を実施し、プログラミング教育の意見交換を行った。	【成果物(seeds : 種)の活かし方】 ・現在、成果物の学習指導案をもとにしたプログラミング授業の実施依頼を石井町立石井小学校から受けています。今後、他の小学校でも実施を予定しており、更にプログラミング教育の普及発展に努めていると考えています。 【副次的効果】 学習指導案作成にあたり「教育現場の多くの方々の力を借りることになり、プログラミング教育を通じた様々なネットワークの構築につながった。また、学習指導案は小学校での活用できるものではなく、自社教育コンテンツの見直し、変換に貢献した。 また、副次的効果として最も大きいのは、下記の課題に気づかせてくれたことと考える。
ドキュメント  このインターンシップで教育を行うことにチームにこの中での最も、参加した小学校の先生に教えることになり小学生の学習環境内にてはプログラミングについてより深く学ぶことができたのはいいと思ふ。また、教えることにはコミュニケーション能力が必要である、このためには先生にはいい学びの場であったと思う。 今回のインターンシップでは、学生自身のポートフォリオを構築し、自身の教育プログラムを開発していったが、教育方法についてはアクティブラーニングや反転授業等様々な方法があるため、それぞれに適した授業プログラムについても検討して見たいと思っている。	A: 企業がインターンシップを通して得たいものと、企業がプロジェクトを通して得たいものをどのようにマッチさせるか。 B: 緊急度や比較的低いインターンシップのプロジェクトと、通常の業務との折り合いをどのようにつけるか。言い方を変えれば、通常業務にインターンシップをいかに絡め込めるか。 C: 長期間の中でインターン生のモチベーションをどのように維持するか。また、維持する仕組みを作るか。 D: 社内だけでなく社外（応援してくれる人）を見つけるか。また、プロジェクトを社内外的に広く周知させるか。 E: 新しいことにチャレンジするので計画通りに進まない。スケジュールも余裕で間に間に対応できなくなる。 A~Dについては自社の人材研修体制の不十分さ、Eでは新規プロジェクトを行うに当たっての体制の脆さが浮き彫りになった。今後、これらの課題にどう取り組むか検討する機会を与えてくれたことが大きな収穫だと考えられる。

平成29年度 実効力養成型インターンシップ

【インターン生】

【受入担当】

ママさんにこそ新聞を！！

土屋 真子

手塚 幸子

井戸 眞由

【インターンメンター】

目下 一 講師

一般社団法人 徳島新聞社

企業・事業概要

徳島新聞社は「県民と共に行く」を理念にした新聞社である。新聞部数22万部を超え、世帯普及率74%超は全国有数の高さを誇る。

新聞社の仕事は、大勢すると「記者」と「営業」に分けられる。新聞の中ですら、今日「記者」となる販売部は、新聞社の主な収入源である販売収入を確保する重要な部署である。

現状と最終成果物（Seeds：シーズ・種）

【現状（2016年1月20日時点）】

徳島県内の各幼稚園を通じて、対象年代のママさん約1000名に回答していただいたアンケートの集計・分析

「情報を高めるための工夫」

- ・雑誌からママさんの興味・関心を把握した上で情報ニーズに関するアンケートを作成。
- ・ママさん自体を深く知るために、「株式会社テレコメディア様」に協力して頂き、対象年代のママさん5名に聞き取り調査を実施。

【最終成果物（2016年3月末）】

- ①ニーズの高い生活の課題とその解決案（新聞記事）を提示する「問題解決提案型」のリーフレット（リーフレットA）
- ②営業に活用する販売店が使いやすいリーフレット（リーフレットB）—販売店と相談して作成
- ＜2つのリーフレットの使い＞
販売促進色の有無

副次的効果

- ・当インターンシップ参加企業でもある「テレコメディア様」の協力を得ることができ、ママさんの「新聞社員のいない」ところでなく、新聞に対する実際の声」をヒアリングすることができた。
- ・業務時間外0からのスタートとなり、事業を1から作り上げるという作業を行うことで、担当者の成長につながった。

←「株式会社テレコメディア様」でのママさん方への聞き取り調査

プロジェクト背景

近年、若年世帯における新聞離れが進んでいる一方で、義務教育に新聞が取り入れられたり、家庭教育の中で新聞の重要性が注目されたりと、新聞の価値が見直されてきているのも事実である。家庭に新聞がある環境をこのために、まずは保護者に対して新聞がどのような存在になるべきか、読者の存在意義について、主目的の達成を期してあらゆる方法が講じられている。

プロジェクトの目的・概要

20~30歳の初任児童をもつ保護者をターゲットに、新聞購読者数を増やすための販促ツールを考案する。

成果物（Seeds：シーズ・種）の活かし方

①幼稚園を通じて対象年代のママさんに配布

幼稚園を通じて、対象年代のママさんに販売促進色のないリーフレットAを見ていただくことで、新聞へのイメージ（事件・事故・政治・経済）を払拭し、新聞にも「生活の中で役に立つ情報」が結構存在していることを知っていただく。

②新聞販売店の実際の営業に用いる

今まで製作されていなかったママさん向けのリーフレットを新聞販売店の営業活動の中で実際に使用することで、ママさん方に合った新聞の魅力を伝えることができる。

以上2種類のリーフレットを配布しながら、紙を交えて市に投下することで、より効果的に今まで知られていなかった新聞の魅力を知っていただく。

ドルビー

今回のプロジェクト活動は、インターン生にとって貴重な経験だったと思う。彼らが社会にデビューしては限られていることの大変さを感じてきた。一度は信頼関係を保つこととが必要であり、そのために約束と約束を破ることが必要となる。学生という立場の目元に待つその膨大な労力と経験不足による過剰の心配などから時間に来るまでに時間をかなり要した。その結果、彼らもちっと挑戦したかったであろうことができなくなったのではなかろうかと懸念される。

これらの経験はききと捉えられ、未来におけるプロジェクトの糧として活かされていく。

平成29年度 英領力養成型インターナシップ コールセンターアルバイトのブランディング 身につく力の発信プロジェクト

株式会社 テレコムメディア

企業・事業概要

テレコムメディアでは東京および横浜に大規模コールセンターを設け、全国の様々な大手企業の通信販売の受注・問い合わせをはじめとするコールセンター業務の運営を行っている。

「社会貢献」こそが重要な大きな存在理由であるとの考えから、英語習得、異文化理解の促進等への積極的、また、「出身育兒教育ネットワーク」等、多様な社会福祉のニーズに対応した雇用形態を提供することで、広く雇用機会の創出と地元人材の活用に取り組んでいる。

プロジェクト背景

現在、社会貢献の一環として若者のキャリアサポート（人材育成）を検討している。コールセンターの仕事は親近感の湧きやすい職種のコミュニケーション要素があり、仕事を通じて社会人と働く上での基礎力やマナーが身に付き、コミュニケーション能力を向上させる。就職活動や進学に際して役に立つ能力がアルバイトを通して自然と身につく。多くの学生にコールセンターでのアルバイトを体験してもらい、キャリアアップの機会を提供したいと考えているが、コールセンターの認知度が低い事が課題である。



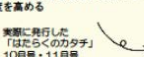
成果物 (Seeds : シーズ・種)

- ①学生のニーズに対応した雇用形態のプロトタイプ建立
→キャリアバットの確立
- ②テレコムメディア内部の人材育成
→テレコムメディア社員がキャリアバットの育成を行うことで、学生のみなす社員自らの能力向上にも貢献できる。
- ③新しい人材採用
→アルバイト実用を通して能力把握できたキャリアバット生、そのまます正社員採用に引き上げられ、即戦力に繋がる新入社員獲得につながる。
- ④ユニバーサル雇用-費用の実現
→大学生、主婦を含めた様々な年代の方活躍できる職場作りと若者へのキャリアアップの提供



成果樹 (seedlings : 種の活かし方)

- キャリアバット生26名の中からGOODYインターナショナルでメンターがついた繋がりがと仕組みを継続していく人材を育んできていく一過性の仕組みではなくキャリアバットを定着させユニバーサル雇用、費用の実現、若者へのキャリアアップの機会の提供
- 「たのしいカタチ」を今後も定期的に発行する「Goodインターナショナルメンバー」が開設してくれた人達へ向け引き続き広げていく→数年サイクルを入れ替えて学生への広報施策の刷新しコールセンターの認知度を高める

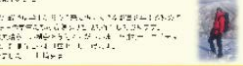


実際に発行した
『たのしいカタチ』
10月号・11月号

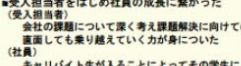


副次的効果

- キャリアバットという新しいアルバイト募集の仕方が生み出した
- 鹿児島県内学生団体等の詳細な活動時期などを知ることができた
- 社内MVTとして表彰されたテレコムメディアの中にキャリアバットという賞品があった
- 受入担当者をはじめ社員の成長に繋がった(受入担当者)
会社の発展に向けて深く考え課題解決に向けた意図に裏面しても乗り越えていく力が身についた(社員)



このプロジェクトの開始は、広島県中津市にある「果樹塾」を皮切りに、ユニークな組織であったり異なる、プロジェクトの推進に協力する学生たちによって、集中して行われ、また英語研修の場も併せてあった。プロジェクトの推進を支えるのは、アルバイト、英語研修、英語検定の取得、特に日本語と英語の両方に高い関心がある、異文化に対する理解、異業種等との関係性、時には自分たちの経験に基づいて、異文化の理解を深めることにより、異業種等との関係性を築くことができた。



このプロジェクトを通じて、広島県中津市にある「果樹塾」を皮切りに、ユニークな組織であったり異なる、プロジェクトの推進に協力する学生たちによって、集中して行われ、また英語研修の場も併せてあった。プロジェクトの推進を支えるのは、アルバイト、英語研修、英語検定の取得、特に日本語と英語の両方に高い関心がある、異文化に対する理解、異業種等との関係性、時には自分たちの経験に基づいて、異文化の理解を深めることにより、異業種等との関係性を築くことができた。

若者の車離れに対して

徳島トヨタ自動車株式会社

企業概要

徳島トヨタ自動車株式会社は、昭和19年、徳島県下初のトヨタディーラーとしてスタートして以来、地域社会やお客様から絶大な信頼をいただき、県下自動車ディーラーの最前線として日々躍進を続けている。また徳島市中前川町にはTOYOTA、NETZ、SUZUKI、JAGUAR、LANDROVER、MINI、VW、LOTUSの8ブランドが一堂に集まる「オートモール徳島」を有している。

【インターン生】
三好 聖一 山崎 和志
田中 智紀 松本 真貴

【実入社担当者】
松本 真貴 徳島トヨタ自動車株式会社
松崎 一成 徳島トヨタ自動車株式会社

プロジェクト背景

若年層の車離れが進んでいる昨今、若年層の自社客を離さないこと、若年層の新規客を獲得することが重要課題となっている。
他県には「オートモール徳島」という全国でも有数のモールがあるにも関わらず、若者への認知が低いという現状である。車の購入に向けた第一歩として、まずはオートモールの認知拡大を図りたい。

プロジェクトの目的・概要

オートモールの認知度向上を図るため、若者（大学生）向けのイベントを企画、運営する。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】

- ◆大学生向けハロウィンイベントの結果
- 【イベント内容】
「燃料電池自動車の電気で沸かしたお湯で紅茶を淹れる」
・インスタ映えのお菓子、撮影スポットの提供
・サポカー体験
◆徳大生対象のアンケートの分析結果
大学生の車に対するニーズを把握するためのアンケートを実施。現在は集計まで完了。

【成果物（Seeds：種）の活かし方】

- ◆ハロウィンイベント
大学生の来店はなかった。大学生をお店に呼び込むことがいかに難しいかということを知った。
当初予定していたPDAサイクリングのあったイベントの企画から実施までの流れを振り返ることができなかった。今後イベントを行う際の種としたい。
- ◆アンケート
最終は分析・提案まで行い、若者のニーズを把握できる貴重なデータが得られることを期待して今後のマーケティングに有効活用したい。



- 【副次的効果】
- ・オートモール徳島の各店と本業との関係性の強化を図ることが出来た。
 - ・チームマネジメントの経験ができた。

常三島地区研究機器広報プロジェクト

徳島大学大学院社会産業理工学研究部

取り組み概要

徳島大学大学院社会産業理工学研究部は、計測・分析等の研究機器を数多く有している。現在、大学本部主導で、これらを教育・研究・地域貢献に効果的に活用するためのセンターを発足させる準備を進めている。
企業等の機器利用に関する相談と学内研究者とのマッチング業務、機器の利用や分析に関するコーディネート業務、機器利用講習会の実施、設置利用費、装置メンテナンスと計測機器導入に関する提案等が、センターの主な業務となる予定である。

成果物（Seeds：種）

1. 常三島地区共用機器利用パンフレット
・需要がありそうな機器を選定する、機器の管理者にパンフレットを作成。
・学内の機器利用に関するニーズ調査のため、アンケート利用に賛成がありそうな県内企業、②機器を販売している企業、③県内企業を支援する団体を決定してアタックを行った。
・パンフレットの草案を学内の教職員に評価してもらい改善を図った。
2. 提案書（機器利用に関する大学サイトの改善案）
・インターネットで何が出来ると確認すると各課の改善が多かった。ニーズ調査結果を元にサイトの改善案を作成した。

プロジェクト背景

徳島大学では、どのような機器がどこにあり、何が出来る機器なのか、利用するための窓口や管理者は誰なのかといった情報が提供されていない。
この問題を解決するため、まずはその情報の整理が必要であり、その上で、企業はどのような機器を求めているのか、どのような仕様にすれば企業の方が利用しやすいか、といった顧客のニーズを知ることが必要となっている。

プロジェクトの目的・概要

センターの在り方より顧客のニーズに即したものにすると、地域の企業における研究機器の利用ニーズを調査する。

成果物（Seeds：種）の活かし方

今年度はセンター発足に至っておらず、パンフレットを直接利用に送らなかったが、ポスターを持参した企業が多かった。発足時には今回の案をブラッシュアップしたパンフレットを作成したいと考えている。
提案書に関しては、企業向けに機器利用を案内している大学のインターネットサイトの改善に参考にしたい。

副次的効果

- ・県内の企業および団体に徳島大学は数が多いと思われることが分かり、利用方法や広報の改善の参考になった。
- ・大学サイトの改善案は、その改善はもちろん、インターネットを活用し情報を集めている企業への広報の方針に参考になった。
- ・学内の教職員へのヒアリングを通して、研究機器の共用化について学内に温度差があることが分かった。
- ・新たな共用機器センターの発足に向けた動きについて学内でも十分周知されていないことが分かった。



学外の方々と、学内の様々な先生方との関わりを通して、大学や大学で学ぶことに対して、より広い見方をすることができたと同時に、問題解決に向けたアプローチ法を実感できたと思います。今後の大学生活には是非これを生かしていただきたいと思います。



社員が生き生きと健康的に働ける職場の環境整備を検討しよう

大塚テクノ株式会社

企業・事業概要

大塚テクノ株式会社では、あらゆる樹脂製品を「高い技術力」「クリーンな環境」「優れた品質」のもと、成形・加工している。
医療分野の精密部品プラスチック部品の開発・製造から始まり、現在は今までできなかった成形技術を活かし、精密製品分野、電子分野への参入にも成功している。
また、グローバル化の進展に伴い、広く世界にも目を向け、海外へも生産拠点を拡大している。

プロジェクト背景

高齢化が進む昨今、労働生産性を向上させ、お客様によりよい製品・サービスを提供し続けるためには、社員の健康を「経営の資産」ととらえ、健康増進への取り組みを積極的に行う「健康経営」の導入が不可欠であると考えられている。現在、食堂改善やスポーツ大会の開催等の健康増進の取り組みを行っている。加えて、グループ企業でも導入できるような健康増進の取り組みを検討したい。

プロジェクトの目的・概要

社員の健康増進を図るため、各人が意欲的に取り組める効果的な仕組みを提案する。

【成果物（Seeds：シーズ・種）】

- 健康宣言（考案）
健康マイレージ大作戦（企画）
会社カードと個人カード
- 健康マイレージ大作戦
・健康の定義が人それぞれ異なることから、社員自身が個人目標を設定し個人目標の達成率に応じてマイル付与をする。
・個人目標の達成率に応じて個人目標を社員同士のグループディスカッションでお互いの目標を確認する。
・社内イベントの開催に応じてマイル配分を調整した。
・徳島大学総合科学部の心理学部の教授から「社会的責任はモチベーションの向上につながる」とのことからマイルを多く獲得すると表彰を行うようにした。

- 会社カードと個人カード
・会社カードと個人カードを一枚にまとめて、名刺ケースに収めるようにした。



【成果物（Seeds：種）の活かし方】

- ・健康経営のスタートとして「健康宣言」をホームページ上で公表し、今後社員の健康を考えた職場環境整備を積極的に行っていくことを社員へ周知する。
- ・健康経営の施策の一つとして「健康マイレージ大作戦」を全社的に実施し、社員一人ひとりが「自分の健康」について関心を持ち、自分自身の健康度について把握する。
- ・今後、「健康マイレージ大作戦」制度のもと、健康保持や増進に関する施策を企画、実行していくことで、社員が自分自身の健康を自発的に向上させるよう支援する。また、働きやすい職場環境づくりにともなう、ひとりひとりのパフォーマンスを最大限に高め、優秀な人材の雇用定着に繋げる。
- ・取り組み内容をホームページ等で公表し、企業のイメージアップを図る。

【副次的効果】

- ・当初、一部の社員対象の企画や食費利用者に限定したものを考えていたが、今まで思いつかなかった発想力で全社的に取り組みやすい企画となり、今後制度として導入することになった。
- ・大塚グループ内でもまだ取り組めていない新しい企画の発想、大塚グループ全社員対象のプロジェクトの種となる。



お客様の声から見える、豊かさの「ミライ」

アール・エスホーム株式会社

企業・事業概要

アール・エスホーム株式会社は、アールホームのフランチャイズ店として、徳島県でオーダーメイドの住宅提案を行っている。
お客様の要望以上に良い家を提供し、地域に笑顔と幸せの輪を広げ社会に貢献できるよう、社員一丸となって取り組んでいる。全国のアールホーム加盟店16店舗の中で総合的に最も優れたお店として選ばれた「Best of EYEFULHOME賞グランプリ」にも選ばれた。

プロジェクト背景

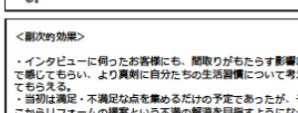
家は人生で最も大きな買い物であり、何十年と暮らし続ける場所になる。だからこそ、家を建てる時だけではなく、建てた後のアフターサービスも含め、お客様に寄り添った住宅提案を行うことが重要と考える。これまでの08客フォローに加え、今後は家族構成や年齢の変化によって家における暮らしがどう変わるかなど、お客様の「本音」を引き出しそれに沿った住宅提案が必要となる。

プロジェクトの目的・概要

08客の本音を聞き、住宅提案に反映させることで顧客満足度の向上を図る。

- ＜成果物＞
①冊子
アール・エス・ホームで家を建てた方から電話でアプルを取り、全15話の取材を行った。事前にアンケートを作成・郵送し、返ってきたアンケート結果をもとにお客様の取材した、スムーズに取材を進めるために、毎週事前にアンケートや取材の日程を通知し、質問内容を考えてから取材本陣に挑んでいた。取材では、建てた満足・不満点を聞き出すことができた。
今回のインタビューを受けて「満足・不満点を聞き出すことができた。ただ、これがお客様の豊かさを考える上で必要なものではなかったが、アプルへの見直しは限られた。建てた家の満足・不満点を聞き出すアプルでは豊かさを考えることはできなかった。これは、このインタビューの目的と取り組んで、新たな課題を見出すことで、社員教育、顧客へのサービスの拡充において、多くの生かされ方があることが分かった。

- ＜成果物の生かし方＞
・今回まとめたアンケート、冊子を基に、家業の理想、大切にしたい家づくりを中核に再度インタビューを行う。家業の豊かさを語り、更に深めたアンケート、冊子を作成して生かす。
- ・満足・不満点アンケートを場所別のお客様のニーズ調査ツールとしてまとめる。具体的な提案に生かす。
- ・毎月同じようにインタビューを続け、豊かさをアンケート、冊子の作成を続けることで、更なるサービスの拡充を目指す。
- ・インタビューから見えた取材に対する困りごとを「取材アプル（バナー）」を添付することで、顧客満足度の向上につながる新サービス開発を目指す。
- ・お客様の関係性から、実用性のある収納提案を生かす。
- ・家業の豊かさをいかにして生かす。豊かさってどんなものがあるのか、その子孫の教育費として生かす。
- ・インタビューには新人も同席させることで、お客様の暮らしを知り関心することができ、提供しているお客の身元を知れるので、新人教育に効果的である。
- ・不満点について、リフォームの提案につながる可能性がある。
- ・顧客との接点が増え、かつ顧客への手厚いサービスにつながる。また、顧客満足度向上による紹介につながる可能性がある。



【副次的効果】

- ・インタビューに伺ったお客様にも、取り扱ってもらった影響まで感じてもらい、より真実に自分たちの生活環境について考えようとする。
- ・当初は満足・不満点を聞き出すだけの予定であったが、そこからリフォームの提案という不満の解消を目指すようになった。
- ・学生がお客様にインタビューすることによって社員には無い気づきを得た。
- ・インタビューでお客様から出た不満を社員たちで共有することによって、次々の課題のソリューションが上がる。
- ・来年のインターンシップ生がその冊子を読んだことで企業が抱える課題の解決、提案するための参考になる。
- ・プロジェクトのゴールが定まったこともあり、企業側と学生とのゴールの認識や考えをすり合わせる必要があった。企業側と学生の意見とどう伝えようか、企業側の提案をどう受け止めるかを真剣に考える機会になった。
- ・プロジェクトを進めるための根本である。人選や任せ、目標意識の共有などを学ぶきっかけとなった。
- ・達成感を得た。自分たちが関わった企画が実現したこと、見えなかったプロジェクトのゴールが見えてきた。

＜ドレレビュー＞

今回のインターンシップを通してたくさん得たものがあると思います。そのなかでも「やり抜く力」の強さに感心しました。やり抜く力（カグ）とは、一つの物事に継続して向き合い、克服する能力のことです。歯を食いしばるという意味もあり、お客様へのインタビューと冊子作りをやり抜いたからこそ、経営者が抱えている本当の課題に気づいたのではないのでしょうか。この経験は、社会人になった時に必ず役に立つと思います。



Copyright ©

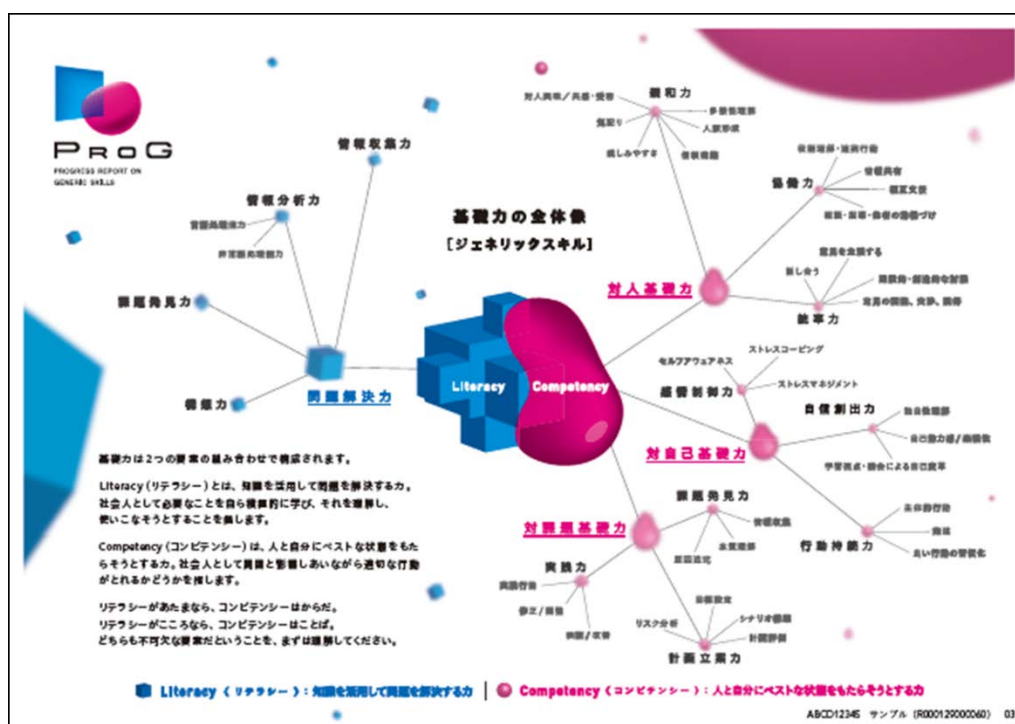
(1)PROG とは

(PROG HP より引用)

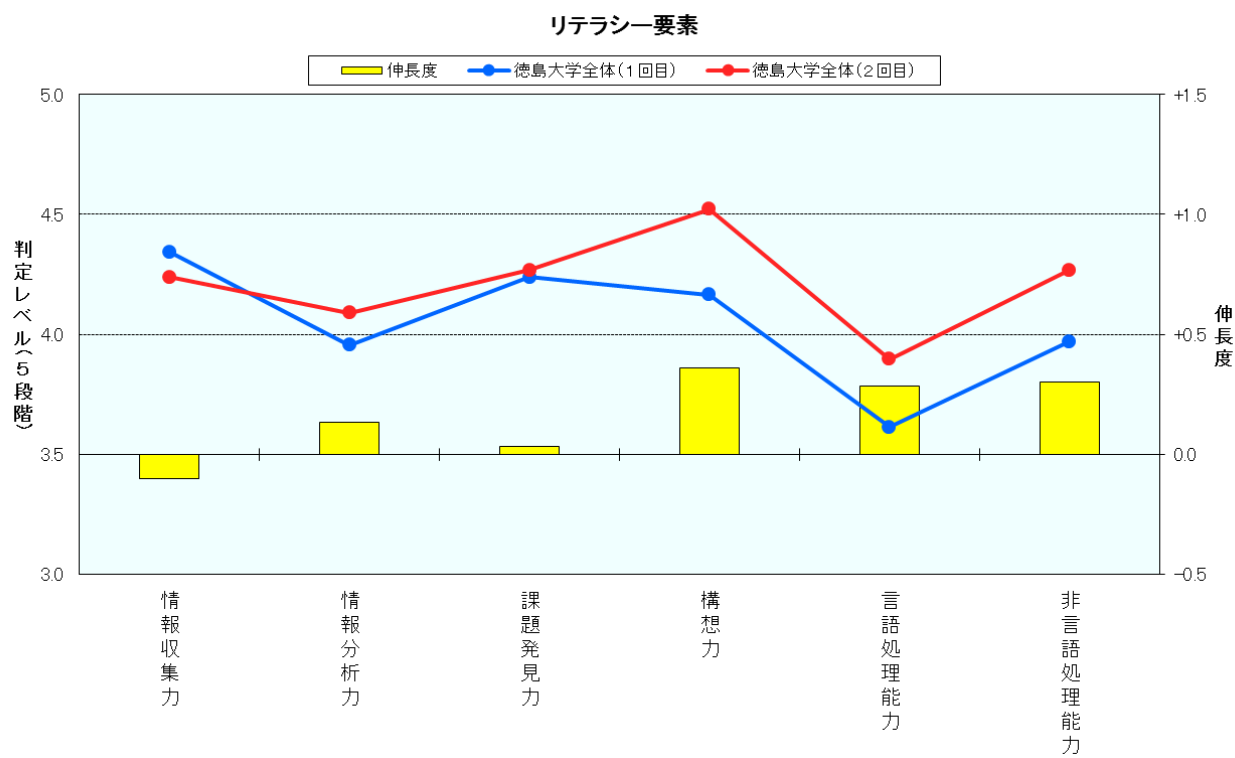
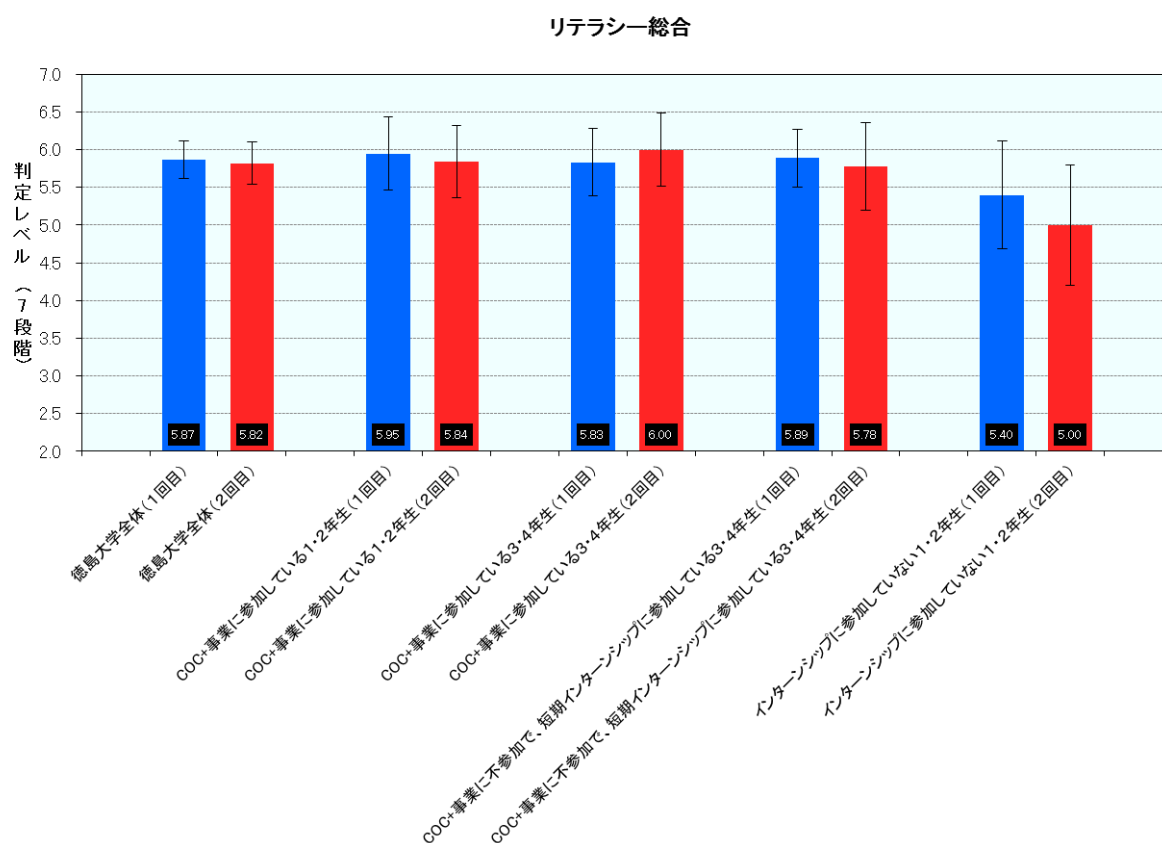
PROG 受験者の属性及び集計対象者は以下の通りである。

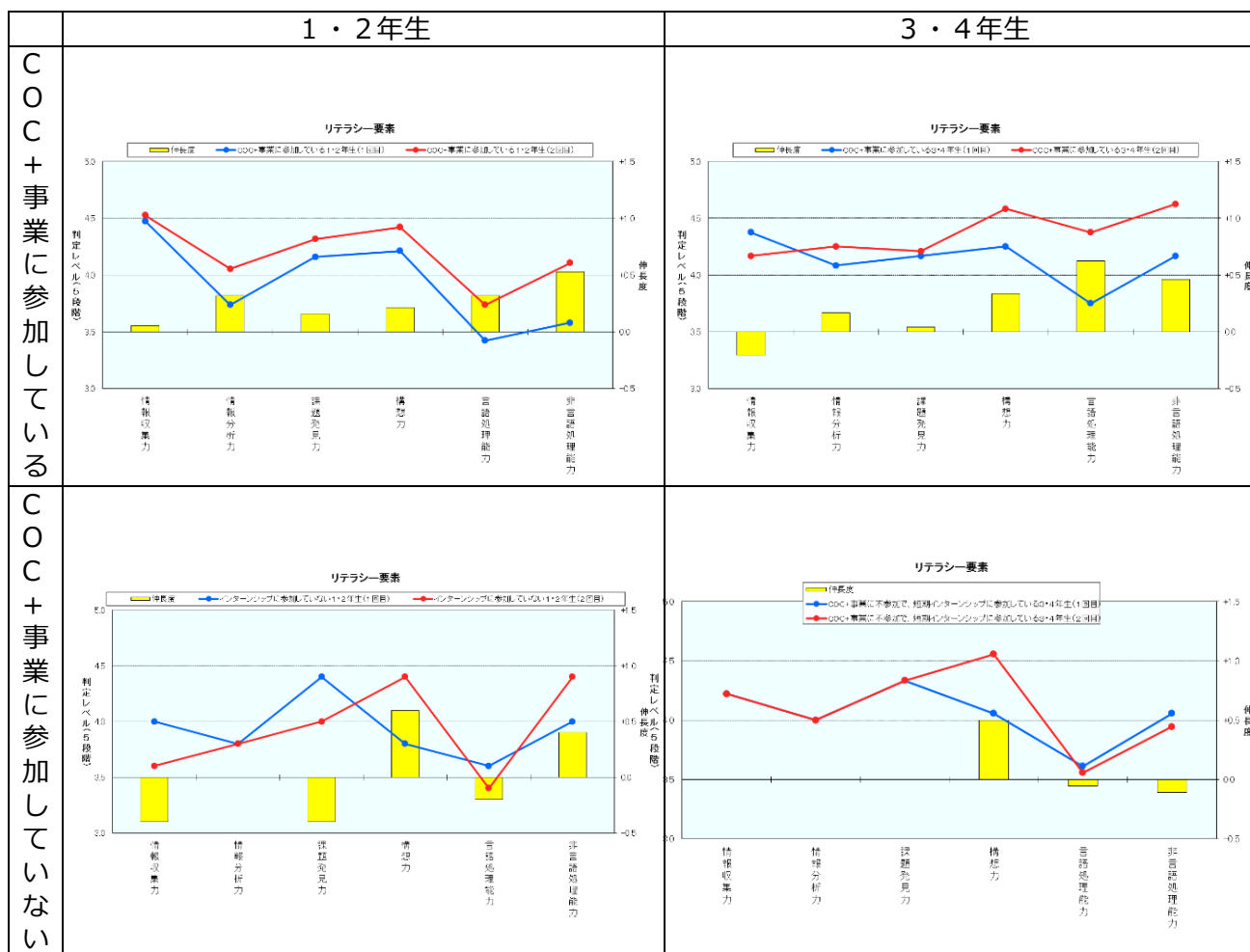
属性	集計対象者
COC+事業に参加している1・2年生	19
COC+事業に参加している3・4年生	24
COC+事業に不参加で、短期インターンシップに参加している3・4年生	18
インターンシップに参加していない1・2年生	5
昨年度のCOC+事業修了生	0
未回答	1
合計	67

PROG では、ジェネリックスキルの中でも知識を活用し問題を解決する能力であるリテラシーを、「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」「構想力」という、問題解決のプロセスに不可欠な4つの要素で測定・評価する。また、ジェネリックスキルの中でも自分を取り巻く環境に働きかけ対処する力であるコンピテンシーを、「対課題」「対人」「対自己」の3領域に分け、客観的な評価が取得可能な手法を用い、測定・評価する。



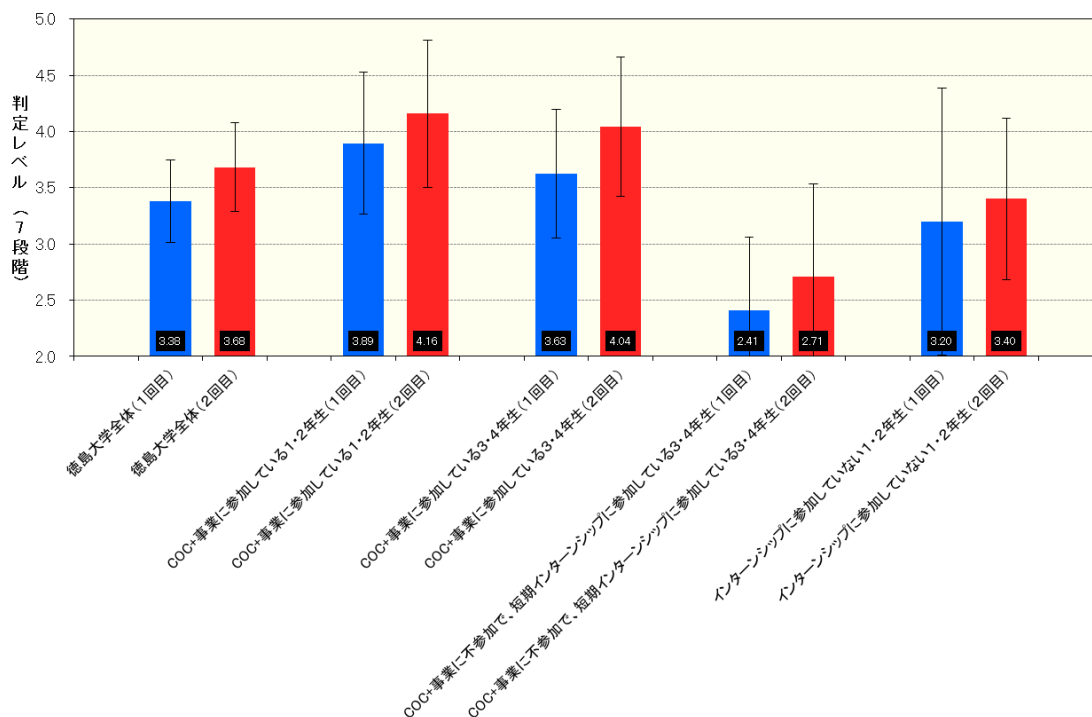
(2)リテラシーの測定結果



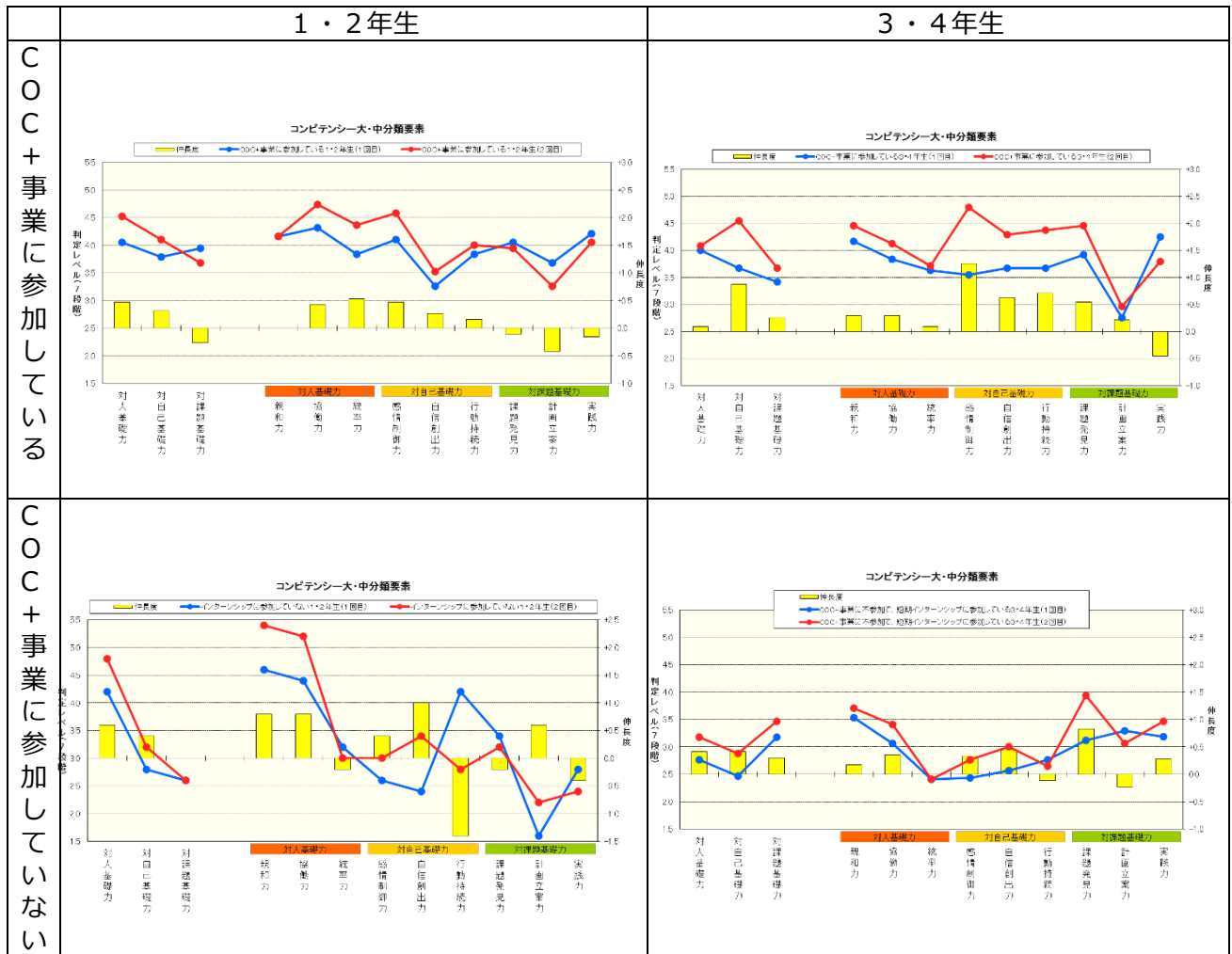
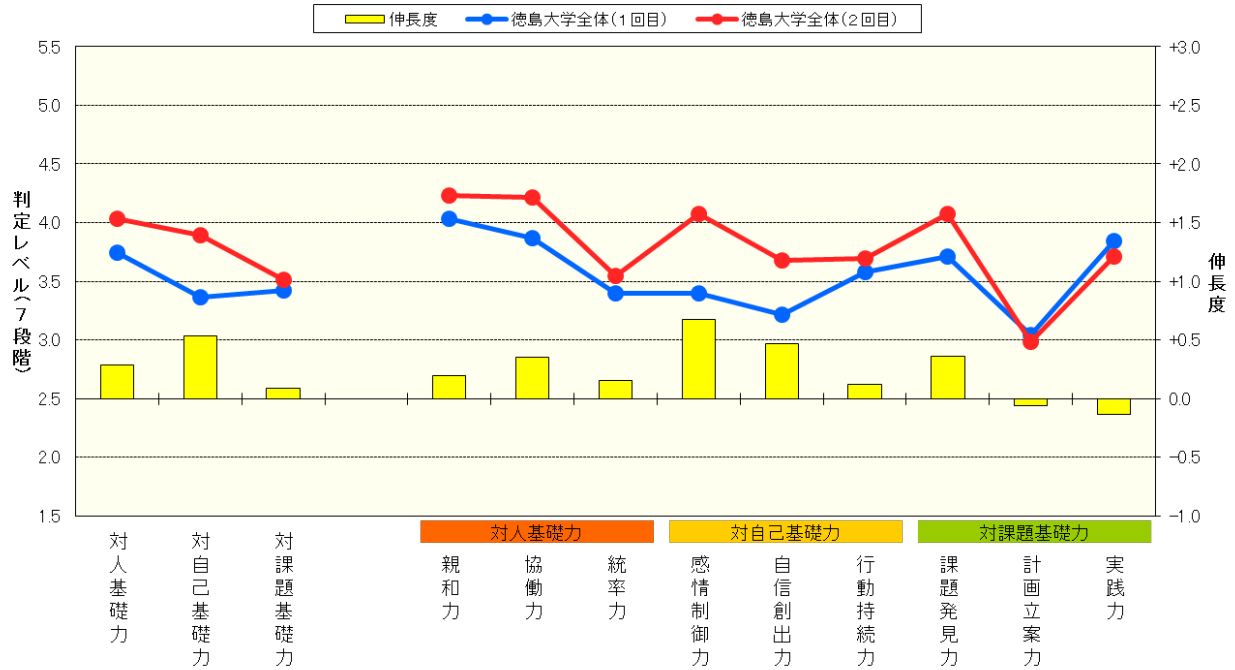


(3)コンピテンシーの測定結果

コンピテンシー総合



コンピテンシー大・中分類要素



四国大学・四国大学短期大学部の取組

1 概要

四国大学ではCOC+事業（創業支援事業）の一環として平成29年度は次の取組を行った。

- (1)ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」
- (2)ビジネスプランコンテスト「第2回とくしま学生ビジネスプラン道場」
- (3)社長の秘書体験「社長のかばんもち」
- (4)チャレンジショップ
- (5)その他

(1) ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」

①実施目的・概要等

平成29年4月13日（木）に第9回定例会を開催して以降、毎月第2木曜日（8、9月の夏休み期間及び3月を除く）に定例会を開催した。

本事業は、起業や創業を将来の選択肢として認識してもらうために、まず興味・関心を持ってもらうことを目的としており、今年度は、こうしたテーマに関心の低い学生に対しても広く訴求する為に、デザイン、建築、栄養、Webマーケティングなど特定の学部、学科を対象にテーマを定め、同分野で活躍している県内の起業家や業界リーダーなどを講師に招き、「自身の生き方や働き方」、「仕事に対する考え方」、「起業した経緯」、「今後求められる人材像」、「学生時代に経験しておいた方がいいこと」等の内容が盛り込まれた講演と参加学生による「自分のスキル・知識を活かした新たなビジネス」、「リーダーに共通すること」などについてグループディスカッションを行った。

平成29年度 ビジネスサークル 「とくしまサイコー塾」

	日時	場所	講師	参加	グループワークテーマ
第9回 定例会	4月13日 (木)	四国大学	島川文代氏（あんと design） 玉有朋子氏（ファシリテーショングラフィッカー）	22名	情熱（やりたいこと・やるべきこと） お役立ち（稼ぐ力）強み（自分らしさ）
第10回 定例会	5月13日 (土)	徳島大学	慶応大学 SFC×アメリカ大使館共同プロジェクト 「TOMODACHI Entrepreneurship Seminar」	29名	ビジネスプラン作成
第11回 定例会	6月8日 (木)	徳島文理 大学	小西誠一氏（徳島県建築士事務所協会） 平尾卓氏（Less is design 株式会社）	58名	建築を活かしてどのように働くか？
第12回 定例会	7月13日 (木)	四国大学	大田美香氏（公認スポーツ栄養士） 田中美和氏（フードコーディネーター）	41名	栄養学を活かしてどのように働くか？
第13回 定例会	10月12 日(木)	徳島大学	村澤普恵氏（徳島大学医学部国際コーディネーター） 岡田元一氏（有限会社三八）	51名	コミュニケーション力をどのように養うか？
第14回 定例会	11月9日 (木)	徳島文理 大学	渋谷のぞみ氏（代官山ワークス） 金澤光記氏（LICHTLICHTKAMIYAMA）	28名	地域ビジネス・地域マネジメント 地域で仕事を創り出すこと
第15回 定例会	12月14 日(木)	四国大学	床桜勇起氏（webデザイナー） 片岡豊氏（リッチハニカム株式会社）	25名	webマーケティング

第16回 定例会	1月13日 (木)	徳島大学	入倉眞佐子氏（小野農園） 内藤佐和子氏（「難病東大生」著者）	18名	6次産業化
第17回 定例会	2月8日 (木)	徳島文理 大学	岡部斗夢氏（アクア・チッタ） 長谷川晋理氏（びざん大学）	20 名	徳島市の地域活性化

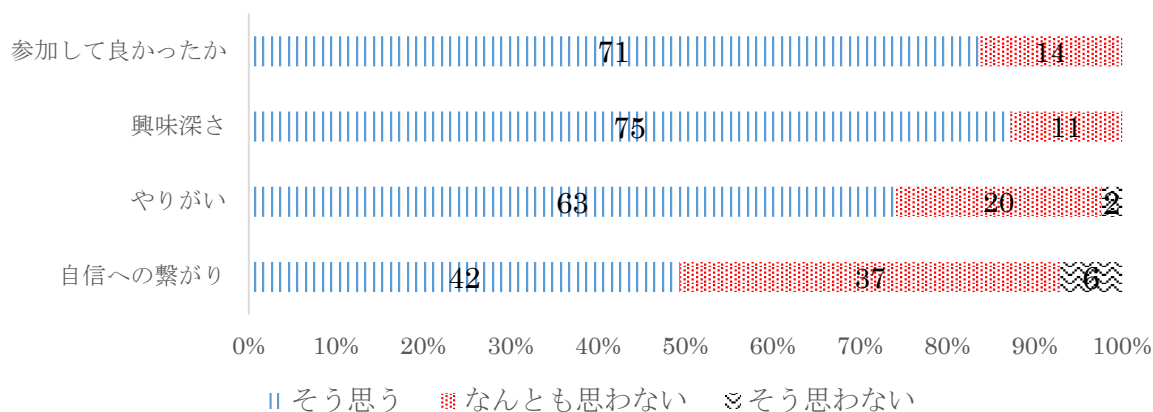
<サイコー塾実施風景>



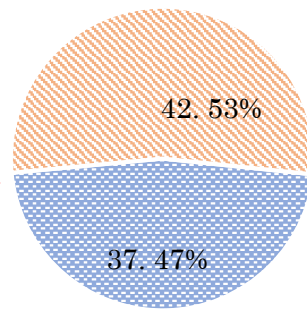
②期待効果

本事業実施による効果として、第13回定例会～第16回定例会（※アンケートを第13回から実施のため）のアンケートから、参加満足度の他、興味・関心度について7割を超える学生が評価しており、特に参加者の約半数が将来の起業や働き方についての考え方に変化があったと回答している。

参加学生からの評価（第13回定例会～第16回定例会分）



参加前と参加後で、あなた自身が将来、起業することや、
将来の働き方についての考えに変化はありましたか。



■ はい ■ いいえ

参加前と参加後の意識の変化（一部抜粋）	
参加前	参加後
特に興味を持っていなかった。	とりあえず何事にも前向きに行動してみようと思った。
どのようなことをやるのか分からなかったので少し不安がありました。	少し考え方が変わりました。とても良い活動だと思いました。
地域ビジネスは実現がかなり難しいのではないかな。	自分にやる気があれば実現は十分可能であるのかな
起業はとても難しい。	思い立てばできる。
自分がどのように行動していいかわからない。	視野を広げる事ができた。（ビジョンを定められた）
起業家は自分から遠いイメージ。	自分のやりたいことが人のためになることに繋がることもある。
起業なんて絶対しないという気持ち。	働き方は自由であり、人への感謝の気持ちを持った社会人になりたい。
もっと大変だと思った。	小さなことから始めていける。
ハードルが高そう。	技術力を身につけてとりあえずやってみる精神も大事。
起業大変そう。	やりがいがありそう。
今専門的に学んでいることを将来の仕事に生かす。	専門外のことでも、自分の興味のあることを仕事にする。
自分の将来のビジョンが曖昧だった。	自分が今、何をすることで将来に繋がっていくかを考えることができた。

(2)ビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」

①実施目的・概要等

自分で構想した事業アイデアを計画書に落とし込み、人を惹きつけ、共感を生み出すプレゼンテーションを学ぶ道場型（ステップアップ）のビジネスプランコンテストである。起業時の資金調達や新規事業を立案する際、自分の想いや考えを、「市場データやアンケート調査」等を用いてマーケティングを行い、収支シミュレーション等で検証しながら、市場に提案する事業を創造する力を育成することを目的としている。

今年度は、平成29年7月1日(土)にキックオフセミナーを開催。ビジネスプラン数131プラン、参加人数224名と昨年を大幅に上回る(昨年82プラン、169名)申し込みがあり、一次審査、二次審査を通過した6組による最終審査を平成30年1月21日(日)に行った。

ビジネスプランコンテスト「第2回とくしま学生ビジネスプラン道場」スケジュール

平成29年 7月 1日 (土)	キックオフセミナー
平成29年11月15日 (水)	一次審査
平成29年12月 4日 (月)	ブラッシュアップセミナー
平成29年12月21日 (木)	二次審査
平成30年 1月21日 (日)	最終審査

<キックオフセミナー>



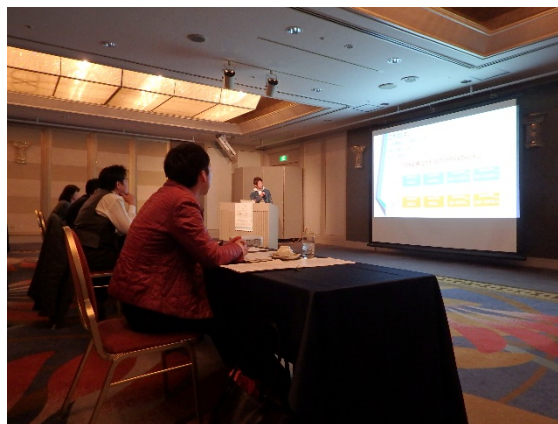
<一次審査>



<ブラッシュアップセミナー>



<二次審査>



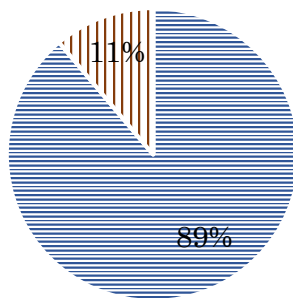
<最終審査>



②期待効果

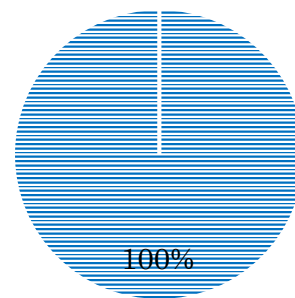
本事業実施による効果として、最終審査通過者を対象としたアンケートの結果を以下に記す。

1. 今回、とくしま学生ビジネスプラン道場に
参加してみての満足度を5段階で評価してくだ
さい。



■ 満足 ■ やや不満 ■ どちらでもない ■ やや不満 ■ 不満

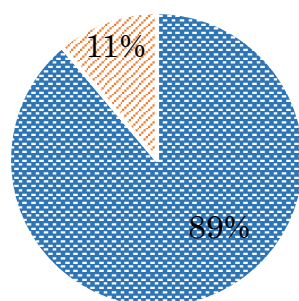
2. 参加する前と参加した後で、自身が事業
を実施してみることについて、印象や考え方
の変化はありましたか。



■ 変化があった ■ 変化はない ■ どちらでもない

3. 質問2で「変化があった」と答えた方について、参加前と参加後での印象や考え方の変化について	
参加前	参加後
私にできるのか不安。ひとりでは出来ない。やってみたいけど、アイデアがまとまらない。チームのみんなは引き受けてくれるだろうか。	やっぱりチームで一つの目標に向かって努力することは、私に向いているし、楽しい。ワクワクできる。それは、モチベーションが保てるうえ、アイデアが行き詰ったときに新たな視点が生まれるから。いきいきできる。日常生活の中にアイデアのヒントは隠れている。 <u>起業したいとも思うようになった。</u>
自分で事業をするのは面倒くさそうというか色々手続きもあって大変そう。でも儲かるというイメージが強かった。	アイデアだけでなく実現可能性という部分で、かなり甘い考えをもっていたんだと感じた。また事業を立ち上げれば一部を除いて大抵儲かるものだと思っていたが、 <u>実際計算してみると利益を上げることがどれ程難しいかがよく分かった。</u>
参加前は固定観念のような考え方にカタさがあった。	いろいろな考え方があり沢山のアイデアがあって、自分なりの考えに組み込んでいけるものも多かったので良い経験となった。他の人の柔軟な考え方も参考にしようと思った。
自分で事業をしてみるということは、“夢のまた夢”のような印象があった。	利益の計算であったり、市場調査・情報共有を通して、現実味のある事業ができあがっていき、 <u>年齢関係なくやってみたいという熱意の強さがあれば可能であることを学べた。</u>
ただ漠然と「したいなあ」くらいに考えていて、実際に何をすればいいかわからない。	思っていたよりも実現が難しいと思ったが、より今のプランに気持ちが入り、意欲もでた。
参加前では、この事業が夢のままというか、実現できれば良いなというふうな段階だった。	参加後は、実現できればいいなという考えから、 <u>実現させるという決意に変化があったように思う。</u>
事業に必要な考え方がわからない。自分でなにかを創作していくことがなく自信がなかった。	ビジネスに必要なモノや考え方が <u>少しはわかった気がして自信がついた。</u>
ビジネスプランの提案がどういったことなのか把握できていなかった。	ビジネスプランにおいて、 <u>いかにお金、収支計画が大切かよく理解した。</u>
プランに関しては、初めは自分が共働きたい仕事をやめたくないからこんな託児所があればくらいでした。	ブラッシュアップを重ねる事で、経営だけでなく、育児、託児について学びました。その為、より具現化されていき、もしかしたら出来るのではないかな？と思いました。起業を今すぐに自分が出来るかは不確かですが先生方や大人の方々の力を借りて何かできればと思います。 <u>。</u>

4. 実際に、今回考えたプランを実施してみるチャンスがあれば挑戦したいですか。



■ はい ■ いいえ

5. 質問4で「いいえ」と答えた方のみお答えください。どのようなことが解消されたら実施に踏み切ってみたいと考えますか。
自分がプランに直接かかわる際に必要となる知識が足りないこと。

6. ビジネスプラン道場の参加によってどのような学び（成長）が得られましたか。
まず、おもしろいと思ったことは“やってみる”ことが大切だと感じました。一人で抱え込まず、声を上げることで前進すること。人前で堂々と自分のアイデアや考えを伝える力がつきました。
私たちはチームでの応募となったので、複数人で事業を進める難しさを知った。お互い思い描いている商品が違ったり、期限までに事業計画を仕上げる（皆の意見をすり合わせなければならいので）など思い通りにいかないことばかりで、でも新しい発見などもあり、楽しくいい経験となった。
少し積極性がでて自信がついたと思う。
アイデアを数字におこして現実性を高めることの難しさ。
自分1人では決して大きいことはできないということ。人のつながりを大切にし、協力してくれる仲間を集めるべきだということ。
より一層、父の仕事に誇りを持つことができたし、継ぐ気持ちも強まった。
ビジネスに必要な考え方が得られ、自信がついた。
ビジネスプランの提案の色々な攻め方(発表の仕方)を学べた。
まずは課題であったプレゼンテーション中に落ち着いて喋ること。また、プレゼン自体は色々な人に協力いただきましたが、この経験からプレゼンテーションの重要性、スマートさ、ストーリーなどたくさん学びました。起業について今すぐにはないですが、実現に向けての行動力を得ました。

(3)「社長のかばんもち」

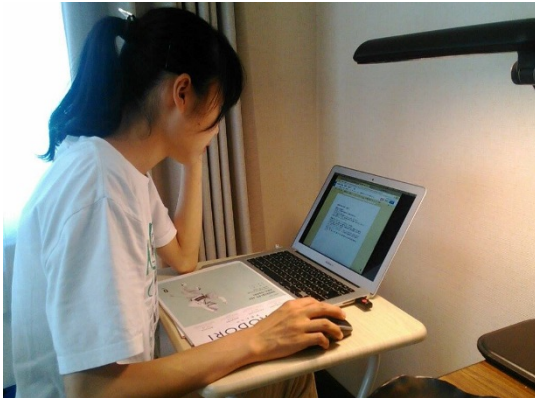
地元の小規模事業者であっても地域で活躍する社長や企業があることを知ってもらい、社長の仕事の考えた方、スピード感を一番近くで3～10日間、行動を共にすることで、座学では得難い暗黙知的な“経営術”を学び、固定的な“社長”のイメージから、自分が理想とする社長のイメージを描き直してもらうことを目的としている。また、社長のかばんもち実施終了後は、学生を受け入れた企業経営者を招き、報告会を実施した。

①平成29年夏季

4名の学生が徳島県内の企業4社で社長のかばんもちを体験した。

リッチハニカム株式会社	代表取締役 片岡豊	徳島大学生1名
株式会社MIZUYA	代表取締役社長 田中美和	四国大学生1名
Less is design 株式会社	代表取締役 平尾卓	四国大学〇生1名
ラーメン三八	代表取締役 岡田元一	四国大学生1名

<実施風景>



<社長のかばんもち報告会>



参加した学生からは、「将来のことについて考えることができた」、「当初、就職は病院で管理栄養士として働きたいと考えていたが、自分にしか出来ない管理栄養士を目指した勉強や資格取得をしていく。」、「何もない状態から、何か（事業）を作り出すことの大変さを知ることができた。」などの意見が聞かれ、受入企業の経営者からも「今後も学生を応援していきたい」、「提案内容を前向きに検討したい」、「当社に就職してほしい」といった前向きなコメントが聞かれた。

(4)「チャレンジショップ」

①実施目的・概要等

自分の事業アイデアを計画に落とし込み、市場調査や損益シミュレーションを行いながら、仕入れ、販売促進物の制作、販売まで学生自身が実際にリスクを負って商売を行い、予想と結果を、事後の収支から検証してみることで、うまくいった点、うまくいかなかった点を切り分け、仮設の精度を高めていくことの大切さや、商売の厳しさと楽しさを体験してもらうことを目的としている。

今年度は、2名の学生が1dayのチャレンジショップに挑戦し、地元の農作物や自分たちで製作したオブジェなどを販売した。

<事前のアイデア>



店名

natural craft

created by AMyu

アミ+ミウ

コンセプト

自然のもので手作り

ターゲット

家族(小さい子連れ)

マイクアップのキャラの絵で興味を持ってもらう

サブ→若い女性

おしゃれな外見インスタ映え

買わせたい→みかん

ひきつけたい→コケ玉作り

レモンレモネード 1コ 200yen
かぼす 1コ 50yen (5コで200yen)
みかん 1コ 70yen (5コで300yen)
流木 200yen
どんぐり(3コ入り) 10yen
コケ玉 苗あり 900yen
苗なし 500yen
シナモン 3本で 250yen
ローリエ 5枚で 300yen



<実施風景>



事業実施後のアンケートにおいて、事前、事後でうまくいった点、いかなかった点については「事前調査は参加できなかったけれど、予算組み、シミュレーション、価格設定、販売方法においてはうまくいったと思った。しかし、商品、商品構成において時期や栽培されているものから、お客さんが欲しいと思う商品があまりなかった。」

「去年のデータから、どこの地域から来るのかなど調べることができたが、そのようなデータはなかったため、参考にできなかった。予想していた通り、見た目でのインパクトがあれば買手の注目をひきつけられることがわかった。デザインや売る商品の活用法を提示したのは成功だった。ただ、商品価格の見直しが必要だったと思う。」

また、「商品構成において、まず、事前調査から売れそうな商品、売れ残りそうな商品をよく考えて構成すること」、「その地域で何が求められているのか、どんな価格なら買いたいと思うのか他のお店でリサーチしておく。価格の書いた札が小さく、店のデザインがおしゃれだと「高そう」と思われてしまうから、価格は大きく遠くからでも見やすく改善する。何がどの価格で売れたのか把握できなかったため事前に販売するものの表などをつくる。」等、次回に向けての前向きな意見が聞かれた。

(5) その他事業

① 学生×食品開発プロジェクト

本事業は県内の NPO 法人（NPO 法人チャレンジサポーターズ）との連携事業であり、県内の食品関連企業と学生が新たな商品の開発を行うものである。アイデア出しから試作までを行い、企業と協力しながら実施する中で、新商品の企画のノウハウを学び、将来、食分野に関わる専門家として、新しいものを生み出し市場に提案していくことの大変さやその過程で必要となる原価計算やマーケティングなど様々な仕事との関わりを知ること、食品関連分野のあらゆる可能性を模索してもらうことを目的としている。

今年度は、5 組の学生チームが参加し、2 カ月間の共同開発期間後に「第 3 回学生×食品開発プロジェクト」の成果発表会を実施した。各チームそれぞれ、企業とのヒアリングから既存顧客や開拓余地のあるターゲット層のニーズを的確に捉えたプランが発表され、アレルギーを持つ子どもの親をターゲットにした「徳島野菜を使ったアレルギー対応ケーキ」や働く女性向けの「県産食材を使用したヘルシーなキッシュ」など、普段の学びを存分に活かした提案が行われた。

<事業実施風景>



<報告会風景>



参加学生からは、「初めての経験でわからないことだらけだったが、発表会直前は毎晩アルバイトから帰ってから作業を行うなど自分でも本当に頑張ったと思う。可能なら今回企画した商品が企業の新商品として販売されると嬉しい。」「次回は時間配分等を意識して、早め早めにプロジェクトを動かしていきたい」などの感想があった。

また、今回、学生チームが提案した商品企画を受入企業が採用し、商品化されている。

②創業セミナーの実施

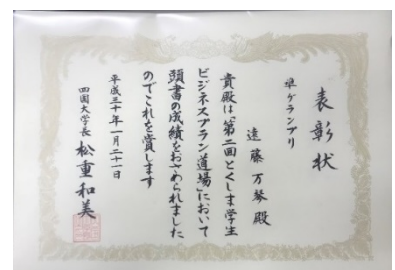
県内の高等教育機関の学生に対し、創業支援クリエイターが「キャリアプランニング」等の出張講義を実施した。

5月 2日	四国大学 1年 小島准教授ゼミ	15名
5月12日	徳島大学 生物資源産業学部 1年	100名
5月26日	阿南工業高等専門学校	161名
7月 5日	四国大学 BC科	8名
10月24日	城西高校 アグリビジネス科 1年	25名
11月21日	城西高校 アグリビジネス科 1年	25名
11月29日	四国大学 全学共通教育	285名
12月 1日	〃	285名
12月 6日	〃	180名
12月 8日	〃	80名
1月17日	四国大学 管栄養養成課程 3年	80名

③学生による制作物の支援

四国大学のCOC+事業では、イベント等で使用するトロフィーのデザイン制作、チラシ及びポスターのデザイン制作、表彰状への揮毫等を、本学の学生が手がけた。

<制作物>



④COC+事業のPR活動について

COC+事業の認知と理解を広めるための広報活動も様々な場所で行った。
＜11月20日～1月22日 四国大学内 A館・N館パネル展示＞



＜SNSを通じての広報活動＞



＜10月12日～14日 アスティ徳島「ビジネスチャレンジメッセ」にブース出展＞



3月2日～3日 COC/COC+全国シンポジウム（高知）ポスターセッション

徳島文理大学の取組

1. 地域学の教育プログラムの開発・実施

(1)実施目的及び期待効果

本学では新入生全員を対象とした地域学を実施し、その中で遍路ウォークと名付けたフィールドワークを行ってきた。このような試みが実を結ぶには継続ということが非常に重要となる。そこで、平成 29 年度は地域学アドバンストコースを開設した。地域学アドバンストコース開設により、学生の地域への関心がより深く具体的になる事が期待できる。また、同様の目的でボランティアパスポート制度を導入した。

(2)日時

地域学：①平成 29 年 5 月 25 日、②6 月 1 日、③6 月 8 日

遍路ウォーク：事前学習平成 29 年 4 月 20 日、遍路ウォーク 4 月 29 日・30 日

地域学アドバンストコース：平成 30 年 2 月 14 日・15 日

(3)場所

地域学：本学

地域学アドバンストコース：吉野川市

(4)参加者数

地域学：新入生全員

ボランティアパスポート：受講者数 103 名（うち緑のパスポート修了者 91 名、赤のパスポート修了者 8 名、青のパスポート修了者 4 名）

地域学アドバンストコース：8 名

(5)内容

地域学：全新入生を対象として、①学生による地域貢献活動の発表会、②学生による遍路ウォーク発表会、③徳島県知事による講演を行った。

遍路ウォーク：四国霊場 88 力所のうち 1 番札所から 6 番札所までのおよそ 19 km を歩いた。

地域学アドバンストコース：遍路道で食べるのに適した吉野川市の特色を踏まえた弁当の提案を行った。

(6)実績

地域学 3 講座及び遍路ウォーク（事前学習を含む）を実施し、さらに吉野川市と連携した「地域学アドバンストコース」を開設した。

(7)総評

地域学の教育プログラムの開発・実施ができた。



活動の様子

2. 地域医療・福祉分野における卒後教育の充実

(1)実施目的及び期待効果

医療系学生が就職先を選択する際の大きな要因のひとつは卒後教育システムである。しかし、地元の中小施設では人的にも設備的にも充分とはいえない面がある。そのため毎年都会へ就職する卒業生が少なくない。本学では看護学科の学生を対象に先輩 OG、OG からの情報提供機会を設けてきたが、本年度は特に地元へ就職した先輩に卒後教育も含めた施設の実態を説明してもらう機会を設けた。一方、大学として卒後教育についてどのような支援ができるかを考えると、ひとつは本学の設備利用である。しかしこの設備を活用し、特にアクティブ・ラーニングを行える人材はまだまだ充分とは言えない。そこで本年度そのような看護教育人材育成プログラムを立ち上げた。大学からの卒後教育支援により、地元中小施設へ就職する事の利点を高める事が期待できる。

(2)日時

地元就職先輩 OG、OB による施設説明会：平成 30 年 1 月 23 日

卒後教育のための人材育成研究会：平成 30 年 1 月 29 日

(3)場所

本学

(4)参加者数

地元就職先輩 OG、OB による施設説明会：本学看護学科 3 年生 80 名、先輩 OG、OB10 名

卒後教育のための人材育成研究会：参加者 6 名

(5)内容

徳島県から 7 施設（9 名）愛媛県から 1 施設（1 名）の先輩が参加、各々の施設から卒後教育の実態等の説明があり、その後卒業生在校生を交えた座談会を行った。（地元就職先輩 OG、OB による施設説明会）卒後教育充実という趣旨に賛同した本学看護学研究科大学院生による指導者研修会を開始、その後他施設からの参加者が加わり、研究会としてスタートした。

(6)実績

看護学科における地元就職先輩 OG、OB による施設説明会の実施および卒後教育のための人材育成研究会を立ち上げた。

(7)総評

地元就職先輩 OG、OB による施設説明会は本年度 2 回目であったが、各施設からの発表後実施された先輩を囲んでの懇談会がお互いの本音が出て好評であった。卒後教育のための人材育成研究会参加指導者による教育（卒後ではない）が本年度中に他施設で実施予定であり、今後の広がりを期待している。



活動の様子

3. 集客交流産業論の開講

(1)実施目的及び期待効果

本学が、総合政策学部授業として実施してきた集客交流産業論では、地域の最前線でご活躍中の方々から地域活性化の「カギ」を学び、幅広い実践的なノウハウを身につけるとともに、将来地方創生を担う人材の育成を行う。地域活性化の「成功の論理」とは何か、自らできる地方創生とは何かを学び、将来行動に移すきっかけづくりとなる事を期待している。

(2)日時

平成 29 年 9 月 20 日～1 月 24 日の期間中に 15 回

(3)場所

本学

(4)参加者数

総合政策学部学生 155 名

(5)内容

地域で活躍する方を招いてのパネルディスカッション及び学生の地域貢献活動の事例報告を行った。

(6)実績

集客交流産業論において学生の地域活動の事例発表を行った。

(7)総評

地域活性化の「成功の論理」とは何か、自らできる地方創生とは何かを学び、将来の行動に移すきっかけづくりができた。

4. 地域貢献インターンシップの実施

(1)実施目的及び期待効果

吉野川市美郷地区の廃校跡地利用を本学建築デザイン学科の学生から提案し、それをきっかけに地元設計建設企業等でのインターンシップの実現を期待できると考えている。

(2)日時

平成 30 年 2 月 10 日(土)

(3)場所

吉野川市

(4)参加者数

建築デザイン学科学生 11 名、地域住民 20 名、県職員 2 名、建築士事務所 1 名、吉野川市職員 2 名

(5)内容

吉野川市美郷の空き施設（廃校・旧診療所）の再利用を目的としたリノベーション案を提案し、建築事務所担当者および地域住民と意見交換を行った。

(6)実績

建築デザイン学科の学生が地域住民の意見をくみ取りながら案を作成し、発表会を行うことで建築士として地域で活躍する方から意見をいただくことができた。しかし今回はインターンシップの実施には至らなかった。

(7)総評

実質的なインターンシップまでに発展はしていないが、地域や行政と連携した発表会を実施するこ

とができ、来年度にインターンシップに発展する道筋をつけることができた。



活動の様子

徳島工業短期大学の取組

1. 技術講習会

1) 実施目的及び期待効果

企業へのアンケートを参考に、整備技術の基本を見直すことにより、仕事の実際を体験させる。また、就業への自信を持たせることができる。

2) 日時

平成 29 年 12 月 8 日 (金)

3) 場所

徳島工業短期大学

4) 参加者数

6 名

5) 内容

基本的な技術等についての演習

6) 実績

地元就職予定者に対して就業への自信を持たせることができた。

7) アンケート結果

小人数のためアンケートは実施せず。聞き取りにより結果全員好評。



活動の様子



活動の様子

2. 技術講習会

1) 実施目的及び期待効果

徳島で働く、起業するということについて、あらためてその魅力や意味を考える機会を持たせる。また、就職活動に取り組む意欲を高めさせることができる。

2) 日時

平成 29 年 6 月 7 日 (水)、7 月 27 日 (木)、9 月 9 日 (土)、9 月 25 日 (月)、10 月 23 日 (月)、12 月 1 日 (金)

3) 場所

徳島工業短期大学

4) 参加者数

延べ 216 名

5) 内容

スズキ自販徳島、徳島マツダ、徳島ダイハツモータース、ホンダ北徳島各社採用関係者及びメーカー担当者による技術説明。

6) 実績

県内自動車関係企業やメーカーの取組を知り、県内就職への意欲を持たせることができた。

7) アンケート結果

レポート形式でのアンケートを実施した。各企業の特徴やメーカーの取組を知り、就職への意欲を高めることができたことを思わせるレポートが多かった。



活動の様子



活動の様子

3. 進学説明会

1) 実施目的及び期待効果

体験や講話を通して自動車技術への関心を高めさせる。また、地元自動車業界への就職を見据えた進学を考えさせることができる。

2) 日時

平成 29 年 4 月 22 日 (土)、5 月 13 日 (土)、6 月 17 日 (土)、7 月 8 日 (土)、7 月 22 日 (土)、8 月 6 日 (日)、8 月 27 日 (日)、9 月 16 日 (土)、10 月 14 日 (土)、11 月 4 日 (土)、平成 30 年 1 月 14 日 (日)、3 月 17 日 (土)

3) 場所

徳島工業短期大学

4) 参加者数

延べ 233 名

5) 内容

自動車技術体験、就職等説明

6) 実績

自動車技術・県内就職への関心を高めさせ、入学者の増加を見た。

7) アンケート結果

以下 3 点についてのアンケート結果から、地元就職を含め自動車への関心を高めることができたと思う。

○大学の自然を含めた雰囲気・施設・設備(回答率 93.2%)

良い 92.7% どちらとも 0.5% 良くない 0.0%

○実習体験(回答率 96.4%)

良い 94.8% どちらとも 1.6% 良くない 0.0%

○本学への理解度（回答率 93.8%）

良くわかった 86.0% どちらとも 7.8% 良く分からなかった 0.0%



活動の様子



活動の様子

4. 小・中学生向けイベント

1) 実施目的及び期待効果

体験を通して自動車技術への関心を喚起させる。また、自動車への関心を持たせることで生活の中で地元自動車業界を意識させることができる。

2) 日時

平成 7 月 7 日（金）、7 月 22 日（土）、9 月 28 日（木）、9 月 29 日（金）、10 月 11 日（水）、10 月 12 日（木）、10 月 13 日（金）、10 月 16 日（月）、10 月 23 日（月）、11 月 1 日（水）、11 月 2 日（木）、11 月 30 日（木）

3) 場所

徳島工業短期大学

4) 参加者数

延べ 305 名

5) 内容

自動車技術体験

6) 実績

高校 1 校、町内小学校 2 校、県内中学校 7 校及び県内小学生対象のイベントを実施し、自動車技術への関心を持たせることができた。

7) アンケート結果

小中学生中心のため、感想文によりアンケートに代えた。自動車についての驚きや担当者への感謝の言葉など、自動車技術への関心を持ったことが分かるものが多かった。



活動の様子



活動の様子

5. 総評

平成 29 年度も働きかける対象者を 4 つに分類し、1 年を通じて活動してきた。

1 については、就職先で自信をもって働き、定着することによって、後輩が県内就職に続いて行くものと思われる。2 については、より多くの企業の協力を得られて、学生の地元就職への意識を高めることができたと思うが、条件面で県外企業を志向するものもいる。3 については、参加者数は昨年を上回ることが予想され、県内入学者も増加すると思われるので、県内就職率の向上につながると思われる。4 についても、実施回数が増えており、このまま継続することによって、県内入学者の増加、引いては県内就職者の増加につながって行くものと思われる。

以上のことから、県内就職率の向上について、学生を取り巻く就職環境の影響は小さくはないが、基本的にはこれまでの視点から活動を継続することで目標達成が可能になると考える。

阿南工業高等専門学校の実践

阿南工業高等専門学校ではCOC+事業の一環として、事業期間中、企業との連携事業を計画しており、平成29年度は次の取り組みを行った。

1. 内容

4年生を対象とするインターンシップに協力可能な企業の開拓および実施内容打合せを行い、企業ニーズと学生のマッチングを行う。また、5年生進路相談を実施し、県内企業に目が向くように指導する。

1) 期待効果

インターンシップの実施により、働くイメージを作り、就職活動に役立てることができる。また、県内企業の魅力を伝えることにより、就職率の向上が期待できる。

2) 結果

インターンシップに対象学生全員を派遣できた。(182名) また、県内企業は66名(延べ人数)であった。(36%)



JBS テクノロジー殿の様子



JBS テクノロジー殿の様子

2. 内容

1年生～3年生を対象にキャリア教育を実施し、将来の夢を与え、技術者像や職種などを理解させるとともに、自己分析を行うことにより企業選択の方法を身につける。

1) 期待効果

自分を知ることによって、自分が活躍できる県内企業を選択することができる。

2) 結果

1年生～3年生を対象にキャリア教育を各学年4回実施した。

3. 内容

共同授業を通して、地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。

1) 期待効果

将来の夢を実現できる県内企業の魅力を知り、就職率の向上が期待できる。

2) 結果

協働授業の参加者は8名であった。アンケートより、将来の夢を実現できる県内企業の魅力を知り、就職率の向上が期待できる。



インターンシップ講座の様子



身だしなみ講座の様子

3. 内容

3年生・4年生を対象とする長期インターンシップに協力可能な企業の開拓および実施内容を検討する。また、先進的な取り組みを行っている企業を訪問して調査する。

1) 期待効果

長期インターンシップの実施により、学生と企業と結びつきが強くなる。また、先進的な事例を研究することにより、新たなインターンシップの教育効果について検討し、県内企業への就職促進につながることを期待できる。

2) 結果

長期インターンシップに18名の学生を派遣できた。県内企業へは12名派遣できた。(66%)また、県内企業への就職促進につながることを期待できる。



成果発表会の様子



就業状況

平成 29 年度参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の実施について

平成 29 年 8 月 21 日～24 日、COC+事業の一環として、参加校で連携して開催する共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」を実施し、「徳島県の将来ビジョン」と「徳島県で働く・暮らす」の 2 つの観点を学生に伝えることを目的に、地域の様々な分野で活躍する企業や NPO、行政などのリーダーを講師に迎えて、地域社会の将来ビジョンを、さらに地元で活躍する若手 OB,OG から自らのワークライフバランスや仕事のやりがいを語っていただいた。

なお、本授業は、複数の参加校の学生が正課の授業として導入するため、メイン会場での講義を映像配信し、参加校それぞれのキャンパスで受講できる形式で実施した。

1) 授業日時

平成 29 年 8 月 21 日～24 日

2) 参加人数

日時	徳島大学	四国大学 四国大学短期 大学部	徳島文理大学	徳島工業 短期大学	阿南工業高等 専門学校	その他（高校 生・一般等）	日時別 合計
21 日	58	27	10	－	8	17	120
22 日午前	56	26	6	－	8	13	109
22 日午後	58	28	5	－	8	8	107
23 日午前	55	27	2	10	8	6	108
23 日午後	57	26	10	－	8	14	115
24 日午前	58	28	3	－	8	6	103
24 日午後	57	28	6	－	8	0	99
合計	399	190	42	10	56	64	761

3) 実施内容

8 月 21 日（月）[メイン会場：徳島大学共通講義棟 6 階創成スタジオ]

時間	分類	登壇者
10:00 ～ 11:00	導入「授業の構成と講演テーマの紹介」	元 COC プラス推進コーディネーター 川崎修良
11:15 ～ 12:30	特別講演「徳島県の将来ビジョン」	徳島県知事 飯泉嘉門
13:30 ～ 14:50	講演①「徳島県の強みと成長産業」	公益社団法人徳島経済研究所顧問 田村耕一
15:00 ～ 16:00	パネルディスカッション① 「徳島の山海エリアで働く」	海陽町役場産業観光課 坂東裕司 In Between Blues 永原レキ (株)ハレとケデザイン舎 青木陽平 司会：三好市地域おこし協力隊 井上琢斗
16:00 ～ 16:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良

8 月 22 日（火）[メイン会場：四国大学、徳島文理大学]

時間	分類	登壇者
9:30 ～ 10:30	講演②「地域づくりと観光産業」	(株)あわえ代表取締役 吉田元晴
10:30 ～ 10:40	教員コメント	四国大学長 松重和美

10:40 ~ 10:50	質疑応答	元推進コーディネーター 川崎修良
11:00 ~ 12:00	パネルディスカッション② 「徳島の地域づくり、観光分野で働く」	(株)高鉾建設(酒販事業部) 山下和美 (株)ケーブルテレビあなん 長谷川加奈 上勝町地域おこし協力隊 阿部真哉 司会：四国大学長 松重和美
12:00 ~ 12:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良
13:30 ~ 14:30	講演③「地域医療と福祉の仕事」	とくしま産業振興機構プロジェクトディレクター 濱尾重忠
14:30 ~ 14:40	教員コメント	徳島大学副理事 金山博臣
14:40 ~ 14:50	質疑応答	元推進コーディネーター 川崎修良
15:00 ~ 16:00	パネルディスカッション③ 「徳島の地域医療・福祉分野で働く」	稲次整形外科看護師 瀬尾千恵 (有)サンコーファーマシー薬剤師 宮崎恭治 北島町役場地域包括支援センター(ソーシャルワーカー) 黒田なつみ 司会：三好市地域おこし協力隊 井上琢斗
16:00 ~ 16:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良

8月23日(水) [メイン会場：徳島大学]

時間	分類	登壇者
9:30 ~ 10:30	講演④「次世代技術関連産業の展望」	藤崎電機(株)代表取締役 藤崎耕治
10:30 ~ 10:40	教員コメント	徳島大学教授 右手
10:40 ~ 10:50	質疑応答	元推進コーディネーター 川崎修良
11:00 ~ 12:00	パネルディスカッション④ 「徳島の次世代技術分野で働く」	レーザシステム(株) 尾崎貴弥 (株)ジャパンコミュニケーション徳島 山中真里奈 独立行政法人 自動車総合機構 四国検査部徳島事務所 坂 裕樹 徳島トヨペット株式会社 鳴門店 山下祥子 司会：三好市地域おこし協力隊 井上琢斗
12:00 ~ 12:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良
13:30 ~ 14:30	記録映像「ICT と地域産業」	(NPO) グリーンバレー理事長 大南信也
14:40 ~ 15:00	質疑応答	(NPO) グリーンバレー理事長 大南信也 推進コーディネーター 川崎克寛
15:00 ~ 16:00	パネルディスカッション⑤ 「サテライトオフィスで働く」	(株)フードハブ・プロジェクト農業長 白桃薫 Kamiyama Makerspace 代表 あべさやか (株)ダンクソフト 神山ブリッジ キャプテン 本橋大輔 司会：推進コーディネーター 川崎克寛
16:00 ~ 16:30	グループワーク	推進コーディネーター 川崎修良

8月24日（木）〔メイン会場：徳島大学〕

時間	分類	登壇者
9:30 ～ 10:30	講演⑥「6次産業化分野の取り組みと農林水産業の展望」	(有) 榎山農園 専務取締役 榎山直樹
10:30 ～ 10:40	教員コメント	徳島大学教授 玉真之介
10:40 ～ 10:50	質疑応答	元推進コーディネーター 川崎修良
11:00 ～ 12:00	パネルディスカッション⑥ 「徳島の6次産業化分野で働く」	三協商事（株）和崎美穂 (有) 榎山農園 瀧川匡人 美波町産業振興課 小林大起 司会：三好市地域おこし協力隊 井上琢斗
12:00 ～ 12:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良
13:30 ～ 14:30	授業総括	元推進コーディネーター 川崎修良
14:30 ～ 15:30	グループワーク	元推進コーディネーター 川崎修良

4) 授業構成

2コマ連続の講義を基本とし、COC+事業で設定した徳島の未来を創造する産業分野をテーマに、前半に地域リーダーの講演、後半に参加校 OB、OG が登壇するパネルディスカッションを実施した。講演の後には、参加校の教員がコメントを行った。また、教員コメントの間に会場からの質問を取りまとめ、講演者からの回答の時間を設けた。講義の終わりにはグループワークを課し、各テーマについて小レポートを提出させた。（詳細については文末のシラバス（参考①）を参照）

（テーマ別講義（2コマ分 180分）の時間配分）

- ① 地域リーダーによる講義（60分）
- ② 教員からのコメント（10分）[コメント中に質問用紙を回収して質問を取りまとめる]
- ③ 質疑応答（20分）
- ④ 休憩（10分）
- ⑤ 参加校 OB、OG が登壇するパネルディスカッション（60分）
- ⑥ グループワーク（20分）

5) グループワークの内容と成績評価の方法

グループワークでは、講演及びパネルディスカッションの内容を元に、授業の到達目標に沿った小レポートを作成し、4～5名程度のグループに分かれて発表し、発表内容を受けてさらにレポートを作成する。成績は講義の終了時のグループワーク時に作成した小レポートで評価する。複数の高等教育機関において成績評価が必要となる講義のため、成績評価の方法をルーブリックの形で明確にして共有する。

6) 講義の配信方法

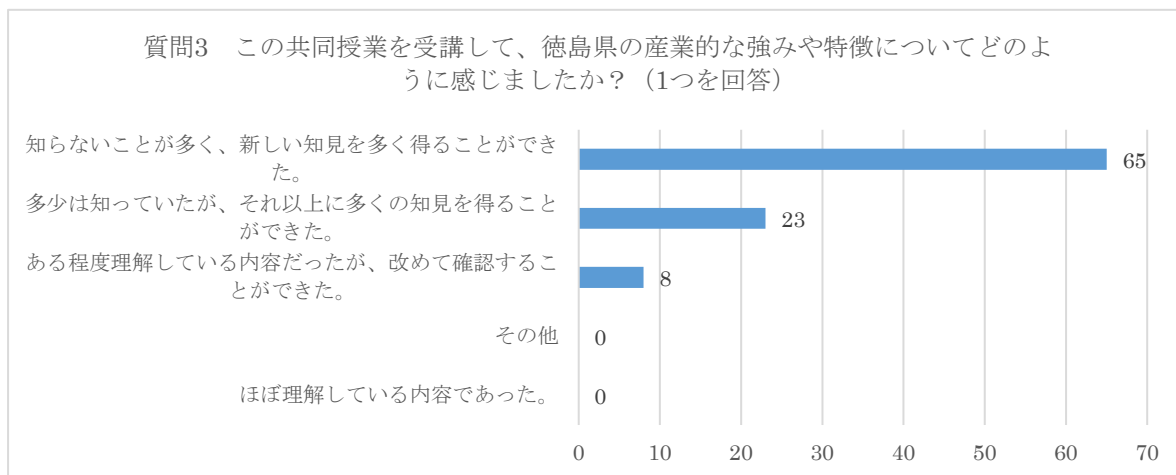
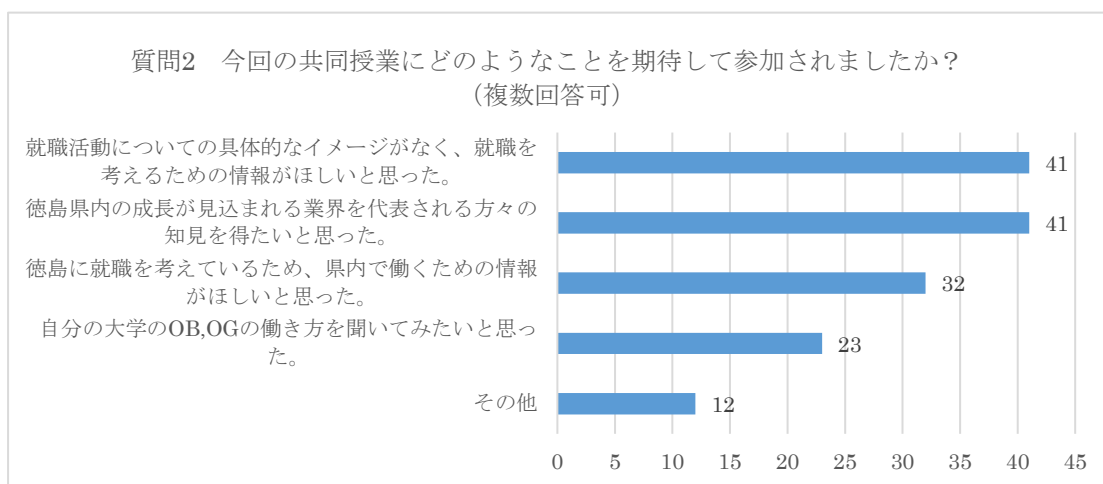
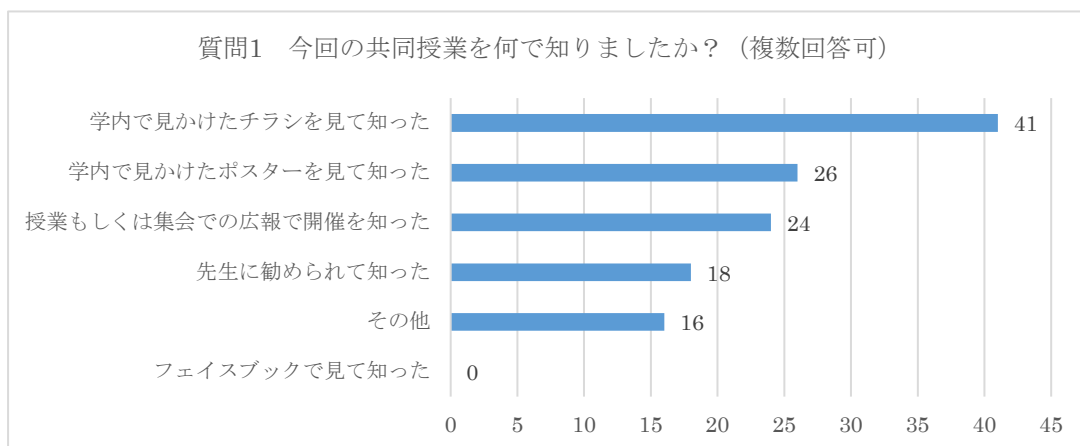
映像配信ではトラブルが生じた場合に備え、テレビ会議システム及び Web 上での動画共有サービスの二重の経路で講義を配信体制により、対応した。

（参考）平成 29 年度コンソーシアム開講科目シラバス（徳島大学版）

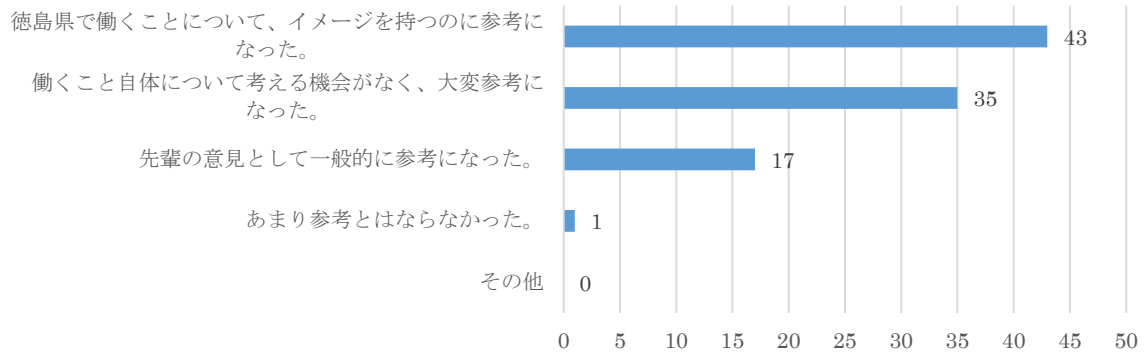
【曜日・講時】	夏休み集中講義（2017年8月21日～24日）
【授業題目名】	「徳島の魅力、徳島で働く」
【授業の目的】	徳島県の産業面から見た将来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。
【授業の概要】	徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のOB・OGを講師に迎えて、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、ディスカッションを行って、主体的に考える。
【キーワード】	徳島県 将来ビジョン やりがい 暮らし
【到達目標】	①徳島の地域文化を理解し、徳島における暮らしの魅力を説明することができる ②徳島の成長力がある産業を理解し、大学での自分の学びとつなげて考えることができる
【授業の計画】	8/21 [午前（10:00～12:30）]導入（会場：徳島大学創成スタジオ） 第1回：授業の構成と講演テーマの紹介（10:00～11:00） 第2回：「徳島県の将来ビジョン」講演者：飯泉嘉門徳島県知事（11:15～12:30） [午後（13:30～16:30）]（会場：徳島大学創成スタジオ） 第3回：徳島の未来を語る①：「徳島県の強みと成長産業」（田村耕一氏に依頼） 第4回：徳島で働く①：「徳島県の雇用と徳島で活躍できる人材」 8/22 [午前（9:30～12:30）]（サテライト授業） 第5回：徳島の未来を語る②：「地域づくりと観光産業」 第6回：徳島で働く②：「地域づくりと観光産業」 [午後（13:30～16:30）]（サテライト授業） 第7回：徳島の未来を語る③：「地域医療と福祉の仕事」 第8回：徳島で働く③：「地域医療と福祉の仕事」 8/23 [午前（9:30～12:30）]（サテライト授業） 第9回：徳島の未来を語る④：「次世代技術関連産業の展望」 第10回：徳島で働く④：「次世代技術関連産業の展望」 [午後（13:30～16:30）]（サテライト授業） 第11回：徳島の未来を語る⑤：「ICTと地域産業」 第12回：徳島で働く⑤：「ICTと地域産業」 8/24 [午前（9:30～12:30）]（サテライト授業） 第13回：徳島の未来を語る⑥：「6次産業化の取り組みと農林水産業の展望」 第14回：徳島で働く⑥：「6次産業化分野の取り組みと農林水産業の展望」 [午後（13:30～15:00）]総括（サテライト授業） 第15回：総括、グループワーク
【教科書・参考書】	『徳島が好きになる本』
【成績評価方法・基準】	各回講義の終わりに実施するグループワークを踏まえて執筆する小レポートと最終レポートで評価する。
【再試験】	なし
【備考】	8月21日の授業は徳島大学常三島キャンパスで実施します。各大学からの送迎バスを用意します。8月22,23,24日の授業は、それぞれ別の会場で講演を行います。サテライト授業として所属している大学でも受講できます。

7) アンケート結果

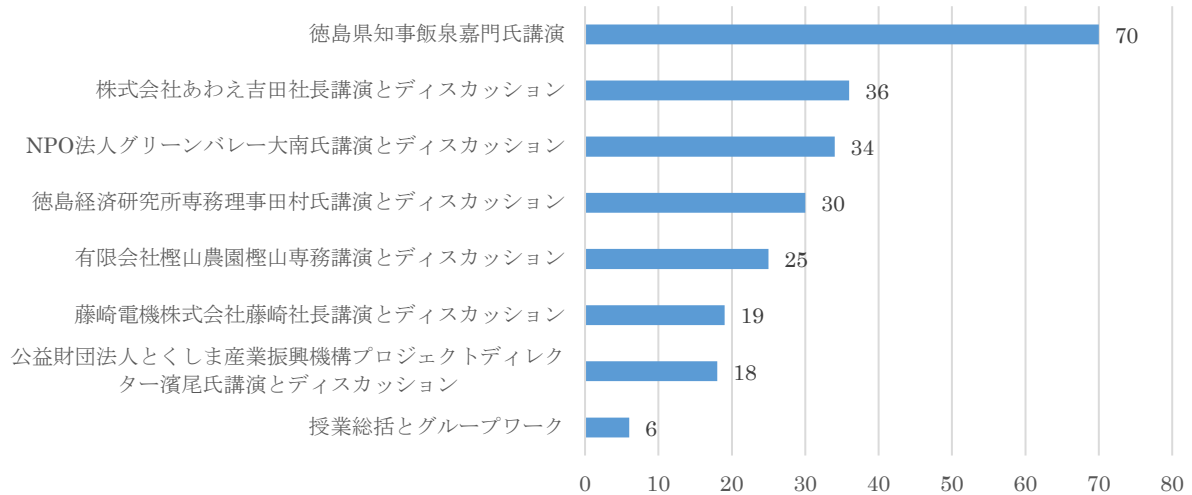
① 履修登録者



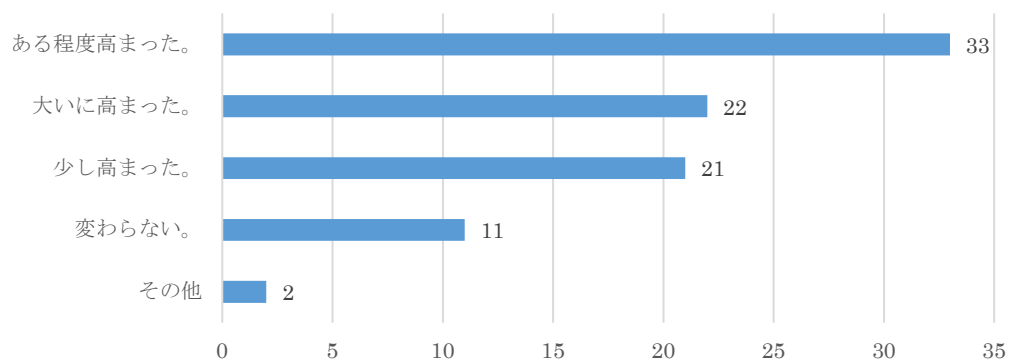
質問4 この共同授業を受講して、徳島県で働くOB,OGの話は将来を考える上で参考になりましたか？（1つを回答）



質問5 今回の授業について、特に満足度が高い授業は何ですか。（複数回答可）



質問6 この共同授業の受講前と比較して、徳島県で働くことへの関心は高まりましたか？（1つを選択）



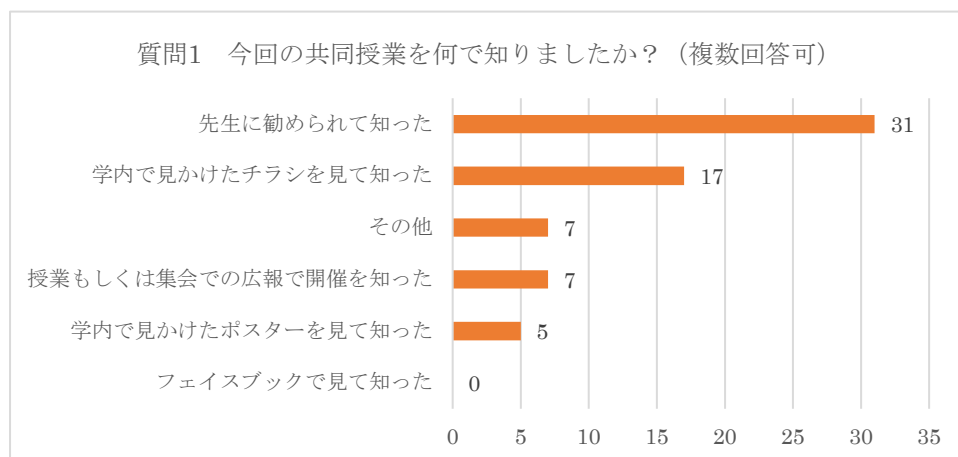
質問 7 この共同授業について特によかったところを記述してください。(抜粋)

1	具体的に徳島にはどんな会社があるのか、どんな町があって、そこで働く人がどんな仕事をしているのかがよく分かる授業でした。徳島で働くことがどういことがよく分かりました。	徳島大・総合科学部・1年
2	様々な業界の方々の話を聞くことができ、将来の職のイメージがついてきたこと。	徳島大・生物資源産業学部・1年
3	興味のある分野だけでなく、今まであまり関心のなかった分野についても知ることができた良い機会になった。また実際に徳島で働く方々のお話を聴くことによって、徳島で働くことを具体的に想像することができ、とても魅力的なものだと感じた。	徳島大・生物資源産業学部・1年
4	お金を得るだけの働き方ではなく、お金を得つつ地域に貢献し自分も楽しむという働き方があると知れて良かった。	徳島大・理工学部・1年
5	この授業を受けるまでは就職というものに対して漠然としたイメージしかなかったが、先輩たちの話を聞いて、このままでは駄目だと思ったし、徳島のいいところもより知れたのでそこがよかったと思う。	徳島大・理工学部・1年
6	パネルディスカッションのおかげで、同じ質問に対して違う分野のOB・OGたちの意見がきけたので比較ができた。	徳島大・理工学部・2年
7	徳島県の良さ、悪さ、両方も側面から見えるものを多く知られたところ。徳島で働く魅力を具体的に知れたところ。また、都市の方で働かれていた人の都市と地方での働き方を比べたお話は、都市に出たいと考えていた自分にとって、大変参考になるお話だった。	四国大・文学部・2年
8	徳島での魅力と現状を知る機会でも何事にも挑戦するのがとても大事だと思えたのでその点が特に良かった。	四国大・経営情報学部・4年
9	初日に他の大学の学生とのグループワークができて大学は違うが同じ世代と考えを共有できてすごくいい時間になりました。	四国大・経営情報学部・4年
10	徳島にある文化の良さを知り、国内外へ伝えていくことの大切さ、地域の特徴を知り、活かしていくこと、変化を加えることで過疎地を変え、地域を活性化させることができることを学べた。何かを行うために考えるだけで無く主体的に動き出すことが必要だということを知った。	四国大短期大学部・人1年
11	社会に出てからの学習が勝負だと知ることができた。	文理大・総合政策部・1年
12	具体的な話が聞けたこと。	文理大・総合政策部・1年

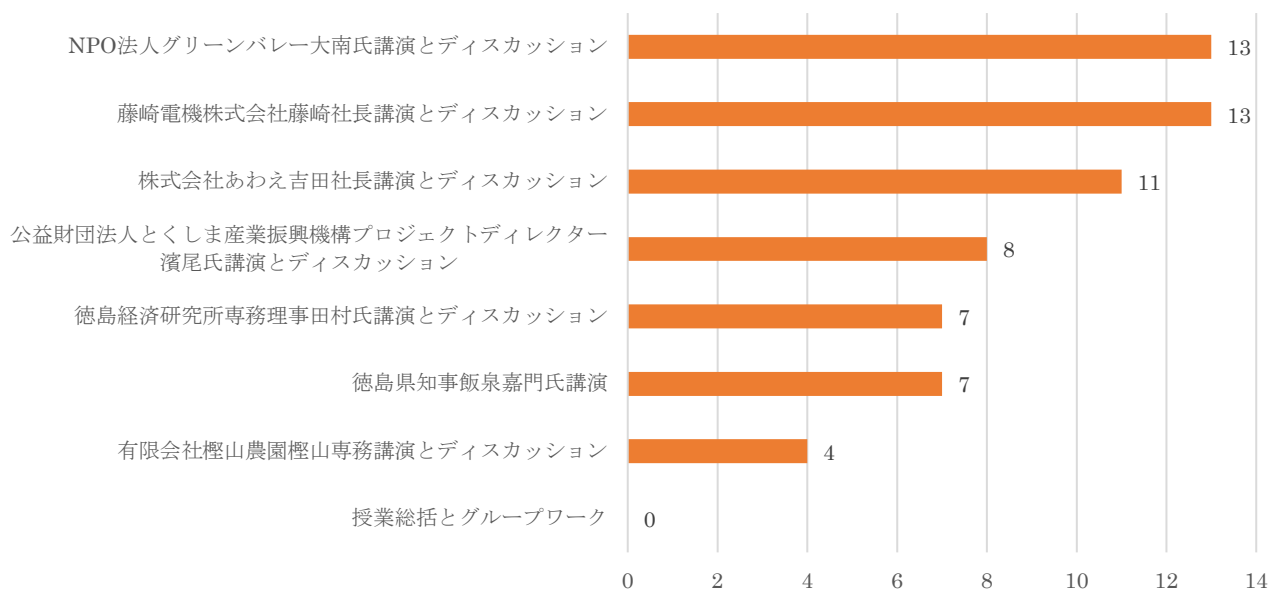
質問 8 この授業について改善してほしいところがあれば記述してください。(抜粋)

受配信環境について	映像の画質
	ネット中継の途中で途切れてしまったところ。
レポートの構成について	小レポートの間が全て同じだと毎回書く内容が同じようになるので、毎回問を変えて欲しかったです。
	全体的に講演内容はよかったが、4日間同じ内容のレポートで書きづらかった。
講演、パネルディスカッションの内容について	映像がとまったり切れたりしていたところ。講演の話の中に徳島県で働いたり経営したりするメリット・デメリットの話が無いこともあったところ。本当にはないのかもしれないが、徳島で働くデメリットの話がほとんどなかったこと。
大学間の交流について	地域リーダーにもっと多くの質問ができるようになればもっと学びが多いかもしれないと思う。難しいのかもしれないけれど、直接会って話して得られるものは、インターネットなどからのものより、多く濃いと思う。
	ずっと座って聞くだけなのがもったいなかった。直接色んな人と話をしてみたかった。
	中継での授業は声が聞こえにくく、何を喋っているのかわからないので、この開場であるべく講演して欲しいと思った。

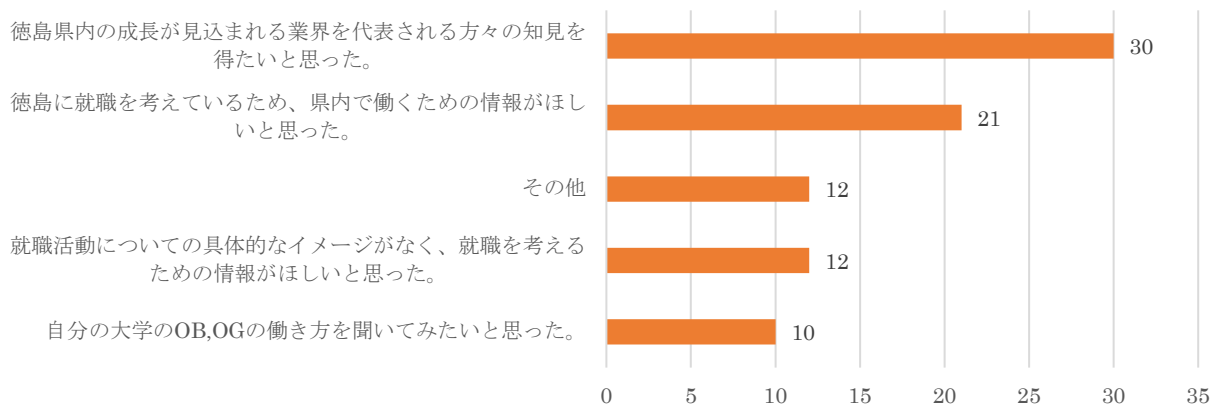
② 一般参加者



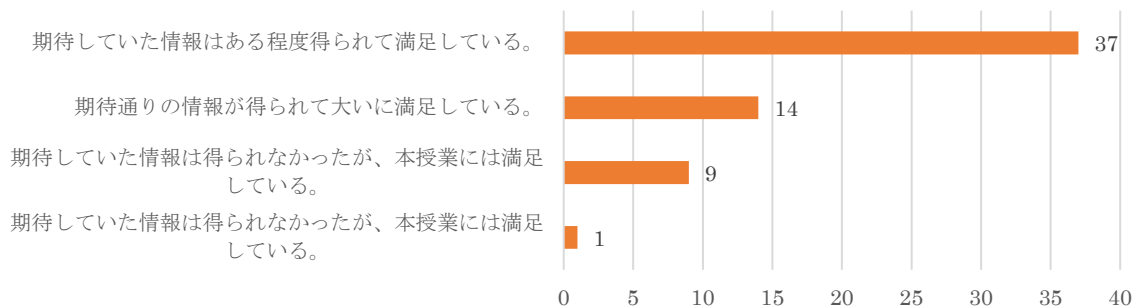
質問2 今回の共同授業では何を受講されましたか？（受講されたカリキュラムを全てお答えください。）



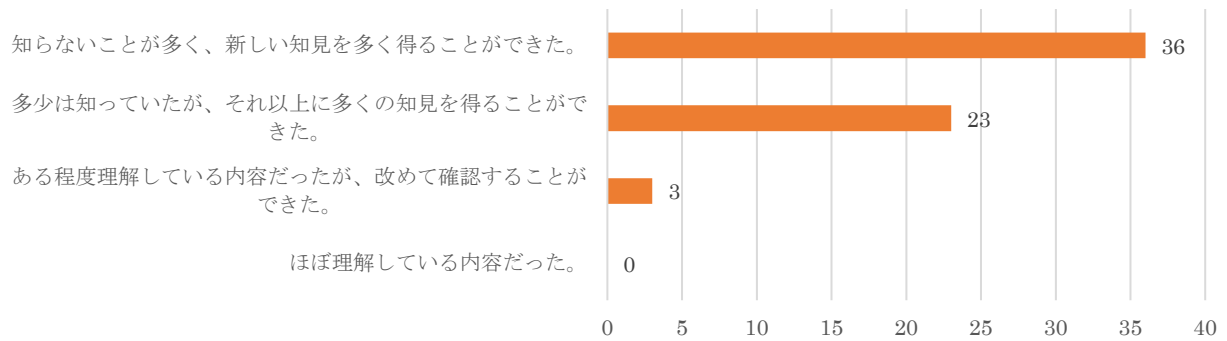
質問3 今回の共同授業にどのようなことを期待して参加されましたか？（複数回答可）



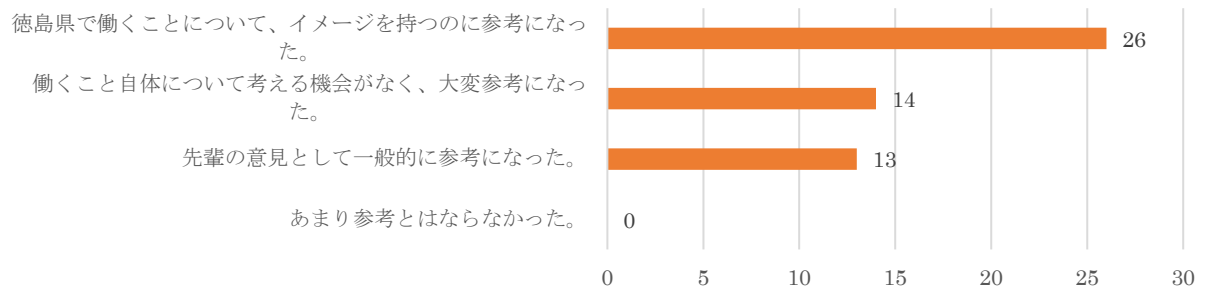
質問4 質問3で回答された目的について、期待されていた情報は得られましたか。（1つを回答）



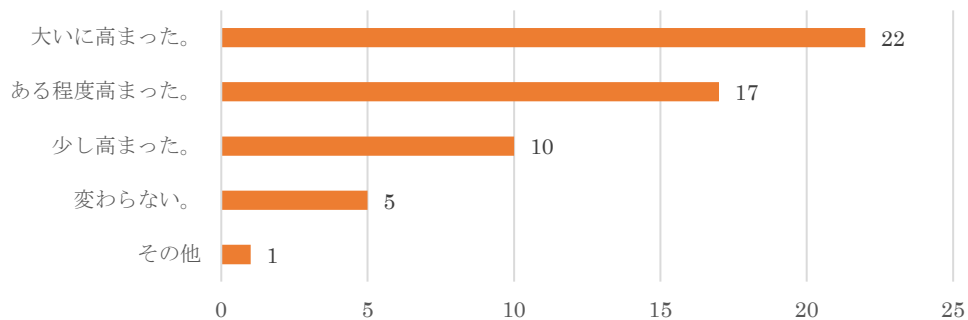
質問5 この共同授業を受講して、徳島県の産業的な強みや特徴についてどのように感じましたか？（1つを回答）



質問6 この共同授業を受講して、徳島県で働くOB,OGの話は将来を考える上で参考になりましたか？（1つを回答）



質問7 この共同授業の受講前と比較して、徳島県で働くことへの関心は高まりましたか？（1つを選択）



質問 7 この共同授業について特によかったところを記述してください。(抜粋)

実際に徳島で働いている人の様々な意見や見方を知ることができたところ。	富岡東高校・3年
実際に徳島で働いている人の具体的な話を聞くことができてよかった。今まで知らなかった徳島のことをたくさん知ることができた。	富岡東高校・3年
大学生の方と意見交換をできたことが新鮮でとてもよかったです。	富岡東高校・3年
これからの働き方や人生について考えることができてよかった。	城北高校・1年
徳島大学からの質問だけではなく、四国大学、文理大学からの質問も聞けてよかった。	城北高校・3年
高校等、今までにも徳島についての講演を聴かせていただくことがあったが、それよりも深く内容を知ることができ、全体的によかった。	城北高校・1年
実際に働いている方々のお話がリアルに聞けて、現実味がありました。	城北高校・1年
徳島が抱えている問題を知ることができて、将来自分ができることを考えることができたところ。	城北高校・1年
OBOGの仕事へのしっかりとした取組姿勢が感じられた	徳島工業短期大学・職員

質問 8 この授業について改善してほしいところがあれば記述してください。(抜粋)

受配信の環境について	中継の画面の画質が荒く見えにくかった。
	通信の精度をもっと上げてほしい。
	ディスカッションのときに拝聴者の話し声が入ることがあった。ディスカッションのときにスライドが見えない。
講演、パネルディスカッションの内容について	企業側として、どのような学生を求めているのか、OBOGは就職したときから今までどんな苦労をしたか、あるいは目標としたか。
	質問するコーナーが少なかったので増やしてほしい。

8) 振り返りと今後の運営について

来年度以降の実施について、コンセプトは変えずに講義内容、講義の質、インフラ、連携等についてどのように改善をはかっていくべきかについて意見をとりまとめた。

	反省点	改善案	今後に向けての提案
講義内容	- 多くの学生は、パネルディスカッションの話だけを聞いて全体像を理解するのが難しく、せっかく聞いた話が流れていっているようだった。 - 受講者数が少ない中で、毎回同じテーマのグループワークを行っても議論が同じになり深まらない。	- 講演内容の概要をパネラーに配付し、その内容に沿って話すようにしてもらう。 - 講演内容とパネルディスカッションの内容をリンクさせる。 - グループワークの内容を毎回変える。 - 次年度以降、少しでも多く受講生が集まるよう、シラバスの開示と受講登録を3月中に行う。 - 講義のどんなポイントに注目して聞かかわかるような、資料や記入用紙等を配付する。	学外の成功者の講演だけではなく、基礎知識となる政策や制度、徳島の経済などの理論的な話を取り入れる。
インフラ	- 実施会場で音量の配慮。 - Ustream は、CMが入ったり、タイムラグがあったりして信頼性に乏しいと感じた。 - 講義中に動画を使われると、サテライト会場では全く見えない。 - 準備の進め方について、映像や音声が一定時間止まったこと、またこれについてのフォローアップが十分でなかったこと。	- 安く、速度が保証されるネットワーク環境を調査する。 - ポリコムやスカイプなどの対応策を講じるとともに、複数回線を使用できるように環境を整える。 - バックアップへの切り替え。 - 事前に動画ファイルの再生のタイミングを打ち合わせる。 - 全ての映像について、他会場の受講生向けに、後日、ネット上で受講できるようにする。	- インフラの使用に慣れておく。 - 本番と同程度のテスト（全拠点・配信時間）を遅くとも1か月半前に実施し、設備制約上の課題等を洗い出し、メインでの配信方法のトラブル発生時を想定した、サブの配信方法への切り替えルールを決め（何分停止した場合など）、作業のリハーサル、その際に想定される拠点での動きやルールを設定しておく。
その他	8月のお盆明けの実施は、夏期休業中のど真ん中に当たるため帰省中の学生が多く受講生が少ない。 - 折角の共同授業も各校に分かれて行ってはあまり意味が無いように思う。	8月上旬か下旬もしくは9月上旬に実施する。 - 初日の徳島大学に集まったようにもう少し共同で行う機会を増やす。	- 徳島市内の学生を徳島大学（もしくは四国大学・徳島文理大学）に集め、サテライト会場を県南部や県西部におき、そうした地域の出身学生や高校生・一般の方もサテライト会場から受講できるようにする。 - 授業外学修の時間の確保。

9) 共同授業の様子



特別講演を行う飯泉徳島県知事



講演を行う田村耕一氏



パネルディスカッションの様子



メイン会場の様子



サテライト会場の様子



グループワークの様子

(参考) 平成 30 年度コンソーシアム開講科目シラバス (徳島大学版)

【曜日・日時】	夏休み集中講義(平成 30 年 8 月 20 日～23 日)
【授業題目名】	「徳島の魅力、徳島で働く」
【授業の目的】	徳島県の産業面から見た将来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深める。
【授業の概要】	徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のOB・OGを講師に迎えて、経験の中から生まれた確信や考え方を語ってもらうと共に、大学生間交流を図りながらのディスカッションやワークショップを通じ、グループで主体的に考え、最終日には見解と提案を行う。
【キーワード】	徳島県 将来ビジョン やりがい 暮らし グループワーク アクティブリスニング
【到達目標】	①徳島の地域文化を理解し、徳島における暮らしの魅力を説明することができる ②徳島の成長力がある産業を理解し、大学での自分の学びとつなげて考えることができる
【授業の計画】	
8/20(月) [午前 (9:30～12:30)]	導入 (会場：徳島大学創成スタジオ(仮設定)) 第1回：授業の構成と講演テーマの紹介 第2回：「徳島県の将来ビジョン」
[午後 (13:30～16:30)]	(会場：徳島大学創成スタジオ(仮設定)) 第3回：徳島の未来を語る①：「徳島県の強みと成長産業」 第4回：徳島で働く①：「徳島県の雇用と徳島で活躍できる人材」
8/21(火) [午前 (9:30～12:30)]	(サテライト講師 (遠隔地参加)) 第5回：徳島の未来を語る②：「地域づくり・観光・ICT 産業の仕事」 第6回：徳島で働く②：「地域づくりと観光産業」
[午後 (13:30～16:30)]	(サテライト講師 (遠隔地参加)) 第7回：徳島の未来を語る③：「地域医療と福祉の仕事」 第8回：徳島で働く③：「地域医療と福祉の仕事」
8/22(水) [午前 (9:30～12:30)]	(サテライト講師 (遠隔地参加)) 第9回：徳島の未来を語る④：「次世代技術関連産業の展望」 第10回：徳島で働く④：「次世代技術関連産業の展望」
[午後 (13:30～16:30)]	(サテライト講師 (遠隔地参加)) 第11回：徳島の未来を語る⑤：「6次産業化の取り組みと農林水産業の展望」 第12回：徳島で働く⑤：「6次産業化分野の取り組みと農林水産業の展望」
8/23(木) [午前 (9:30～12:30)]	第13回：総括、グループワーク 第14回：総括、グループワーク
[午後 (13:30～15:00)]	総括 (サテライト審査員) 第15回：総括、グループワーク
【教科書・参考書】	『徳島が好きになる本(徳島経済研究所著書)』
【成績評価方法・基準】	各回講義の終わりに実施するグループワークと最終日の報告・発表で評価する。
【再試験】	なし
【参考】	グループワークの進め方について ①全ての参加学生は1カ所(仮設定：創成スタジオ)に集まり、スクール形式で講演を聴く。 ②グループワークの際には、机の前後を寄せ、1つの島とする。 ③最終日に向けたプレゼンテーマは選択式とする。 例1；徳島の魅力を伝える 例2；将来、4つの分野のうち、どの分野で何をしたいかについて発表する ④最終日の発表形式は、A3用紙にキーワードを記載し行う「ポスターセッション形式」とする。

平成 29 年度「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～」の開催について

県内大学、高専の学生と保護者及び県内大学への進学を希望する高校生を対象に、県内企業の魅力やビジョン、また、徳島県で働くこと、暮らすことの意義について周知を図り、県内での定着率の増加につなげることを趣旨・目的とし、ガイダンスを実施した。徳島の成長・課題分野と関連企業についての紹介、県内企業の今後の経営戦略に基づく『人材活用』『人材登用』における取り組みなどの情報提供を対象者に対して行い、今後成長が期待できる企業や業界の人材ニーズについて学生・保護者の理解を広げた。

(1) 企画名

「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～」

(2) 日時

平成 29 年 12 月 16 日（土）13:00～16:30

(3) 会場

徳島大学常三島キャンパス理工学部内 共通講義棟 6 階創成学習スタジオほか

(4) 内容

13:00 : 開会挨拶（吉田和文徳島大学理事）

13:05-13:10 : 趣旨説明（山中英生副理事）

13:10-13:40 : 基調講演『データから見る徳島の未来』竹中淳二氏（(公社)徳島経済研究所理事・事務局長）

13:45-14:15 : トークセッション『徳島の魅力』

パネリスト；

片倉悠暉（工学部 4 年・(一社)徳島新聞社インターンシップ 1 期生）

納多里奈（総合科学部 4 年・大塚テクノ(株) インターンシップ 1 期生）

河野俊哉（工学部 3 年・(有)榎山農園インターンシップ 2 期生）

ファシリテーター；

安井朗洋（大学院・栄養生命科学教育部人間栄養科学専攻）

14:15-14:20 : レビュー（松重和美四国大学長）

14:20-15:00 : メインプログラム『4 分野関連企業の経営戦略やビジョン、人事戦略等の紹介』

①次世代技術関連分野；藤村実氏（日産サティオ徳島グループ代表）

②地域医療・福祉関連分野；中村晃子氏（健祥会グループ本部長）

③6 次産業化関連分野；市岡通裕氏（市岡製菓(株)代表取締役社長）

④地域づくり/観光/ICT 関連分野；植田佳宏氏（祖谷溪温泉観光(株)代表取締役社長）

15:10-15:55 : 個別企業相談会（19 社）

①次世代技術関連分野；

大塚テクノ(株)、藤崎電機(株)、港産業(株)、中道鉄工(株)、(株)NDK

②地域医療/福祉関連分野；

健祥会グループ、(株)テレコメディア、(株)シケン、(NPO) どりーまあサービス、(医)平成博愛会博愛記念病院

③6 次産業化関連分野；

(有)榎山農園、(有)竹内園芸、海部次世代園芸産地創成協議会、市岡製菓(株)

④地域づくり/観光/ICT 関連分野；

(株)ネオビエント、(株)QLIP、(株)ダンクソフト、海底少年



トークセッションの様子



会場の様子



メインプログラムの様子（植田佳宏氏）



個別企業相談会の様子（(株)ネオビエント）

（５）来訪者数

238 人（学生 117 人、保護者 29 人、関係者 41 人、出展者 39 人、登壇者 12 人）

【参考】平成 28 年度来訪者数 120 人（学生 45 人、保護者 26 人、関係者 31 人、出展者 18 人）

①学校別参加者数

	徳島大	四国大	徳島文理大	阿南高専	徳島工短	高校	計
学生	96	2	9	3	1	6	117
保護者	23	1	0	2	0	3	29
計	119	3	9	5	1	9	146

②学部別参加者数（徳島大学のみ）

	総合科学	医	歯	薬	理工（工）	生物資源	大学院	不明	計
学生	24	1	0	7	20	42	2	0	96
保護者	6	0	0	0	11	1	4	1	23
計	35	1	0	7	43	46	12	1	119

③学年別参加者数

	高 2	高 3	高専 2	高専 4	学部 1	学部 2	学部 3	学部 4	院 1	院 2	計
学生	5	1	0	4	53	14	50	2	4	2	117
保護者	1	2	1	3	12	3	11	2	4	2	29
計	6	3	1	7	45	17	61	4	8	4	146

(6) アンケート回答の抜粋(有効回答数: 学生 89 人、保護者 14 人)

① 徳島県内の企業への就職についてどの程度関心がありますか。(一つ)

		学生	保護者
①	本ガイダンスの参加以前より、徳島県内へ就職を考えていた。	22 人	5 人
②	本ガイダンスの参加以前より、就職先として選択肢に考えていた。	26 人	5 人
③	本ガイダンスに参加して、就職先として選択肢に考えるようになった。	13 人	1 人
④	就職先としてはあまり考えていない。	10 人	1 人

② どのような目的で本ガイダンスに参加されましたか。(複数可)

		学生	保護者
①	県内企業の情報が欲しかった。	48 人	10 人
②	県内企業の強みや可能性を知りたかった。	29 人	5 人
③	県内企業に就職するための具体的なアドバイスが欲しかった。	14 人	3 人
④	就職先に迷っており、選択肢を増やしたかった。	25 人	3 人
⑤	その他	12 人	1 人

③ 質問②で回答された目的について期待されていた情報は得られましたか。(一つ)

		学生	保護者
①	期待通りの情報が得られて満足している。	42 人	5 人
②	期待していた情報は得られたが、不十分である。	12 人	2 人
③	期待していた情報は得られなかったが、本ガイダンスには満足している。	19 人	3 人
④	期待していた情報は得られず、不満である。	4 人	0 人

④ このようなプログラムを実施するに際して、どの時期が適切ですか。(一つ)

		学生	保護者
①	適切である。	56 人	8 人
②	もっと早く実施して欲しい(7 月、8 月、9 月頃)	8 人	3 人
③	もう少し早く実施して欲しい(10 月、11 月頃)	21 人	3 人
④	もう少し遅く実施して欲しい(1 月、2 月頃)	1 人	0 人

⑤ 自由記述

【基調講演】

良かった点

- ・全国と徳島を比較して、徳島の強み、弱みを明確に示した情報を得られたことが良かった。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1 年)

改善してほしい点

- ・「徳島の未来」が最終的にどのようなものになるのか、まとめのようなものが最後にあったらより分かりやすかったです。(学生/徳島大学生総合科学部人間文化学科/3 年)

【トークセッション】

良かった点

- ・自分たちと同じような立場から話していただいたので、インターンシップを経験してからの考えの変わり方が理解しやすく、よかった。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1 年)
- ・想像以上によかった。(保護者/徳島大学工学部化学応用工学科 3 年)

改善してほしい点

- ・それぞれのインターンシップ先でどのようなことをしたのか、もっと具体的に聞いてみたいと思った。(学生/総合科学部社会総合科学科/1 年)
- ・大学生の新しい情報などが聞けるので、質問できる時間などを設けた方がいいと思った。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1 年)

【メインプログラム】

良かった点

- ・さまざまな分野で、徳島の魅力や徳島で働くことの魅力がそれぞれあって、改めて故郷徳島を大切にしたいと思った。(学生/徳島大学薬学部共通学科/1年)
- ・徳島の重要産業それぞれが抱える思考や目標、課題などを分かりやすく学ぶことができた。徳島の企業のパワフルさを知ることができた。(学生/徳島大学総合科学部社会創生学科/3年)
- ・新しいものが必ずしも東京から出てくるという訳ではないということを改めて認識することができた。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1年)

改善してほしい点

- ・もう少し時間を長くとっても良いので、多くのことを聞きたかった。手短に展開しすぎて、よく分からない部分があった。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1年)
- ・メインプログラムとしては物足りないように感じた。せっかくの社長さんや代表の方のお話を聴ける機会であり、これを楽しみに参加したので少し残念だった。(学生/徳島大学生総合科学部人間文化学科/3年)

【個別企業相談会】

良かった点

- ・榎山農園の話聞き、自分が今まで農業についてよく知らなかったことを思い知った。農業の仕組みや、育て方、経営方法まで知ることができ、さらに関心が強まった。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1年)

改善してほしい点

- ・もう少し長く話を聞きたかった。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1年)
- ・抽象的な話が多いように感じた。(学生/徳島大学生物資源産業学部/1年)

【プログラム全体について】

良かった点

- ・次のプログラムへ移るとき、スムーズで良かった。長いガイダンスだったが、待つ疲れは全然なかった。(学生/徳島大学生総合科学部人間文化学科/3年)
- ・就職だけではなく、自分の未来について考えるいい機会になりました。(学生/徳島大学生総合科学部人間文化学科/3年)

改善してほしい点

- ・「徳島ならではの」という情報を得られるというガイダンスであるというアナウンスを聞いて参加したので、少し思っていたものとは違った。全体の構成のバランスが違えば満足できたと思う。(学生/徳島大学生総合科学部人間文化学科/3年)

(7) 総評

【基調講演】

データベースで徳島を知ることができたという点で満足度が高かった。一方『徳島の未来』が最終的にどのようなものになるのか、まとめのようなものが最後にあったらより分かりやすかったです。」や「これから人口がどんどん減ることで、総生産はより減ることになる。そこを現段階でどう対応する予定なのか、話して欲しかった。」といった意見に見られるように、徳島の現状を踏まえた今後の展望についての解説を望む意見が見られた。プログラム後半にその答えがあるように構成されているので、プログラムの繋ぎについて考慮する必要がある。

【トークセッション】

学生にとっては、三者三様の価値観に触れ、自身の将来に向けた行動を検討するにあたり良い機会となったようだった。また、保護者、関係者、出展者にとっては学生のインターンシップにおける実績と彼らの職業観についてそれぞれの立場で解釈できる余地のあるものとなった。

【メインプログラム】

満足度は高く、「時間が足りない、もっと聞きたい」という意見が多数あった。

【個別企業相談会】

総じて「もっと話したかった」という意見であった。また、運営面については、メインプログラムから個別企業相談会への会場誘導について課題が残った。

【プログラム全体について】

概ね高評価であった。

【来年度実施に向けた検討事項】

検討事項として、情報提供の内容設定が挙げられる。今年度の本ガイダンスは、高等教育機関の学生とその保護者及び県内大学や県内企業への進学を希望する高校生を対象に、県内企業の魅力やビジョン、また徳島県で働くこと、暮らすことの意義について周知を図り、県内での定着率の増加につなげることを趣旨、目的として実施した。その手段として、徳島の成長・課題分野と関連企業についての紹介や、県内企業の今後の経営戦略に基づく「人材活用」「人材登用」における取り組みなどの情報提供を行い、今後成長が期待できる企業や業界の人材ニーズについて取り上げた。

また、事後アンケートで「本ガイダンスに参加して、就職先として選択肢に考えるようになった」と回答した学生が 13 名いたように、当初県外就職を考えている学生に対しても、県内就職を選択肢として加える動機付けになるという点の有効性が確認できた。このため、十分な情報を持たないまま県外就職に意識が向いている学生の参加を促すことが重要と考えられる。しかしながら「徳島で働くためのガイダンス」という名称では、こうした学生への勧誘が難しい点が見られたことから、来年度以降、広報や提示方法について検討が必要と考えられる。

平成 29 年度 FD 地域人材育成フェスタの開催について

COC+事業の一環として、インターンシップなど、事業において進める連携団体との協働の課題とノウハウを共有するための FD 地域人材育成フェスタを、3 月 3 日に徳島グランヴィリオホテルにて開催した。その詳細について報告する。

(1) 実施の目的

今年度の COC+事業での取組を振り返り、そこにおける成果や課題を「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」に参加する高等教育機関、行政、民間企業、経済団体、NPO 等、地域全体で確認・共有するとともに、今後の事業の進め方や県内就職率向上に向けた取組について協議する。また、インターンシップ事業の受入側におけるメリットを地域のより多くの企業等に伝え、インターンシップの受入団体や協議会への参加団体の増加につなげる。

(2) 参加人数

事業参加校教職員	: 68 名
県内企業、団体等	: 13 名
徳島県関係者	: 16 名
行政機関職員	: 1 名
学生	: 10 名
計	: 108 名

(3) プログラム概要

【第一部】記念講演

株式会社電脳交通の近藤洋祐社長より、「創業期を支えた学生とそこに求めた人物像・もたらした効果等について」というテーマで、ご講演頂いた。

【第二部】平成 29 年度の COC+事業成果報告

今年度の COC+事業での成果報告として、四国大学が実施している「創業支援事業」、徳島大学が実施している「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」について、取り組みや課題について報告した。

報告①：創業支援事業の取り組み（四国大学）

報告②：実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み（徳島大学）

報告③：参加校協働事業の取り組み（割愛）

【第三部】ワークショップ

地域人材の育成及び確保をはかるために、産官学での連携を強化にむけて話し合うワークショップを行った。なお、導入部分では玉推進監により、「地方創生産学官コンソーシアムとくしま（仮称）構想」についてお話を頂いた。

① 導入 : 「地方創生産学官コンソーシアムとくしま（仮称）構想」について（玉推進監）

② ワークショップ : 産官学がステイクホルダーとして参画するのに、何の障害・問題が起こっているのか

【第四部】情報交換会

参加教員、行政機関の職員、参加企業・団体の間で情報交換を行った。

(4) 事例報告の概要

【第一部】記念講演

講演者：近藤洋祐（株式会社電脳交通）

- ・ 株式会社電脳交通の事業概要や内容、事業の将来展望をお話し頂いた。
- ・ 電脳交通の創業期に、インターンシップ生として受入れて頂いた徳島大学の学生が、会社にも与えた影響や効果等について、当時の写真を交えてお話し頂いた。

【第二部】平成29年度のCOC+事業成果報告

報告①「創業支援事業の取り組み」（四国大学）

報告者：（代理登壇）岩野瑞紀（里見和彦（四国大学創業支援クリエイター））

- ・ 四国大学がCOC+事業で実施している創業支援事業「社長のかばんもち」「とくしまサイコー塾」「チャレンジショップ」「ビジネスプラン道場」について、事業内容及び成果の報告を行った。
- ・ 「ビジネスプラン道場」については、グランプリ&オーディエンス賞を受賞した徳島文理大学の1年生グループから、受賞案について成果発表を行った。
- ・ 「社長のかばんもち」についても、修了学生が体験内容や、新しい事業案の提案を行った。

報告②「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」（徳島大学）

報告者：宮本紀子（徳島大学COC+推進コーディネーター）

- ・ 徳島大学が導入を進めているプロジェクト型のインターンシップ（寺子屋式インターンシップ）について、趣旨及び平成28年度からの変更点、平成29年度の取り組み内容について報告を行った。
- ・ インターンシップに取り組んだ受入れ企業様から2名、学生のから3名、学内メンター（ドン）の1名から、パネルディスカッション形式で、インターンシップの成果及び、取り組みを終えての想いについて発表を行った。

報告③「参加校協働事業の取り組み」について

報告者：川崎克寛（徳島大学COC+推進コーディネーター）

- ・ 本フェスタでの報告は割愛した

【第三部】ワークショップ

導入：「地方創生産学官コンソーシアムとくしま（仮称）構想」について

報告者：玉 真之介（徳島大学COC+推進監）

- ・ 地域と大学が果たすべき、新しい連携や協力について発表を行った。
- ・ 平成30年度を目処に、「とくしま元気印イノベーション人材育成協議会」を母体とした、コンソーシアム設立の意義と今後の展望について、発表を行った。
- ・ 直後に行われるワークショップのテーマ発表を、最後に行った。

ワークショップ：産・官・学が地域人材の育成及び確保をするための連携について

- ・ はじめに自己紹介と、徳島の好きなところ（よいところ）を1つ紹介して頂いた。
- ・ 次に、下記3点について意見交換を行った。
 - ①大学生の元気を地域の力にする方法
 - ②地域人材の育成と確保に向けた地域・企業の参画の方法
 - ③地方創生に向けた産官学の組織連携（コンソーシアム）を作るのに、何が重要か

ワークショップで出た意見について、抜粋したものを下記に記載する。

①大学生の元気を地域の力にする方法

- ・実践力養成型（寺子屋式）インターンシップのモデルがこの答えではないか。
- ・就職先はあるが学生とのマッチングの機会がないため活かすことができない。ここに重きを置くべきである。
- ・インターンシップを受入れる企業の意識が低いことが問題。
- ・大学院生を一度外に出すことが重要。
- ・指導教員に関係する企業に、全員必修のインターンシップとして行かせる。
- ・チャレンジをさせてあげる。機会創出する。
- ・学生が言いたいことを、言える場所づくりが重要。
- ・産官学の連携を、学生から経験するべき。
- ・世の中で起こっている問題を見せてあげる。
- ・サテライトオフィスの活用

②地域人材の育成と確保に向けた地域・企業の参画の方法

- ・6次化だけでなく、食物を育てる力を育むべき。
- ・インターンをもっと長い期間にして、推薦のような形にする。
- ・インターネットの情報だけではなく、実際に社員が出向いて人と関わるのが重要。
- ・徳島（地方）での暮らしの魅力を伝える。
- ・学生の視点とのマッチングの場が必要である。
- ・マッチングの調整を誰がするのかを明確にする必要がある。
- ・インターンシップをもう少し長期化し、推薦のような制度は取れないか。
- ・零細企業は人手不足に陥っている。そこに働きかけるのはどうか。

③地方創生に向けた産官学の組織連携（コンソーシアム）を作るのに、何が重要か

- ・現行の大学カリキュラムでは難しい。学部が複雑になるとさらに難しくなる。
- ・県庁でも教育の余裕がなく、研修はOJTとなってしまう。
- ・小・中・高校を巻き込むことが必要。
- ・全国的に連携が上手くいっているところは、お互いが本音をぶつけている。
- ・連携には目的意識をはっきりと持ち、機関を決めてやるべき。コンソーシアムは鮮度が重要。
- ・世の中に必要なものを連携して、世に出す必要がある。

(5) アンケート回答の取りまとめ

【第一部：記念講演の感想】

- ・ベンチャービジネスの進展と学生の参入、習熟が並走型で進展したことが面白かった。（徳島県職員）
- ・ブレイクスルーには学生の力は大きな推進力になる可能性を秘めているのではないか。（徳島県職員）
- ・若い人材が実際にどのように活かされているか、現場の話が聴けて大変興味深く思いました。（徳島大学教員）
- ・大学は学生に平等な教育をしなければならない。「君は向いていない」と切り捨てることもできず、過保護すぎる教育をしている。それが学生の甘えに繋がっているのではないかと思った。（徳島大学教員）
- ・学生が発揮する能力は予想以上に大きいと感じた。そのような能力を発揮させるべく、いかに仕向けるべきか考えさせられた（徳島大学教員）
- ・業界を越えた地方が抱える課題に対して、近藤社長ご自身が個人的にできる事もお聞きしたかったです。（参加企業）

【第二部：COC+事業成果報告についての感想】

報告① 「創業支援事業の取り組み」について

- ・ 発想的には良いと思ったが、短い事業実施期間で成果は難しいのでは無いかと思った。(徳島県職員)
- ・ 学生自身がビジネスプランを考えることが重要。社長のかばんもちが貴重な体験になるのでは。(徳島県職員)
- ・ 学生らしさ、学生のフレッシュさがよく出ていた。(四国大学教員)
- ・ 1年生からこのような体験をすることは学びが大きいと思います。学生自身がビフォーアフターをどう捉えているのかを、おききしたいと思いました。(行政機関職員)
- ・ 学生がかなり真剣に取り組んでいることが分かった。このように仕向ける方法は、どのようにすれば良いかと想像をめぐらせた。(徳島大学教員)

報告②「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」について

- ・ インターンシップとイノベーション人材育成の目的で、整合性が自分の中で最後までつかなかった。(徳島県職員)
- ・ 私の時代にあれば・・・。(徳島県職員)
- ・ 企業・教員が大変大勢苦勞しているが、学生にはよい学びになっている。(四国大学職員)
- ・ 学生と社会人の意識のギャップを埋める作業（指導）はインターンに限った話ではなく、普段から普通に必要です。これが「普通」のこととなるにはどうしたら良いのかと思った。(徳島大学職員)
- ・ 学生がパネラーとして参加されても、十分に情報が引き出されていて、とても新鮮なイベントでした。学生に効果が出ている現れですね。(行政機関職員)
- ・ 大学メンター（ドン）と企業側担当者によって、一方向のみではない相互の意見を踏まえたインターンシップができることを実感した。(徳島大学教員)

【第三部：ワークショップについての感想】

- ・ 少し時間が短かったです。もう少し議論したかったと考えます。(参加企業)
- ・ 有意義な時間であった。参加した感を味わえました。(徳島大学職員)
- ・ 県庁の方や、農家の方と話す事ができ、良い経験となった。いろんな立場の人の意見をもっと交換できる機会を増やした方が良いのではないかと思います。(徳島大学教員)
- ・ 他分野の方がいかに苦勞しているのか分かった。他分野の現状が分かった。(四国大学教員)
- ・ 徳島から学生が出ていくのを避ける。そのために地方をアピールしなければならない。(徳島大学教員)

(6) 広報リーフレット

平成29年度 COC+事業

FD地域人材育成フェスタ



地(知)の拠点

文部科学省COC+事業 とくしま元気印イノベーション人材育成プログラム

当日プログラム

開会挨拶
第1部 記念講演
第2部 平成29年度の成果報告
第3部 ワークショップ
閉会挨拶
情報交換会

日時

平成30年 **3月3日(土)**
13:00-17:00
(情報交換会17:30-19:00)

場所

徳島グランヴィリオホテル
1階【グランヴィリオホール】
徳島市万代町3-5-1

記念講演講師



近藤 洋祐氏(株式会社電腦交通代表取締役)

平成24年より吉野川タクシー代表。衰退が続く地方交通業界において、「会員制妊婦送迎サービス」や「ライドシェア(相乗り)サービス」など革新的なサービスを通じて会社を再建させる。

平成27年、「クラウド型タクシー配車システム」を開発し、遠隔地のタクシー配車業務を行う株式会社電腦交通を設立。平成29年1月現在、全国6地域のタクシー配車を行っている。

「第1回とくしま創生アワードグランプリ受賞」「総務省起業家万博 協賛企業特別賞 受賞」



主 催：とくしま元気印イノベーション人材育成協議会
共 催：徳島大学FD委員会 ※このイベントは全学対象のFDを兼ねています。

(7) 会場の様子



開会挨拶をする野地学長



【第一部】記念講演を行う近藤社長



【第二部】ビジネスプラン道場の取組報告の様子



【第二部】パネルディスカッションの様子



【第三部】ワークショップの様子



閉会挨拶をする吉田理事



とくしま元気印 イノベーション 人材育成プログラム ニュースレター

Vol.2
2017.5

CONTENTS

- COC+平成 28 年度の取組、総括／特筆すべき成果
- 【徳島大学】実践力養成型インターンシップの報告
- 【四国大学・四国大学短期大学部】創業支援事業の報告
- 【協働事業】保護者＋学生向け企業ガイダンスの報告
- 【協働事業】FD 地域人材育成フェスタの報告
- 平成 29 年度の計画／今後の予定



【徳島大学】インターンシップフェアの様子

平成 28 年度の取組と総括 徳島大学 COC プラス事業推進監 玉真之介

【平成 28 年度の取組と総括】

5 年間の COC+事業の 2 年目となる平成 28 年度は、各種取り組みの試行を行いました。徳島大学では教育プログラムの開発として、①入学者全員への地域理解のための教育科目の提供、②徳島の未来を創造する 4 分野に沿った専門教育プログラムの編成、③地域の企業や団体と連携して開発するインターンシップの試行を実施しました。

参加校の協働事業では、共同授業の試行となる特別セミナー、保護者＋学生向け企業ガイダンス、FD 地域人材育成フェスタを実施し、平成 29 年度からの本格実施に向けて中核となる高等教育機関の連携体制とともに、地元企業等と大学の新しい連携の土台を構築しました。

【特筆すべき成果】

共同授業に向けた特別セミナー、保護者＋学生向け企業ガイダンス、FD 地域人材育成フェスタと、協働事業の柱となる 3 つのプログラムの試行を終え、事業の本格実施に向けた課題について参加校の間で共有しました。

平成 29 年度はこれらの成果を踏まえて、連携を一層強化してプログラムを実施して参ります。また、徳島大学では平成 28 年度中に教育プログラムの編成を終え、平成 29 年度からは寺子屋式指導法を取り入れた「実践力養成型インターンシップ」を正課科目（教養教育の授業科目）として開講しました。

事業推進コーディネーターの紹介

宮本紀子推進サブ・コーディネーター（徳島大学）

平成 29 年 1 月に着任しました。大学・企業・学生との関係を構築するコーディネート業務を行い、徳島大学における寺子屋式インターンシップの導入と定着に向けた取組を行っています。



吉田寛夫創業支援クリエイター（四国大学）

平成 29 年 5 月に着任しました。中小企業の経営コンサルティングと大学連携型起業化支援施設のインキュベーションマネージャーの経験を活かし、大学から地域経済を変えていく様々な仕掛けづくりに取組みます。



【徳島大学】実践力養成型インターンシップの取組

徳島大学では、教育カリキュラム改革の1つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めています。

【寺子屋式インターンシップとは】

受入団体側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を取り入れた少人数制の課題解決型インターンシップです。

【実施内容】

寺子屋式インターンシップの試行として「実践力養成型インターンシップ」を実施しました。期間は約半年間（うちインターンシップでの活動時間 30 日間程度）であり、県内 7 つの受入団体で 35 名の学生がプロジェクトに取り組みました。

- ①学生向け事前学習(7月)、受入団体向け事前講習(7月)
- ②中間報告会(10月)：目標達成に向けた課題整理、意識共有を図る。
- ③最終報告会(1月)：インターンシップの取り組み内容、成果、学びを報告する。
- ④学生向け振り返り会(2月)、受入団体・次年度受入候補団体向け振り返り会(3月)

【成果】

受入団体での活動の他に、団体・学生双方に対する事前学習や事後の振り返りプログラムなどを実施し、全体を通じてインターンシップの学習効果を高める工夫を検討しました。さらに、試行を通して教員のインターンシップ教育への関わり方を学内で協議し、教員がドン（学内メンター）として関わるインターンシップの体制を整えました。このような成果をもとに、平成 29 年度から教養教育の正課科目として、「実践力養成型インターンシップⅠ」「実践力養成型インターンシップⅡ」を開講しました。



最終報告会の様子



学生向け振り返り会の様子



受入団体向け振り返り会の様子

【四国大学】創業支援事業の報告

四国大学では、地域の高等教育機関と地元企業が連携して、「仕事を創り出すチャレンジ精神」を育てる 3 つのプログラムを創業支援として実施しています。

【ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」】

毎月第 2 木曜日の夜に定例会を開催し、地元の 2 名の起業家にお越しいただき、「働くとは?」「なんのために働くのか?」「学生時代に学んでおくべきことは?」などを学生たちへのメッセージとしていただき、その後、学生同士のグループワークを通じて、多様な考え方の気づきを共有しました。平成 28 年度は、延べ 249 名が参加しました。

【とくしま学生ビジネスプラン道場】

夢（やりたいこと）をカタチにして、想いを伝えるプレゼンテーションを学ぶ場として、平成 28 年度は 82 チーム（169 名）の応募から最終 8 チームが最終プレゼンに挑みました。

【社長のかばんもち】

将来起業家を目指すなら起業家の一番そばで社長の仕事ぶりを感じるのが良いとの考えから、社長の秘書として社長のサポートをするプログラムです。また、社長のかばんもち終了後より 1~2 ヶ月後には報告会を開催し、社長（会社）へ学生が提案を行います。平成 28 年度は、延べ 7 社 10 名が参加しました。

今後は、更に挑戦したいという学生に向けてのチャレンジショップ事業や、地元の企業の課題をヒアリングして課題を解決するプログラムなどを行っていくことで、やる気のある学生と地元企業を繋ぎ、チャレンジ精神の育成を支援していきます。



とくしまサイコー塾の様子



とくしま
ビジネスプラン道場の様子



社長のかばんもちの様子

【協働事業】保護者＋学生向け企業ガイダンスの実施報告

平成 28 年 12 月 18 日に保護者＋学生向け企業ガイダンス「徳島の魅力、徳島で働く～企業ガイダンス編」を開催しました。本ガイダンスは、県内大学、高専の学生・保護者を対象に、県内企業の魅力や将来ビジョン、また、徳島県で働く・暮らすことについて周知を図り、県内就職の増加につなげることを目的としています。特に、保護者に向けて企業名や規模ではなく、業務内容やワークスタイル等の様々な観点から就職先を選ぶ視点を含めて、徳島の企業の魅力を伝達しました。来訪者数は 120 人（学生 45 人、保護者 26 人、関係者 31 人、出展者 18 人）、アンケートにおける参加者満足度も高いものとなりました。

【実施内容】

【第一部】パネルディスカッション（30 分）

『インターンシップ生が語る企業の見方調べ方』

【第二部】基調講演（30 分）

『データから見る徳島の企業の強み』

【第三部】企業講演（60 分）

『実は〇〇！徳島の企業の意外な魅力』

- ①「最先端の仕事と田舎暮らしは両立できる」（株）プラトイーズ
- ②「次世代技術関連企業では多様な人材が活躍している」（株）大塚テクノ
- ③「農業は総合力が求められるベンチャー企業！」（有）樫山農園
- ④「地域包括ケアシステムにおける多様な薬剤師の役割」（株）グローバル・アシスト

【第四部】個別企業相談会（60 分）

【会場の様子】



【協働事業】FD 地域人材育成フェスタの実施報告

平成 29 年 2 月 18 日に、COC＋事業の成果と教訓を共有する「FD 地域人材フェスタ」を開催しました（90 名が参加）。参加校や他校の教職員、連携機関やインターンシップ受入先・候補先企業の経営幹部層に会場いただき、COC＋事業で参加校が実施している実践力養成型インターンシップ、創業支援、フィールド教育など、大学が地域の企業や住民と連携して取り組む人材育成の実践について報告し、地域連携における課題、工夫やノウハウを、教職員及び連携団体担当者等、ステークホルダーの間で共有しました。さらに、地域教育を受け入れていただくための意義とノウハウを広く共有するため、連携教育を地域が受け入れるメリットの視点を交えつつ、受入団体から取り組みのご報告をいただきました。

【実施内容】

【第一部】インターンシップ教育の成果と定着に向けた課題

COC＋事業の趣旨説明及び、事業の一環として徳島大学が実施している「実践力養成型インターンシップ」、四国大学が実施している「創業支援事業」について、取り組み、課題、プログラムを受講した学生の体験談を紹介しました。

- ① COC＋事業の趣旨と取り組みの概説（10 分）
- ② 「創業支援事業の取り組み」（四国大学）（30 分）
- ③ 「実践力養成型インターンシップ」（徳島大学）（60 分）

【第二部】教育における地域との連携

COC＋事業参加校が、地域企業・団体との連携によって実現している教育について、教員及び連携先の担当者が登壇し、成果とノウハウを紹介しました。

- ① 「ボランティア・パスポートの取組」（徳島大学、徳島文理大学）
- ② 「地域企業と連携したプロジェクトマネジメント教育」（徳島大学）
- ③ 「県内企業・農家との連携による新規事業モデルの検討を通じたイノベーション教育の実践」（徳島大学）
- ④ 「食物栄養専攻における地域連携の取り組み」（四国大学短期大学部）

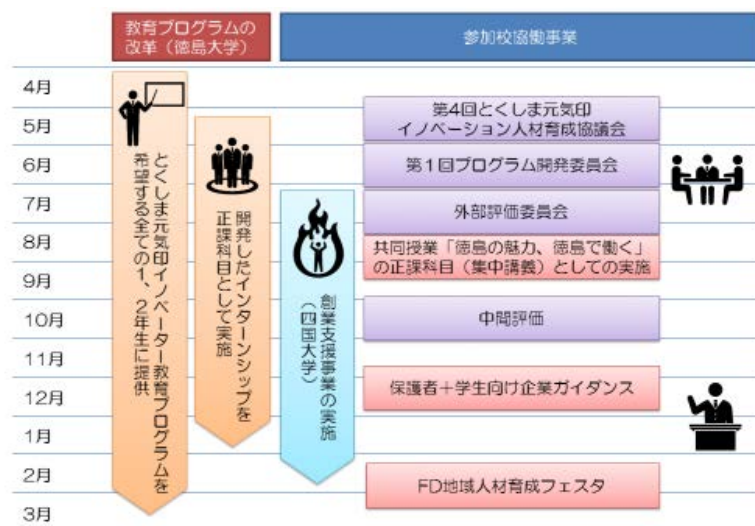
【第三部】情報交換会

参加教員及び参加企業・団体との間で情報交換を行いました。

【会場の様子】



平成 29 年度の計画



平成29年度は、平成28年度で試行的に実施した各種取り組みを本格的に実施していきます。

徳島大学においては、全ての学部で「とくしま元気印イノベーション教育プログラム」の編成を終え、希望する全ての1、2年生が専門科目も含めて履修可能となります。さらに、開発したインターンシップの手法をもとに、正課科目「実践力養成型インターンシップ」として開講します。

参加校協働事業では、共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」を3つの大学の正課科目（集中講義）として開講します。また、保護者学生＋学生向け企業ガイダンスでは、参加校全体の参加者が得られるよう、連携を強化するなど、前年度の成果と課題を踏まえてより充実したプログラムを実施します。

今後予定の事業

【協働】共同授業（集中講義）「徳島の魅力、徳島で働く」（平成29年8月21日～24日）

徳島県の産業面から見た将来ビジョンと地元で働くやりがいや暮らしの楽しさ、メリットなどについて、地域の識者から学び、考え、話し合うことで、将来、就職先としての徳島県の魅力について理解を深めます。徳島県内の第一線で活躍するリーダーや県内高等教育機関のOB・OGを講師に迎え、サテライト配信講義として実施します。

【協働】保護者＋学生向け企業ガイダンス（平成29年12月実施予定）

県内大学、高専の学生、保護者を対象に、県内企業の魅力や将来ビジョン、徳島県で働く・暮らすことについて周知を図ります。また、企業名や規模ではなく、業務内容やワークスタイル等のさまざまな観点から就職先を選ぶという観点を含めて、徳島の企業の魅力を伝達します。

【四国大学】ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」定例会

毎回県内の経済団体から2名の起業家を講師として紹介し、講演と参加学生によるグループワークを行います。

第12回定例会：平成29年7月13日（於四国大学）

第13回定例会：平成29年10月12日（於徳島大学）

第14回定例会：平成29年11月9日（於徳島文理大学）

【四国大学】「社長のかばんもち」（随時）

これまで年2回の開催でしたが、県内企業からのご要望にお応えし、今年度より随時マッチングを行います。

【四国大学】「とくしま学生ビジネスプラン道場」キックオフセミナー（平成29年7月1日）

東工大発ベンチャーの起業家による講演の後、「事業計画のつくりかたセミナー」を行います。

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ（通年）

正課科目として目下施行中です。

事務局だより

今年度からは、いよいよ寺子屋式インターンシップが始動します。プログラムに臨む学生50名のサポート体制を組み、ドン（学内メンター）をはじめとした学内の先生方、受入団体様の協力を得ながら取組を実施していきます。

このニュースレターを読まれて興味を持たれた方は、ぜひお気軽に常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館3階の事務所にお越しください。お待ちしております。



徳島大学COCプラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）

徳島市南常三島町1丁目1番地（地域創生・国際交流会館3F）

電話：088-656-9885 FAX：088-656-9880

e-mail: coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp





とくしま元気印 イノベーション 人材育成プログラム ニュースレター

Vol.3
2017.12

CONTENTS

- ご挨拶／平成 29 年度の事業概要と中間評価の実施について
- 会議の報告
- 【四国大学】創業支援事業の取り組み
- 【徳島大学】実践力養成型インターンシップの取り組み
- 【協働】共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」
- 【協働】徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～
- 今後予定の事業



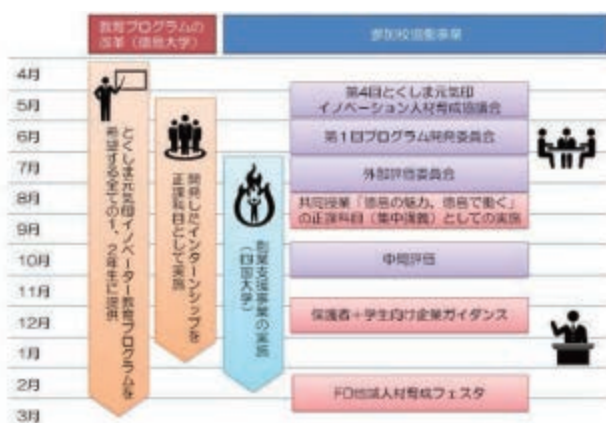
【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ中間報告会の様子

ご挨拶 徳島大学理事(地域・産官学連携担当)・副学長 吉田和文

「11 万 7868 人」。これは東京圏の 2016 年の転入超過数であり、地方創生を合い言葉に、国や地方公共団体が様々な取組みを始めてからも、国全体としてみると、地方から東京圏への人口流出は止まるどころか、むしろ加速しています。一方、徳島県の転出超過数は「1,385 人」と前年比で約 4 割減少しており、改善への明るい兆しが見え始めています。しかしながら、本県でも大学等への進学や就職を契機とした関西や東京圏への若者（15～24 歳）の流出が続いております。地方創生の中心となるのは「ひと」であり、徳島の未来を担う「若者」を育成する主役は徳島大学を始めとする県内高等教育機関であります。COC+事業を通じて県内就職率の向上を図るためには、産業界や行政と力を合わせ、若者にとって魅力ある就業機会を創出すると共に、若者が徳島への理解を深め、「自分の将来に対するビジョン」と「徳島で働き暮らすことのメリット」に確信を持つことが不可欠であります。本事業も 3 年目の折り返し地点を迎えており、関係各位の今後より一層のご尽力をお願い申し上げます。



平成 29 年度事業の概要／中間評価の実施について COC プラス推進監 玉真之介



県内就職率の向上を目指す COC+事業も 3 年目となりました。昨年度は事業の柱となる取組を試行的に実施しましたが、今年度は、それを踏まえて各種事業の本格実施に取り組んでいます。

平成 29 年 4 月には、徳島大学で構築した地域人材育成の教育プログラムを平成 28 年度及び平成 29 年度の入学者全員に案内しました。5 月からはインターンシップフェアに始まる今年度の「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」がスタートしました（3 頁参照）。また、四国大学が中心となる創業支援事業も昨年度に開始しました（2 頁参照）。本事業で今年度一番のメインイベントは、8 月のお盆明けに開講した 6 高等教育機関の共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の集中講義でした（4 頁参照）。冒頭には飯泉徳島県知事にも講師として登壇いただくと共に、産業界のリーダー等による講義と OB・OG によるパネルディスカッションを組み合わせた授業を、複数会場をネットで結んで実施しました。10 月には、本事業の中間評価が東京であり、野地徳島大学長ほか 5 名でプレゼンを行い、ヒアリングを受けました。結果はまだですが、現在の取組をしっかりと進めること、また、補助期間終了後にも継続できる体制を早めに構築することの助言を得ました。今年度の取組としては、「FD 地域人材育成フェスタ」（3 月 3 日）が予定されています。充実した内容になるように努めますので、引き続きご理解とご協力をお願いします。

県内就職率の向上を目指す COC+事業も 3 年目となりました。昨年度は事業の柱となる取組を試行的に実施しましたが、今年度は、それを踏まえて各種事業の本格実施に取り組んでいます。

平成 29 年 4 月には、徳島大学で構築した地域人材育成の教育プログラムを平成 28 年度及び平成 29 年度の入学者全員に案内しました。5 月からはインターンシップフェアに始まる今年度の「実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ」がスタートしました（3 頁参照）。また、四国大学が中心となる創業支援事業も昨年度に開始しました（2 頁参照）。本事業で今年度一番のメインイベントは、8 月のお盆明けに開講した 6 高等教育機関の共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の集中講義でした（4 頁参照）。冒頭には飯泉徳島県知事にも講師として登壇いただくと共に、産業界のリーダー等による講義と OB・OG によるパネルディスカッションを組み合わせた授業を、複数会場をネットで結んで実施しました。10 月には、本事業の中間評価が東京であり、野地徳島大学長ほか 5 名でプレゼンを行い、ヒアリングを受けました。結果はまだですが、現在の取組をしっかりと進めること、また、補助期間終了後にも継続できる体制を早めに構築することの助言を得ました。今年度の取組としては、「FD 地域人材育成フェスタ」（3 月 3 日）が予定されています。充実した内容になるように努めますので、引き続きご理解とご協力をお願いします。

会議の報告

平成 29 年 4 月 26 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 29 年 5 月 16 日	とくしま元気印イノベーション人材育成協議会
平成 29 年 5 月 24 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 29 年 6 月 8 日	COC+本部執行会議
平成 29 年 6 月 12 日	COC+推進機構
平成 29 年 6 月 22 日	教育プログラム開発委員
平成 29 年 7 月 26 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 29 年 9 月 27 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 29 年 9 月 28 日	平成 28 年度事業外部評価委員会の開催
平成 29 年 10 月 25 日	協働事業に関するワーキンググループ兼参加校協働事業実施委員会
平成 29 年 11 月 10 日	教育プログラム開発委員会分野別分科会兼プログラム教員会議分科会

第 4 回とくしま元気印 イノベーション人材育成協議会



平成 29 年 5 月 9 日に協議会を開催し、昨年度の総括と今年度の事業計画について審議しました。

ワーキンググループ兼参加校協働 事業実施委員会



参加校から選出された委員でワーキンググループを構成し、今年度の協働事業の具体的実施案について協議しました。

教育プログラム開発委員会分野別分科会 兼プログラム教員会議分科会



徳島県下でも深刻な“人材不足”の実態に焦点を絞り、現場に近い方から話題提供をいただき、地元就職増加につなげる教育プログラムについて協議しました。

【四国大学】創業支援事業の取り組み

【ビジネスサークル「とくしまサイコー塾」】

夏休み期間を除く毎月第 2 木曜日の夜に定例会を開催し、今年度（11 月時点）、延べ 229 名の学生が参加しています。県内の起業家や業界リーダーの講演やグループワークを通して、「なんのために働くのか?」、「自分らしい生き方とは?」といったことについて真剣に考える場をつくっています。

【とくしま学生ビジネスプラン道場】

平成 29 年 7 月 1 日にキックオフセミナーを開催し、10 月 31 日のエントリー締切では 131 プラン、224 名の参加がありました。1 次審査を通過した参加者は、今後、ブラッシュアップセミナー、2 次審査を経て、平成 30 年 1 月 21 日に徳島グランヴィリオホテルで開催される最終審査に挑戦します。

【社長のかばんもち】

今年度は、4 名の学生が夏休みを利用して、4 社の県内企業の経営者の「社長のかばんもち」に参加し、平成 29 年 11 月 8 日に報告会を開催しました。参加学生からは「将来について一つの考えにしばられず、色々な目線から見ていきたいと思った。」、「自分の将来像が明確になった。」等の意見が聞かれました。

【チャレンジショップ】

平成 29 年 11 月 12 日に 2 名の学生が勝浦町で開催された「かつうら軽トラ市」に出店しました。当日の販売だけでなく、事前調査、コンセプトの策定、予想収支計画の作成、農業者からの仕入、備品調達まで一貫して学生が実施しました。参加学生は予想と実績の計画を振り返り、「実際にやってみて事前調査の必要性を感じることができた。」、「経験を通して販売のテクニックを見つけることができた。また、チャレンジしたい。」等の意見が聞かれました。



とくしまサイコー塾の様子



社長のかばんもちの様子



かつうら軽トラ市の様子

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップの取り組み

徳島大学では、教育カリキュラム改革の1つとして、寺子屋式インターンシップの開発を進めています。寺子屋式インターンシップとは、受入団体側にはメンターを、大学側にはドン（学内メンター）を配置し、相互が密に連絡を取り合い、事前学習から事後の振り返りまで「課題・レポート・ディスカッション」を繰り返す「寺子屋式指導法」を取り入れた少人数制の課題解決型インターンシップです。

現在、15の企業・団体のプロジェクトに臨む学生54名のサポート体制を組み、ドン15名をはじめとした学内の先生方、受入団体様、昨年度インターンシップ修了生の協力を得ながら取組を進めています。

【平成29年度実施状況】

受入団体名	受入担当	企業内メンター	ドン（学内メンター）
徳島県赤十字血液センター	献血推進課主事 藤倉温	血液推進課推進係長 加藤圭一郎	理工・生資 後藤優樹
(株)QLiP	情報責任者 江本大輔	－	理工 浮田浩行
(一社)徳島新聞社	木村直哉	販売局販売部部長 手束泰二	理工 日下一也
港産業(株)	スマートエネルギー部部長 野口栄美、 スマートエネルギー部ロボット課課長代理 金田雅哉	取締役 林正	総科 矢部拓也
(株)テレコメディア	コーポレートデザイン部 平島夏美	コーポレートデザイン部マネジャー 葛籠枝美	COC+推進CD 川崎克寛
徳島トヨタ自動車(株)	管理部 安田壮	業務課係長 有持勝也	総科 松嶋一成
徳島大学大学院社会産業理工学研究部	理工 原口雅宣	理工 原口雅宣	AC部門 花房世規(サポーター)
大塚テクノ(株)	人事総務部 長谷川恵理	人事総務部室長 千葉雄介	－
アール・エスホーム(株)	総務課長 福永真理、畠山千夏	代表取締役社長 多田譲治	創新教育センター 金井純子
(有)椋山農園	堀江祐輔	専務取締役 椋山直樹	生資 橋本直史
(株)松本コンサルタント	総務部 森口浩史、武知奈津実	常務取締役 小林行夫	理工 森本恵美
(一社)Disport	共同代表 高畑拓也、早川尚吾	－	総合教育センター 畠一樹
(株)あわわ	Web事業部マネジャー 大汐哲也	－	教養 北岡和義
廣間組(有)	EA21環境事務局技士 松本恭典	専務取締役 西田靖人	理工 尾野薫
(株)ネオビエント	代表取締役 藍原理津子	－	総科 大淵朗、 学生支援課副課長 宮川純子

【取り組みの様子】



インターンシップフェアの様子

平成29年5月11日に実施したインターンシップフェアには1期生（28年度履修生）10名の運営サポートにより行われ、221名が来場しました。



ドンミーティングの様子

平成29年6月、9月にドン（学内メンター）とコーディネーターがインターンシップの効果的な進め方等について協議しました。



インターン生のミーティングの様子

インターン生2期生の取り組みに、1期生が各段階で学生メンターとしてサポートに入り、自身の経験を踏まえたアドバイスを行っています。



ニュースレターの作成の様子

1期生から、今年度のプロジェクトに取り組む2期生を応援したいとの申し出があり、2期生に向けてアドバイスやエールを送る「ニュースレター」を企画、作成し、発行しています。2期生にとって、経験者である1期生のアドバイスは大きな励みになっているとのコメントもいただきました。



(株)ネオビエントでの報告会の様子

1期生がさらなるキャリアアップを図るため、昨年の経験を活かしプロジェクトを立ち上げインターンシップに取り組んでいます。

【協働】共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」の報告

平成 29 年 8 月 21 日から 24 日にかけて、COC+参加校共同授業「徳島の魅力、徳島で働く」が開催されました。「徳島県の将来ビジョン」「徳島県で働く・暮らす」という二つの観点を学生に伝えることを目的とし、徳島大学、四国大学、四国大学短期大学部、徳島文理大学、徳島工業短期大学、阿南工業高等専門学校が連携して 4 日間の授業を行い、のべ 761 名の学生が受講。地域の様々な分野で活躍する企業や NPO、行政で働くリーダーの方を講師にお迎えし、地域社会の将来ビジョンをご講演いただくと共に、地元で活躍する若手 OB、OG からは自らのワークライフバランスや仕事のやりがいを語ってもらいました。

本講座は、複数の参加校で正課の授業として導入するため、メイン会場での講義を映像でサテライト会場に配信し、参加校の学生がそれぞれのキャンパスで受講できる形式で実施しました。



講義を行う飯泉徳島県知事



パネルディスカッションの様子



徳島大学会場の受講生の様子

【協働】徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～の報告

平成 29 年 12 月 16 日に徳島大学共通講義棟創成学習スタジオ及び 6 階フロアにて、県内大学、高専、高校の学生・保護者を対象に「徳島の魅力、徳島で働く～徳島で働くためのガイダンス～」を実施しました。徳島の未来を創造する①次世代技術、②地域医療・福祉、③6 次産業化、④地域づくり・観光・ICT の各分野において、創造的、革新的な経営をされているリーダーたちの講演や、インターンシップ経験者によるトークセッション、個別企業相談会を通して、多くの人が実は知らない県内企業の今後の産業動向や将来ビジョン、魅力を伝えました。詳細については次号ニュースレターでご報告します。

今後予定の事業

【徳島大学】実践力養成型（寺子屋式）インターンシップ最終報告会（平成 30 年 1 月 20 日／徳島大学）

現在、徳島大学生 54 名が企業等 15 の団体で、組織の課題解決に取り組むプロジェクト型のインターンシップに取り組んでいます。プロジェクトを終えた学生の成果報告会を 1 月 20 日（土）に実施致します。

【四国大学】「とくしまビジネスプラン道場」最終審査会（平成 30 年 1 月 21 日／徳島グランヴィリオホテル）

現在、四国大学でビジネスプランコンテスト「とくしま学生ビジネスプラン道場」を進めています。その最終審査会を 1 月 21 日（日）13 時から実施します。最終審査には、二次審査を通過した 6 チーム（個人を含む）が挑みます。同時に、高校生によるビジネスアイデアに関するプレゼンテーションも行います。

【協働】FD 地域人材育成フェスタ（平成 30 年 3 月 3 日／徳島グランヴィリオホテル）

平成 29 年度の COC+事業で得られた成果と、事業を進める中で明らかになった教育上の課題を、県内外の高等教育機関、自治体、企業、NPO 等の間で共有するためのシンポジウムを開催します。

事務局だより

COC プラス推進本部事務局は 10 月 16 日より新しいスタッフを迎え、現在は 5 名のスタッフで構成されています。また、実践力養成型（寺子屋式）インターンシップは中間報告会を終えました。現在、インターン生たちは受入団体様、ドン（学内メンター）の皆さまと共に最終報告会に向けてプロジェクトのまとめを行っています。

このニュースレターを読まれて興味を持たれた方は、ぜひお気軽に常三島キャンパスの地域創生・国際交流会館 3 階の事務所にお越し下さい。お待ちしております。



徳島大学 COC プラス推進本部事務局（研究・社会連携部地域創生課内）

徳島市南常三島町 1 丁目 1 番地（地域創生・国際交流会館 3F）

電話：088-656-9885 FAX：088-656-9880

e-mail：coc-plus@ml.tokushima-u.ac.jp



文部科学省

地(知)の拠点

